53
180

始

259
53-180

佐久間延二著

酵素的肺病療法

淇竹堂發行

大正
10 4.11
内交

酵素的肺病療法

自序

予ハ肺病療法ノ研鑽ニ從事スルコト茲ニ年アリ、而シテ往年肺癆病論ヲ刊行シ、之ニ據リテ間質性肺炎ノ大要ヲ叙述セリ、爾來之ガ治法ノ究覈ニ從事シ得ルニ從テ之ヲ筆シ、曩キニ間質性肺炎之特殊療法及ビ其原因ト續間質性肺炎之特殊療法トノ二編ヲ著シ、今回更ニ續々間質性肺炎之特殊療法ナル一編ノ稿成リシヲ以テ、此三編ヲ合冊シ酵素的肺病療法ト題シテ之ヲ鉛字ニ附セリ、是レ只其研精ノ順序ト其實驗ノ結果トヲ說述セルノミニ過ギザルナリ。

抑病症及ビ藥物ノ研究ハ遠ク遂古ニ泉源シ、爾來幾多ノ研尋ハ漸次ニ其發達ノ基ヲ爲シテ以テ現時ノ盛域ニ至レルモノナリト雖モ、一言ニシテ之ヲ盡セバ蓋シ臨床上ノ實驗的觀察ニ憑據セルニ非ザルモノナシト謂ハザル可カラズ、然ルニ近世ノ科學的研究タルヤ往々ニシテ吾人ノ疾病乃至治病ノ理ヲ人體外ニ索ムルノ弊アリテ或ハ動物ヲ役シ或ハ試驗管ヲ弄シ、先ヅ學理論ヲ建設シ而シテ之ニ據リテ或ハ病理ヲ解曉シ、之ニ由リテ或ハ藥理ヲ解釋セントス、故ニ縱令實驗的醫學乃至實驗的藥學ノ尊重ス可キモ

ノナルヲ說クナキニ非ズト雖モ、其理論ヲ偏重スルノ結果タルヤ亦是レ其實驗的究察ヲシテ、之ヲ理論ニ適從セシメント爲スニ過ギザルノ觀アリ、特ニ肺疾ノ病理及ビ治法ニ於テ殊ニ其傾向ノ顯著ナルヲ覺ユ、此故ニ今ニ尙ホ醫學ノ實際ト懸隔スルアルハ或ハ其過渡時代ニ於テ免ル能ハザルノ趨勢ナル可シト雖モ、醫術以外ニ醫學アルヤヲ思ハシムルニ至リテハ、畢竟討究ノ不備ナルニ歸着セシメザルヲ得ズ、斯學ヲ研究スルノ士ハ、多少其責ニ任ゼザル可カラザルモノナル可シ、是レ予ノ現代醫學ヲ以テ意ニ滿タザルモノナリト爲シ、世人ノ科學的研究ヲ萬能視スルヲ顧ミズ、單ニ臨床上ノ觀察ノミニ基キ其知見ニ據リテ斯病ノ研講ヲ企圖セシ所以ニシテ、爾來或ハ其病症ヲ考察シ、或ハ其治法ヲ研鑽シ、漸クニシテ其病痾ノ複雜ナルヲ辨識シ、之ニ應ズル二三ノ治法ヲ確知スルヲ得ルニ至リタルハ蓋シ前人未到ノ地境ヲ鑿開セルニ比ス可キモノニシテ、蓋シ亦臨床的觀察ノ科學的研究ト其趣ヲ異ニスルヲ證スルモノナリト謂ハザルヲ得ズ、然リト雖モ所謂研鍊ハ人ノ爲ニ之ヲ做スモノニ非ズ、且古人ノ知者不言ノ箴誡ニ悖リ現代ニ背馳スルノ異議ヲ公表シテ憚ルナキハ或ハ誇論以テ世ニ衒賣スルノ誹アルヤヲ知ラスト雖モ、是レ其使命ノ一片ヲ盡サントス欲スルノ微衷タル而已ニ過ギズシテ、敢テ名ニ近カンガ爲ニ之ヲ爲スモノナルニハ非ザルナリ。

夫レ有學ノ徒ハ、往々ニ其未熟未明ノ治法ヲ豫告スルコトアルモ、世人ハ之ヲ過大視シ、翕然トシテ期セズシテ之ヲ謳歌ス、之レ學アルノ德タルナリ、非學者ノ說ヲナスヤ、其說ヲ說ク所ハ縱令正鵠ヲ誤ラザルモ聽者ハ聞テ却テ先ヅ之ヲ疑ヒ、疑ツテ而シテ後ニ信アレバ則チ復タ再ビ之ヲ疑ハズ、之ヲ以テ其自己ヲ欺カザル所ノ徹底的ノ信解アルニ非ザレバ之ガ說ヲ爲スコトヲ得ズ、之レ非學者ノ德タルナリ、然リト雖モ名論卓說ハ輒チ是レ爾曹ノ糟粕ナリ、由來糟粕ハ時ニ人ヲ醉ハシメザルニ非ズト雖モ陶然タルヲ得シムルノ美酒ニ非ザレバ未ダ以テ天ノ美祿タルヲ談ズ可カラズ、書ニ於テモ亦然リ、文ハ道ヲ貫クノ器ナリト雖モ精華ハ彼ニアリ、書ハ人ニ憑リテ行ハルヽモノナリト雖モ之ヲ呑ムモ還タ其人タルヲ得ズ、此故ニ其叙述スル所ハ、人ヲシテ順適セシムルニ足ルト雖モ、苟クモ讀者ニシテ其自己ノ知能ヲ以テ善ク之ヲ醇化シ、而シテ之ガ活用ノ妙機ヲ悟得スルニ至ルニ非ザレバ未ダ以テ其眞味ヲ估量シ、其眞價ヲ評議シ得ベキモノニハアラザルナリ、況ヤ其糟ヲ餔ヒ其醨ヲ歠ルノ徒ニ於テヲヤ、之ニ模スルニ止マルノミ、夫レ模倣モ亦一ノ進步ナリ、而シテ其小ナルハ泥ミヲ掘シテ其波ヲ揚クルモ乃チ是レ濁リニ入ルノ一步タリ、其大ナルノ模倣ハ殆ド型痕ヲ止メザルニ似タリト雖モ、所謂出藍ノ青ハ模倣ヲ超過スルニ由リテ始メテ之ヲ得ルニ至ルモノナリ、本書ノ刊行ノ主旨

モ亦蓋シ茲ニ存ス、要ハ讀者ノ知槽ニ培ヒ之ニ據リテ之ヲ醇釀シテ而シテ夫ノ美祿タラシムルコトヲ庶幾スルニアルナリ、古人言ハズヤ、三人行ク時ハ必ズ我師アリ、故ニ弟子ハ必ズシモ師ニ如カザルニアラズ、師ハ必ズシモ弟子ヨリ賢ナルニアラズ、道ヲ聞クニ我前ニアリテ術業ヲ專攻スルモノアラバ聖人ト雖モ亦之ヲ師トシテ以シ耻ト爲サズ、況ヤ衆人ヲヤト其善キモノヲ擇テ之ニ從フ茲ニ於テカ斯道ノ發達ヲ期スルヲ得ベシ豈努メズシテ可ナラン哉

大正九年十月下浣ノ日城北ノ淇竹堂ニ於テ　不知足齋素學　佐久間延二誌ス

酵素的肺病療法目次

第一編　間質性肺炎之特殊療法及原因

第一章　緒言……（一）

第二章　間質性肺炎ニ對スル特殊療法……（一六）

其一　急性間質性肺炎ニ對スル特殊療法ノ治驗……（二一）

其二　慢性ニ經過スル所ノ間質性肺炎ニ對スル特殊療法……（四五）

其三　結論……（七二）

第三章　間質性肺炎ノ原因及本態……（八〇）

第二編　續間質性肺炎之特殊療法

第一章　緒言……（八三）

第二章　瘧……（八六）

其一　慢性ニ經過スル間質性肺炎患者ニ瘧ノ發作ヲ來シ而シテ其熱候ノ不定型ナルモノアリ……（八八）

其二　又他ノ間質性肺炎患者ニ於テハ瘧ノ併存スルニ係ハラス殆ド惡寒ナク唯僅カニ微熱ノミヲ呈スルコトアリ……（八九）
其三　間質性肺炎患者ニ特殊療法ヲ行フトキハ往々瘧ノ發作ヲ誘致スルヤヲ疑ハシム……（九二）
其四　微熱若クハ無熱ヲ以テ經過スル患者ニ一回若クハ數回特殊療法ヲ行ヒシ後ニ瘧ノ發作ヲ來スコトアリ……（九五）
其五　病初ヨリ麻拉里亞ノ其體內ニ潛在スルカ爲ニ特殊療法ヲ行フテ其解熱ノ不正ナルモノアリ……（一〇三）
其六　間質性肺炎患者ニ脾腫ノ併存スル時ハ特殊療法ヲ行フト同時ニ規尼涅ヲ與フルヲ必要トス……（一〇六）
第三章　腸窒扶斯樣疾病……（一〇九）
其一　急性間質性肺炎ニ窒扶斯樣疾病ノ併發セルヤヲ思ハシムルモノ……（一一二）
其二　急性間質性肺炎ニ窒扶斯樣疾病及瘧ノ併發セルヤヲ思ハシムルモノ……（一一六）
第四章　葡萄狀球菌……（一一七）
其一　急性間質性肺炎ニ葡萄狀球菌ノ混合傳染セルヲ思ハシムルモノ……（一一八）

其二　急性間質性肺炎ニ葡萄狀球菌及ビ瘧ノ混合傳染セルヲ思ハシムルモノ……（一二〇）
其三　微熱若クハ無熱ヲ以テ經過スル間質性肺炎ニ葡萄狀球菌ノ混合傳染セルヲ思ハシムルモノ……（一二九）
第五章　不明熱……（一四〇）
第六章　結核菌……（一五〇）
其一　つべるくろとさきそいぢん療法ヲ併用セシ治驗……（一七七）
其二　つるべくろとさきそいぢん及び舊つべるくりん療法ヲ併用セシ治驗……（一八三）
其三　舊つべるくりん療法ヲ併用セシ治驗……（一九〇）
其四　舊つべるくりん及びつべるくろとさきそいぢん療法ヲ併用セル治驗……（一九七）
第七章　叙上治法ノ概要……（二一八）
第三編　續々間質性肺炎特殊療法
第一章　緒言……（二二四）
第二章　醱酵素之療病的作用……（二四一）

第三章　殺菌劑之酵素的作用……（二四八）
第四章　銀製劑之酵素的作用……（二五八）
第五章　肺病之銀製劑療法……（二七四）
其一　輕症間質性肺炎ニ對スル膠樣銀ノ治驗……（二七七）
其二　重症間質性肺炎ニ對スル膠樣銀ノ治驗……（二九三）
第六章　膠樣銀ノ間質性肺炎療法ニ於ケル知見……（三〇五）
第七章　水銀製劑之酵素的作用……（三四七）
第八章　肺病之水銀製劑療法……（三五八）
其一　小兒ノ間質性肺炎ニ對スル甘汞ノ治驗……（三六七）
其二　十四五歳以下ノ兒童ノ間質性肺炎ニ對スル撒里矢爾酸水銀ノ治驗……（三六九）
其三　間質性肺炎ニ對スル青酸々化汞ノ治驗……（三七一）
第九章　肺病之銀及ビ水銀製劑ノ混合療法……（三八一）
其一　膠樣銀ト青酸々化汞トノ併用療法ノ治驗……（三八二）
其二　電氣膠樣銀ト電氣膠樣水銀トノ併用療法ノ治驗……（四〇八）
第十章　脾臟之腫大……（四二一）

第十一章　使用藥劑之酵素的作用ナルヲ思フ……（四六九）
第十二章　肺病之膠樣銅療法……（四七五）
第十三章　肺病之膠樣鐵療法……（四九八）
第十四章　肺病之膠樣金療法……（五一五）
第十五章　肺病之膠樣白金療法……（五一七）
第十六章　肺病之電氣膠樣製劑混合療法……（五二三）
第十七章　慢性腸窒扶斯ニ因スル間質性肺炎……（五四六）
第十八章　本療法ノ顚末……（五六八）
附錄　流行性感冒病論

酵素的肺病療法目次終

酵素的肺病療法

佐久間素學著

第一編　間質性肺炎之特殊療法及其原因

第一章　緒言

從來醫師ノ喀血患者ニ遭遇スルカ又ハ肺ニ慢性炎症タル理學的變常ノ存在スルヲ診知スルニ當リテハ常ニ必ズ其病症ノ結核性肺癆タル可キヲ豫想シ或ハつべるくりんノ皮膚反應ヲ檢シ或ハ喀痰中ノ結核菌ノ有無ヲ檢査而シテ其檢査成績ノ陰性ナルモノモ尚ホ其想像ヲ否定スルコトナク或ハ新鮮ナル肺結核ニ於テハ其病初ニハ未ダ免疫ノ成立セザルガ故ニつべるくりん反應ヲ呈スル底ニ至ラザルノ時期アルモノナリト說キ或ハ其結核性病竈ノ未ダ崩潰スルニ至ラザルノ時ニハ喀痰中ニ結核菌ヲ混ズルモノニ非ズト論ジ而シテ直チニ所謂肺癆療法トシテ或ハ轉地療養ヲ勸告シテ之ヲ敬遠シ或ハ結列阿曹駕劑ヲ投與シ或ハつべるくりん又ハ他ノ結核菌製劑若クハ藏化銅液又ハ之ニ類スルモノヲ注射シ他日必ズ其病症ノ結核性タルヲ證明シ得ルニ至ルノ時期

アルヲ豫メ期待スルモノヽ如シ。

這般ノ患者ニ對スル叙上ノ觀念ハ從來多クハ是認セラレテ曾テ非議セラルヽコト無カリシ蓋シ然ル所以ノモノハ其患者ノ經過ヲ久時ニ亙リテ視察スルノ幸機ニ接スルヲ得レバ他日必ズ結核症タルヲ證明シ得ルノ時アルヲ以テ其病初ニ於テ豫期セシ所ノモノハ人ヲシテ事實上一ノ眞理ナルガ如クニ思ハシムルモノナレバナリ

然リト雖モ其發病ノ當初ニ果シテ結核菌ノ爲ニ爾ク發病セシモノナルカ又ハ既ニ肺ニ慢性炎症ノ存在シ其慢性肺炎ノ經過中ニ結核菌ノ傳染ヲ致スアリテ遂ニ結核症ニ移行セシモノナルカハ當然發起スベキノ問題ナル可シト雖モ從來曾テ之ヲ討究セシモノアルヲ知ルコトナシ蓋シこっほ氏ノ結核菌發見ト肺癆患者ノ死體解剖上ニ結核性病竈ヲ認知スルトハ人ヲシテ之ヲ過信シ斯病ノ發生原因ハ既ニ確定シテ更ニ研鑽スベキノ餘地ナキモノト妄信セシムルニ因スルモノナル可シ加之ナラズ彼等ハ結核性疾病ニ對スル細菌學的診査法ノ發達セル現時ニ於テハ往時ノ所謂非結核性肺癆ナルモノハ甚シク減少セリト說クモ尙ホ其非結核性肺癆ヲ絕無ナリト爲ス得ザルニ於テハ彼等ノ認知スル所ノ非結核性肺癆ハ縱令少數ナリト雖モ抑モ如何ナル病原ニ因リテ發起スルモノナルカ之ヲ研究セザル可カラザルモノナルハ敢テ論ヲ俟タザルニ非ズヤ然ルニ漠然トシテ慢性肺炎ハ卽チ肺ノ結核症ナリトナシテ毫モ顧ミルモノナシ然ル如キハ進步ヲ誇稱スル現代醫學ニ於ケル一大瑕瑾ナリト謂ハザルヲ得ズ。

予ハ一般醫學ヲ校舍ニ於テ習得セシ以外ニ師事セシコト無キヲ以テ師說ヲ繼承ス可キノ義務ナク且多年四方ニ流浪シ讀書スルノ暇ナカリシヲ以テ現時ノ書籍ヲ遵奉セザル可カラザルノ識ナク自修自得シ自ラ之ガ說ヲ設クルヲ以テ復タ現代ノ學說ニ憑據セザルモ略ボ之ヲ理解スルニ足ルモノナルヲ知レリ斯ノ如クニシテ斯病ノ診療ニ從事スルコト茲ニ數年漸クニシテ一稱ノ急性及ビ慢性肺炎ノ存在スルヲ認識セシヲ以テ之ヲ間質性肺炎ト命名シ而シテ曩キニ肺癆病論及ビ醫學新論ヲ著述スルヤ間質性肺炎卽チ非結核性肺癆ハ其經過中ニ結核菌ノ傳染スルニ由リテ結核性肺癆ニ轉症スルモノナルヲ以テ間質性肺炎ヲ其病初ニ於テ瘥了スレバ當ニ非結核性肺癆病者ヲ救治スルヲ得ルノミナラズ其肺ニ於ケル慢性炎症ノ亡失ハ培地ヲ喪失セシメテ結核性肺癆ヲ其未發ニ防禦シ且初期ノ結核性病竈ハ或ハ非結核性炎症ノ消穩スルガ爲ニ其蔓延ヲ阻止セラレテ一小部ニ限局シ所謂孤立結核性病竈トナリテ多大ナル害毒ヲ吾人ニ與ヘザルカ或ハ其非結核性炎症ノ治癒ハ結核性病竈ニ營養ノ不給ヲ致シテ終ニ結核菌ヲシテ自滅セシムルニ據リ其病症ノ自然ニ治癒スルモノナル可キヲ說キタリキ今茲ニ其間質性肺炎ノ大要ヲ記スレバ次ノ如シ。

間質性肺炎

間質性肺炎ノ解剖的變化ハ予ノ未ダ知ラザル所ナリ蓋シ斯病ハ其病初ニ於テ死ニ歸スルモノニ非ザレバナリ然レドモ其臨床上ノ所見ニ據リテ想像スレバ其病初ハ氣管枝及ビ肺胞ノ周圍ニ於ケル間質結締組織ノ充血ニシテ慢性ニ發症シテ慢性ニ經過シ其充血ノ久シキニ亙リテ存スル時ハ充血ハ炎症ニ轉ジ或ハ初メヨリ微弱ナル炎症ヲ以テ起リ而シテ其輕微ノ炎症ハ漸次ニ間質組織ニ細胞性ノ浸潤ヲ招致シテ其肥厚增殖ヲ來

サシムルモノヽ如シ之ヲ以テ其充血期ニハ之ヲ消褪セシムルニ容易ナリト雖モ既ニ多少ノ細胞性ノ浸潤ヲ來スカ又ハ間質組織ノ增殖ヲ形成スルニ至リテハ之ヲ治癒セシムルニ常ニ多少ノ日子ヲ要スルモノナリ之レ臨床上ニ知得スル所ナリトス。

本病ノ多數ハ慢性ニ發症シ潛在シテ慢性ニ經過スルモノナルヲ以テ患者ノ多クハ其發病セシ時日ヲ知得セザルモノナリト雖モ或症ニ於テハ從來健全ヲ自覺セシモノニ突如トシテ輕熱中熱又ハ高熱ヲ以テ急性熱性病ノ症狀ヲ呈スルコトアリ或ハ平素多少ノ違和ヲ自覺セルモノニ急劇ニ發熱シ恰モ其際ニ始メテ發病セルガ如キ看ヲナスコトアリ而シテ這般ノ急性症狀ノ亡散セル後ニ若シ後療法ノ宜シキヲ得ザル時ニハ其肺ニ於ケル炎症ハ貽殘シ所謂慢性炎症トナリテ一進一退シ漸次ニ炎症々狀ノ增强ヲ致シテ間質組織ノ增殖ヲ促スモノナリ然レドモ又他ノ症ニ於テ喀血ヲ以テ發症セシガ如キ看ヲ呈スルコトアリ。

這般ノ間質性肺炎ハ老幼男女ヲ問ハズシテ罹患シ通常右肺ノ上部ニ發症シ稀ニハ左肺ノ上部ヨリ發症スルモノ無キニ非ザル可シト雖モ未ダ肺ノ下部ヨリ發症セシモノヲ實驗セズ而シテ其間質ノ炎症タルヤ徐々ニ後下方ニ向テ蔓延スルヲ常トスルガ故ニ其初メニ右肩胛上部ニ發炎セシモノハ肩胛間部若クハ其以下ニ下降シ且其下降スル間ニハ更ニ左肩胛上部ニ炎症ヲ續發シ之レ亦漸次ニ下方ニ向テ炎症ノ蔓延ヲ致スモノナルガ故ニ單ニ右背部ノミノ侵サルヽモノハ少ナクシテ多クハ兩背部共ニ侵サレ而シテ兩背ノ大部ニ理學的變狀ヲ呈スルニ至ルモ尙ホ前胸部ニ其炎症ノ蔓延ヲ來スハ少ナクシテ若シ其炎症ノ前胸部ニ蔓延スルニ至ル時ハ多クハ左胸ニ向テ下行シ右鎖骨下窩ニ理學的變狀ヲ呈スルモノハ亦比較的ニ少數ナリトス爾ク慢性炎症ノ肺ノ間質組織ニ存在スル時ハ啻ニ肺組織ヲ下方ニ蔓延スルノミナラズ或ハ氣管枝粘膜ニ發炎セシムルアリ或ハ被覆肋膜ニ其炎症ノ波及スルコトアリ而シテ其被覆肋膜ノ炎症ニシテ或强度ヲ有スル時ハ所謂滲出機ヲ生ズルヲ以テ偏側若クハ兩側稀ニ前後ノ肋膜腔ニ滲出液ヲ潴溜スルコトアリ之レ無痛性滲出性肋膜炎ハ從來人ノ結核性ナルヤヲ疑ヒシ所以ノモノナリトス。

間質性肺炎ノ經過中ニハ腎炎ヲ發スルアリ肝臟ノ腫大、腹膜炎、多發性神經炎ヲ來スアリ往々脾臟ノ腫大ヲ診知スルコトアリト雖モ斯病ノ爲ニ之ヲ來スモノニハ非ザルナリ。

本病ハ其經過ノ佳良ナルモノハ自然ニ治癒スルコト敢テ絕無ナルニ非ザルガ如シト雖モ之ヲ豫期ス可キニ非ズ而シテ多數ノ症ノ漸次ニ慢性炎症ノ結果トシテ間質組織ノ增殖ヲ來シ其增殖セル組織ニ自然ノ治癒機能ノ發現スル時ハ所謂瘢痕樣ノ收縮ヲ致シテ所謂慢性間質性肺炎卽チ慢性肋膜肺炎ニ陷ルコトアリト雖モ之レ復タ其病症ノ單純ナルハ恐ラクハ稀有ニシテ通規トシテ其經過中ニ結核菌ノ混合傳染ヲ蒙ムリテ所謂結核性肺癆ニ移行スルモノナリ。

〔症候〕 間質性肺炎ノ症候ヲ分ツテ急性症ト慢性症トノ二トス。

急性症 卒然惡寒稀ニ惡寒戰慄ヲ以テ體溫ノ上昇ヲ來シ三十八度乃至四十度若クハ四十度以上ニ發熱シ頭痛腰痛等アリテ屢衂血、發疹、下痢、上腹部ノ疼痛、胸痛、盜汗等ヲ來シ盜汗ノ甚シキコトアリ咳嗽ハ通

常其病初ニ於テ缺如シ其之レアルハ比較的ニ少ナシト雖モ大人ニハ喘息ヲ併發シ夜間ニ咳嗽ノ多キコトアリ小兒ニハ往々氣管枝加答兒ヲ併發シ又痙攣性咳嗽ヲ發スルコト稀ナラズ脉膊ハ通規トシテ頻數ナリト雖モ甚ダ稀ニハ脉數ノ熱候ニ比シテ少キコトアリ而シテ多數ノ症ハ弛張性ノ熱型ヲ以テ經過シ午後ニ惡寒ヲ以テ體温ノ上騰ヲ來スモノナリト雖モ稀ニハ弛張ノ差少ナク稽留熱ニ類スル熱型ヲ呈スルコトアリ而シテ這般ノ熱型ハ不定ノ日子ヲ經過シタル後ニ散渙狀ニ下行シ其分利的ニ解熱スルハ未ダ實驗セザル所ナリ之ヲ以テ斯病ハ一般ニ流行性感冒、麻疹、猩紅熱、窒扶斯、肺炎、肋膜炎等ノ診斷ノ下ニ葬了セラルヽヲ常ナリトス其胸部ニ顯著ナル理學的變常ヲ呈スルノ症ニ於テハ通常單ニ肺炎ト診定セラルヽト雖モ斯病ニ於ケル肺ノ浸潤ハ縱令重惡ノ症ト雖モ夫ノ格魯布性肺炎ニ於ケルガ如ク變肝期ノ濁性ヲ呈スルコトナク又融解期ニ移行スルコトナシ是レ卽チ近來格魯布性肺炎ノ病狀ノ加答兒性肺炎ニ近似スルコト少ナカラズト說ク者アル所以ナリトス。

慢性症 或症ニ於テハ患者ハ其發病ノ時日ヲ覺知セザルガ故ニ無論何等ノ病苦ヲモ自覺セザルモノナリト雖モ仔細ニ其既往ヲ尋ヌレバ午後ニ或ハ倦怠ヲ覺ヘ或ハ頭重ヲ感ジ或ハ作業ニ懶キアリ或ハ惡風若クハ惡寒ヲ自覺スルアリ晩時多少ノ潮熱ヲ告グルアリ盜汗アリシヲ訴フルモノアリ之ニ反シ他ノ症ニ於テハ肩ノ凝リ、神經衰弱症、歇斯的里、胃弱症等ニ惱ムモノアリ單ニ身體ノ次第ニ衰弱シ疲勞シ易キノ故ヲ以テ診療ヲ求ムルモノアルナリ而シテ斯病ハ或期間ハ無熱ニ經過スルコトアリト雖モ例規トシテ午後ニ惡風若クハ惡寒ヲ以テ微熱ヲ發スルニ其惡風惡寒ハ注意セザレバ自覺セザルモノアリ氣候ノ寒冷ナルニ嫁シテ留意セザルモノアリ三十七度五分以下ノ微熱ノ如キハ之ニ習慣スレバ毫モ自覺セザルモノナリト雖モ冬期ハ耐寒性ノ減ズルモノアリ就褥後背筋(セスヂ)ノ冷ユル又ハ脚部ノ冷ユルヲ訴フルモノアリ夏期ハ足部ノ熱感アルガ爲ニ就臥後不快ヲ感ズルモノアリ然レドモ其然ラザル症ニ於テハ發熱スルト共ニ身體ノ倦怠、頭重、頭旋、頭痛、眩暈、耳鳴等ヲ來スアリ又衄血スルモノアリ盜汗ハ殆ド必發ノ一症ナリト雖モ其經過中ニハ盜汗セザル時アルナリ斯ノ如クニシテ漸次ニ身體ノ衰弱ヲ來シ或ハ神經衰弱症或ハ歇斯的里或ハ胃弱症等ヲ來スアリ又心悸亢進ヲ來スアリ月經不順ニ陷ルアリ而シテ多數ノ症ハ身體ノ衰弱スルト共ニ漸次ニ貧血ニ陷リ其甚シキハ帶黃蒼白色ヲ呈シ人ヲシテ往々十二指腸蟲病ニ非ザルヤヲ思ハシムルモノアルナリ咳嗽ハ其病初ニハ缺如スルヲ常トスト雖モ斯ク經過スル間ニ於テハ喘息ヲ發スルモノ少ナカラズ小兒ハ往々痙攣性ノ咳嗽ヲ發スルコトアルナリ而シテ叙上ノ病徵ハ其大體ニ於テ從來ノ所謂肺痨症狀ト一致スルモノナルヲ以テ若シ肺ニ理學的變常ノ存在スルヲ診知スルアレバ直チニ結核菌ノ有爲テ檢索シテ其早期診斷ヲ誇ラントスルヲ一般醫家ノ常套ナリトス。

斯ク慢性ニ經過スル間ニ時トシテ突然惡寒ヲ以テ高熱ヲ發シ一回又ハ二回ノ解熱藥ノ服用ニヨリテ容易ニ下行スルコトアリ然ル若キハ通常之ヲ感冒トナスニ由リ患者ハ感冒ニ罹リ易キヲ告グルアリ若シ這般ノ高熱ニシテ持續スル時ハ卽チ前述ノ急性症ノ發作タルナリ。

斯病ノ斯ク慢性ニ經過スル間ニハ往々喀血ヲ來スニ時トシテハ反覆シテ喀血スルモノアリ然ル時ハ其喀血ヲ以テ病初ト誤認セラルヽコト無キニ非ズ其他併發症トシテ目スベキモノハ肝臟腫大、腹膜炎、胃腸加答兒、胃部ノ發作性疼痛、子宮出血、多發性神經炎、關節炎、頸部淋巴線腫大、ふるんける、かるぶんける、丹毒、蛋白尿、糖尿、口峽炎、背部ノ惡液性あくね、及ビ精神異常等ナリ又發疹スルモノアリ故ニ又此等症狀ヲ以テ診ヲ乞フモノアルナリ。

肺ノ理學的變常　本病ハ其病初ニ於テハ打診上患部ハ輕濁音ヲ呈スルヲ常トスト雖モ時トシテハ其濁性ノ極メテ輕微ナルガ爲ニ注意スルニ非ザレバ之ヲ看過スルコトアルナリ而シテ其打診タルヤ必ズ輕打ス可キモノニシテ若シ强打スル時ハ輕微ノ變濁音ハ之ヲ聽取シ得ザルモノナリ由來打診ハ人ニ由リテ其叩打ノ强弱ヲ異ニシ從テ發音ニ差異アルモノナルヲ以テ予ノ所謂輕濁ナルモノハ人ニヨリテハ打音ノ短若クハ抵抗ノ增加ナル語ヲ以テ之ヲ表示スルコトアルモノナル可シ聽診スルニ其變濁部ニ於テハ單ニ呼吸音ノ減弱シ往々呼息ノ延長ヲ伴フコトアルノミニシテ殆ド他ノ異常呼吸音ヲ聽取スルコトナキモノナリ然レドモ曾テ一患者ニ於テハ其病初ハ打音ニ異常ナクシテ呼吸音ノ粗烈ヲ呈シ次デ打音ノ輕濁ト呼吸音ノ微弱トヲ來セシコトアリタリキ然リ而シテ叙上ノ變常ハ通規トシテ右肩胛上部ニ發生スト雖モ稀ニハ左肩胛上部ニ初發スルコトアルナル可シ。

其發病ヨリシテ或日子ヲ經過スレバ叙上ノ理學的變常ハ漸次ニ下方ニ蔓延シテ肩胛間部若クハ其以下ニ達シ時トシテハ全背面ヲ侵スコトアリ斯ク炎症ノ下方ニ蔓延スルト同時ニ曾テ健全ナリシ反對側ノ肩胛上部ニ炎症ヲ續發シ而シテ復タ其下方ニ蔓延ス然レドモ其病變ノ前胸部ニ蔓延スルハ比較的ニ少ナクシテ其之レアルハ病症ノ重キヲ證スルモノト謂フベシ而シテ多クハ左鎖骨下窩ニ蔓延シ右鎖骨下窩ニ理學的變常ノ發現スルハ之レ亦稀少ナリ爾ク病變ノ肺ノ廣大部ニ蔓延スルニ至ルモ其打音ハ輕濁ニシテ純濁ヲ呈スルコトナク呼吸音ハ微弱ニシテ多少呼息ノ延長ヲ伴ヒ呼吸音ノ粗烈ナルハ少ナシト雖モ或陳舊ノ症ニ於テハ氣管枝音ヲ呈スルコトアリ其水泡音ヲ聽取スルハ更ニ經過ノ久シキ症ナルヲ示スモノナリ。

肺ノ炎症ニ於テハ通規トシテ其炎症部ヲ被覆スル所ノ肋膜ニ炎症ヲ續發スルモノナリトハ夙ニ病理解剖上ニ說ク所ニシテ本病モ亦其規ニ漏ルヽコトナク夫ノ多數患者ノ訴フル所ノ肩ノ凝ハ其被覆肋膜ノ發炎セルヲ語ルモノナル可シト雖モ呼吸運動ノ關係上炎性摩擦音ヲ呈スルコトナキヲ以テ之ヲ徵知スルコト能ハズ然レドモ其肋膜ノ炎症ニシテ或度ニ增强スル時ハ滲出機ヲ生ジ水液ヲ滲出スルニヨリ其炎症滲出液ハ下位肋膜腔ニ流注シ多クハ背面ノ下部ニ潴溜スルモ稀ニハ前面ノ肋膜腔又ハ前後ノ肋膜腔ニ潴溜スルコトアリ而シテ其潴水部ノ打音ハ潴液層ノ厚薄ニヨリテ異ナルモノニシテ若シ薄層ナル時ハ輕濁音ヲ呈シ呼吸音ハ減弱スルニ止マルト雖モ潴液ノ多量ナル時ハ其液量ニ準ジテ純濁ヨリ漸次重濁ヲ呈シ呼吸音ハ其重濁音ニ於テ全ク亡失スルコト一般濕性肋膜炎ト異ナルコトナシ之レ從來濕性肋膜炎若クハ陳舊肋膜炎ト診定セラルヽ症ノ多數ヲ占ムルモノニシテ且從來結核性濕性肋膜炎ハ其病初ニ胸痛ノ缺如スルモノナリト說クアル

ニ一致シ其無痛ノ理由ヲ了解セシムルニ足ルモノナル可シ然リ而シテ這般ノ滲出液タルヤ卽チ炎症性ニ屬シ單純ナル血漿ニ非ズシテ多少ノ刺戟性ヲ有スルモノナルガ故ニ久シク潴溜スル時ハ其部ノ肋膜ニ發炎セシメテ濕性肋膜炎ト區別シ得ザルニ至ル可シト雖モ尙ホ其新鮮ナル症ニ於テハ潴水部ノ肋膜ニ炎症ノ缺如スルノ證左トシテ所謂胸水ト同ジク移動性ニ富ムヲ以テ之ヲ診知スルヲ得ルナリ時トシテハ兩肩胛上部ノ打音ハ純濁性ナルコトアリ之レ恐ラクハ單純ナル間質性肺炎ニ非ズシテ其部ノ被覆肋膜ニ已ニ癒著ノ存スルアリテ所謂包裹性滲出性肋膜炎ノ存スルニ由ルモノナル可シ稀ニ腋窩若クハ胸壁等ニ流注スルコトアリ。

本病者ノ經過中ニ續發スル所ノ肝臟腫大、腹膜炎、多發性神經炎、喀血及ビ子宮出血等ノ病狀ハ茲ニ省略ス須ラク肺癆病論ヲ一讀スベシ。

〔療法〕其急性症ノ當初ニ高熱ヲ下行セシムルニハ甘汞ヲ用ユルヲ最モ良トス而シテ單ニ甘汞ノミヲ用ヒテ效アリト雖モ常ニ解熱藥ヲ配伍セリ。

處方

甘汞	〇、七	フェナセチン 〇、五
乳糖	〇、五	

右散一包トナシ頓服

之ニ據リテ一回下痢便ノ通ゼシ後ハ常規トシテ左方ヲ處ス

處方

佐氏煎	二〇〇、〇	撒里矢爾酸曹達	四、〇
苦味丁幾	四、〇	薄荷水	一〇、〇

右一日三回食前二日分服

結劑　四號膠囊ニ容レ六個

右一日三回食後二日分服

但シ漸次ニ增量シ服藥ノ久キニ亙ル時ハ〇號膠囊九個ヲ一日量トス

結劑ニ代フルニ佐氏結列阿曹篤丸又ハ結列阿曹篤製劑例之バ炭酸ぐあやこーる若クハちをこーる等ヲ用ヒシコトアリト雖モ其治效ハ結劑ニ及バザルコト遠シ。

叙上ノ方劑ヲ用ユルニ多數ノ患者ハ之ニ據リテ解熱スト雖モ時トシテハ其熱候ノ頑强ニシテ縱令一時ハ甘汞劑ニヨリテ下降スルモ更ニ再ビ熱度ノ上昇スルコトアリ然ルトキハ左劑ヲ與フルヲ常トセリ。

處方

佐氏解熱丸	各〇、五

右一包トナシ四包ヲ與フ朝夕一包頓服

佐氏解熱丸ハ斯病ノ高熱ニ對シ神效アルモノナリト雖モ亦無效ナルコトアリ然ル症ニハ他ニ用ユベキノ藥劑ナキヲ以テ止ムヲ得ズ其經過ヲ觀察シテ適當ナル處置ヲトルコトヽナセリ。

急性症狀ノ既ニ亡散シテ肺ニ遺殘スル所ノ炎症及ビ慢性ニ發症シ慢性ニ經過スル所ノ炎症ニ對シテハ叙上ノ佐氏煎劑及ビ結劑ヲ持續シテ服用セシメタリ而シテ其治效ノ確實ナルモノモ或長キ日子ヲ費スヲ常トス所謂續發症タル肝臟腫大、腹膜炎、多發性神經炎、子宮出血、喀血及ビ喘息等ニ對スル治法ハ之ヲ省略ス宜シク肺癆病論ヲ參照スベシ。

叙上ハ肺癆病論及ビ醫學新論ニ記述セシ所ノ間質性肺炎ニ對スル予ノ療法ノ大要ニシテ之ニ據リテ啻ニ本病患者ノ多數ヲ治癒セシメ得タルノミナラズ夫ノ肺癆ノ第一期及ビ第二期症ト診スベキモノモ復タ治癒セシメ得タルノ例アルナリ然リト雖モ叙上ノ療法ニ據ル治續ハ唯單ニ肺ノ急性及ビ慢性炎症ニ對スル在來幾多ノ治法ニ比シテ其效果ノ優越ナルヲ證スルノミニシテ敢テ之ニ據リテ間質性肺炎ノ本態ヲ窺知シ得タルニ非ザルナリ此故ニ世人ハ或ハ間質性肺炎ナル新病症ノ果シテ存在スルモノナルヤ之ヲ疑フモノナキニ非ザル可シ然ルニ昨春偶然ナル治驗ハ本病ニ對スル特殊療法ヲ發見シ爾來之ヲ施療セシ日子ハ尚ホ淺クシテ實驗セシ所ノ病數ハ之ニ準シテ多カラズト雖モ其療病的作用ノ確實ニシテ容易ニ其熱候ヲ常態ニ復セシメ且肺ニ於ケル理學的變常ヲ亡散セシメ得ルノ特異作用ハ確乎トシテ間質性肺炎ノ存在スルヲ立證スルニ足ルヲ知ルナリ然ラバ乃チ吾人ハ其特異作用ニ據リテ斯病ヲ來ス所ノ原因ヲ推知シ其炎症ノ性質ヲ洞察シ而シテ從來知得セシ肺炎以外ニ一種ノ肺炎ノ存在スルヲ明瞭ナラシメ得タルモノナリト謂フヲ得ベシ。

現時ノ醫學ノ進歩ハ炳乎トシテ瞭カナリト雖モ未ダ其至ラザル所アルヤ多シ而シテ其進歩ノ基ハ科學的研究ニアリト雖モ這般ノ間質性肺炎ノ如ク其病初ニ死ニ歸スルモノハ殆ドナク既ニ死亡スルニ當リテハ他ノ續發病症ノ却テ其疾病ノ主觀ヲナスモノニ在リテハ死後ノ剖檢ニヨリテ之ガ原因ト病態トヲ究知シ得ベキニ非ズ蓋シ本病ノ末期ハ多クハ結核性ニ移行スルモノニシテ夫ノ結核性肺癆ハ結核性病竈ト氣管枝肺炎トノ併存スルモノナリトハ夙ニ人ノ說ク所ナリト雖モ其氣管枝肺炎ノ何ナルヤハ措テ顧ミルモノナキハ現時ニ於ケル大勢ナレバナリ此故ニ間質性肺炎ノ本態ヲ究メント欲セバ其病初ニ患部ヲ剔出シテ之ヲ檢スルヲ以テ確實ナル方法ト爲ス可キモノナルガ如キモ然ル如キハ實行シ得ベキニ非ズ之ヲ以テ特殊療法ノ治效アルノ理ニ基キ之ニ據リテ間質性肺炎ノ原因ヲ知得スルハ復タ是レ進歩セル現時ノ細菌的學理ヲ應用スルモノニシテ敢テ誤リタル方法ニ非ザルモノナル可シ。

近代ニ於ケル細菌學ノ發達ハ結核性疾病ヲ其病初ニ證明シテ潛在セル結核性病症ヲ診知セシメ得ルニ至リシヲ誇ルガ如シト雖モ夫ノつべるくりん反應ノ如キハ身體ノ或部分ニ結核性病竈ノ存在スルノ徵候ト爲ス可キモノニシテ敢テ此反應ニ據リテ吾人ノ知ラント欲スル所ノ疾病例之バ肺ノ慢性炎症ヲ結核症ナリト立證スルモノニ非ズ又喀痰中ニ結核菌ノ存在スルヲ證明スレバ呼吸器系ニ結核性病竈ノ存在スルヲ徵知スルニ足ルト雖モ氣管枝壁ノ結核性病竈若クハ肺ノ深部ニ潛在スル孤立結核ノ氣道ニ開口セルモノヨリモ亦之ヲ來スヲ以

テ喀痰中ノ結核菌ハ必ズシモ其理學的變常ヲ呈スル所ノ肺ノ慢性炎症部ノ結核症ナルヲ確證スルモノニ非ズ假リニ喀痰中ノ結核菌ハ肺又ハ氣管枝壁ニ結核性病竈ノ存在スルヲ證スルモノナルヲ以テ這般ノ患者ニ於ケル肺ノ慢性炎症ハ乃チ結核症ト推定ス可キモノナリト爲スモ間質性肺炎ノ病初ニ於テハ多クハ咳嗽喀痰ノ缺如スルモノナルヲ以テ此際ニ喀痰ヲ檢査シテ之ヲ知得ス可キニ非ザルナリ故ニ彼等ハ結核診斷法ノ進歩ハ非結核性肺癆ノ昔時ニ比シテ甚シク減少スルヲ說クト雖モ斯ノ如キハ慢性肺炎ハ卽チ肺ノ結核症ナリト爲ス誤謬ナル看想ニ基ケル結論ニシテ正確ナル診斷ノ根據ヲ有スルモノニ非ズト爲スモ敢テ誣言ニ非ザルナリ然リ而シテ其病初ニびるけい反應ノ陰性ナリシ慢性肺炎患者ニシテ或時日ヲ經過スレバ臨床上及ビ細菌學的檢査上ニ其結核性肺癆ナルヲ立證シ得ルニ至リ且其死後ノ剖檢上ニ肺ニ結核性病竈ノ存在スルヲ證明スルガ如キ實驗ハ人ヲシテ醫人ノ慢性肺炎ヲ養フテ其經過中ニ結核菌ノ傳染ヲ招致シ終ニ結核性肺癆ニ轉症セシメシモノナルヲ悟ラシメズ漫然トシテ其慢性肺炎ハ結核菌ニ據リテ惹起スルモノナルモ其發病ノ日ノ尙ホ淺キガ爲ニつべるくりんニ反應スル底ニ抗毒素ヲ產生セザルニ由リ該反應ヲ呈セザルモノナリトノ詭辯ヲ弄スルモノアルモ敢テ之ヲ疑ハズ故ニ臨床上ニ肺ニ慢性炎症ノ存在スルヲ診知スルアレバ遽々然トシテ直チニ世ノ所謂治結核療法ヲ行ヒ而シテ其治癒ス可キノ時期ヲ失シテ不治ノ病症ニ陷ラシムルアルモ恬トシテ之ヲ顧ミルコトナシ然ラバ乃チ現代ノ醫學モ尙ホ慢性肺炎ノ診療ニ對シテ未ダ其進歩ヲ誇ルニ足ラザルナリ。

近來世人ハ結核性肺癆ノ年々ニ增加スルニ驚キ爭フテ其豫防法ヲ講ゼントス國民ノ保健上寔ニ賀ス可キノ擧タルナリ然レドモ單ニ結核性肺癆ノ結核菌ニ據リテ惹起スルヲ知ルノミニシテ慢性肺炎ノ其病初ハ結核菌ノ干與スルコトナクシテ發生スルモノナルヲ看過スルニ於テハ其講ズル所ノ結核豫防ノ方法ハ果シテ彼岸ニ達シ得ベキモノナルヤ知者ヲ俟テ而シテ後ニ知ルヲ要セザル可シ吾人ハ非結核性肺癆ヲ豫防シ且治療スルノ方法ヲ覺知シテ而シテ後ニ始メテ結核性肺癆ノ豫防法及ビ治療法ヲ研鑽ス可キモノナルニ非ズヤ。

現時ノ定說ニ據レバ細菌的製劑ハ特異ニシテ甲細菌ノ製劑ハ甲細菌性疾病ニ作用シテ治病ノ效アルモ他ノ細菌ニ因スル疾病ニハ毫モ何等ノ治療的作用ヲ呈スルモノニ非ズト此定說ニシテ不易ノ眞理タルモノナリトセバ細菌的特殊療法ニ據リテ治癒スル所ノ間質性肺炎ハ其病症ノ結核菌ニ據リテ發起スルモノニ非ザルヲ立證シテ餘リアリト謂フ可シ然ラバ乃チ特殊療法ニ據ル間質性肺炎ノ治癒ハ啻ニ世ノ所謂肺癆患者ヲ減少セシメ且非結核性肺癆ト結核性肺癆トヲ稍確實ニ辨識セシメテ從來不備ナリシ所ノ結核性肺癆ノ診斷法ヲ補足シ得ルノミナラズ其肺ノ慢性炎症ヲ早期ニ痊了セシムレバ夫ノ結核菌ノ感傳ヲ容易ナラシムル所ノ炎性培地ヲ亡失セシメテ而シテ結核性肺癆ニ轉症スルヲ其未發ニ防止シ得テ所謂結核豫防ノ目的ヲ遂行シ得ルヤ明カナリ加之ナラズ這般ノ特殊療法ヲ慢性肺炎ニ行フテ而シテ貽殘スル所ノ病竈ハ略ボ之ヲ結核性病竈ト認定スルモ敢テ不可アルコトナキモノナルヲ以テ若シ其貽殘スル所ノ結核性病竈ニシテ夫ノ孤立結核ト同ジク無害ニ經過スルモノナリセバ敢テ加療スルヲ要セザルモ尙ホ有害作用ヲ呈スルモノナルニ於テハ茲ニ始メテ純粹ナル結核性病竈ニ對スルノ治法ヲ研鑽スルノ新路ヲ開拓シ得ベシ蓋シ現時ニ於ケル肺癆療法ノ研究ハ非結核性肺

癆ト結核性肺癆ト同時ニ同所ニ存スル混合的病症ニ對シテ行フモノナルヲ以テ夫ノつべるくりん又ハ藏化銅液等ノ注射療法ノ如キハ或ハ非結核性炎症ヲ增惡セシメテ其病症ヲ重惡ナラシメ而シテ結核性病竈ニ對スル效果ヲシテ不明ニ歸セシムルモノナルヤモ未ダ知ル可カラザルモノナレバナリ之ヲ以テ間質性肺炎ニ對スル特殊療法ハ肺癆ノ豫防上及ビ治癒上ニ極メテ緊要ナル實驗タルヲ深ク信ジテ疑ハザルナリ是レ予ノ茲ニ本編ヲ草スル所以ナリトス。

第二章　間質性肺炎ニ對スル特殊療法

間質性肺炎ニ對スル特殊療法ハ偶然ノ發見ニ係ハルモノニシテ敢テ細菌學的ニ斯病ヲ研究シ其結果ニヨリテ獲得セルモノニ非ズ故ニ其顚末ヲ記述シ而シテ四五ノ治療病歷ヲ併記シテ以テ其治效アルヲ證スベシ。

第一病例　佐藤某女　十九才

本患者ハ大正四年一月五日以降右左前胸第二肋間以上及ビ兩背全部ノ間質性肺炎ト肝臟ノ腫大及ビ腹膜炎トノ診斷ノ下ニ加療セシモ其病症頑强ニシテ治癒ノ傾向少ナカリシ而シテ從來項部ノ毛髮發生際ニ多數ノ毛囊アリシガ二月初メヨリ漸次項部ニ疼痛セシモ敢テ醫師ニ告ゲズ七日ニ至リテ初メテ之ヲ告白セリ依テ診ズルニ項部ノ左側ハ廣ク硬結シ僅カニ腫脹シ按壓スルニ疼痛アリ體溫三十九度三分

處方

石炭酸　四、〇
醋酸鉛　四、〇
水　三〇〇、〇

右項部混布卷法料トス

二月八日　項部ノ硬結ハ依然ナリ而シテ其部皮膚ハ白色ヲ呈スルモ其丹毒ヲ併發セルニ非ザルヤヲ疑フ依テ入院セシム入院後ハ直チニ後頭部ノ毛髮ヲ剪去シ項部及ビ後頭部ニ廣ク佐氏液ヲ塗布セシム入院時ノ體溫三十九度六分脈九十至

二月九日　病症依然タリ此日體溫三十九度五分、夕四十度、脈朝八十四、夕百二十

處方

佐氏　煎（四、〇）　一〇〇、〇
撒里矢爾酸曹達　二、〇
苦味丁幾　二、〇
右一日三回食前分服

結劑　四號膠囊三個
右一日三回食後分服

佐氏解熱丸　各〇、五
右一包量與四包朝夕一包頓服

佐氏塗布劑
右朝夕一回ヅツ項部及ビ後頭部ニ塗布ス

二月十日　諸症依然タリ據リテ丹毒治療液ノ注射ヲ始ム此日體溫朝四十度二分、夕四十度一分、脈朝百、夕百十二

處方

大阪血清藥院製丹毒治療液　五、〇

右十日夕一、〇十一日朝夕各一、〇十二日朝夕各一、〇注射ス

二月十一日　熱候高ク脈搏多シ體溫朝四十度二分、夕四十一度四分、脈朝百二十、夕百三十二

處方

佐氏　煎　四、〇）　一〇〇、〇
撒里矢爾酸曹達　二、〇
ピラミドン　〇、三
苦味丁幾　二、〇
薄荷水　五、〇
右一日三回二日分服

一%硝酸斯篤里規尼涅液　〇、二
右注射ス

結劑　佐氏解熱丸　佐氏塗布劑　各前方

二月十二日　昨夜吐アリ今朝嘔氣アリ此日體溫朝四十度、夕四十度五分、脈朝百二十、夕百二十四

處方

セルテル水　三〇〇、〇
右嘔吐時數回服用

實芟答利斯浸（〇、五）　一〇〇、〇

ストロフアンツス丁幾　一、〇
赤酒　二〇、〇
單舍利別　七、〇

右一日三回分服

チオコール　一、〇
ザロール　二、〇
アスピリン　一、〇
乳糖　一、〇

右散三包トナシ一日三回分服

一%硝酸斯篤里規尼涅液　〇、二

右注射ス

佐氏塗布劑ノ塗布前ノ如シ

二月十三日　丹毒ノ頸部及ビ背部ニ向フ方面ハ佐氏塗布劑ノ塗布ニヨリテ狹小部ニ阻止シ得タルモ頭部ハ毛髮ノ爲ニ其塗布ノ不十分ナリシ結果前額部ニ向テ蔓延セリ依テ全頭髮ヲ切除シ佐氏塗布劑ヲ塗布ス嘔吐アリ體溫朝三十九度六分、夕三十九度、脈百二十六、夕百二十四

處方

實芰答利斯浸劑　斯篤里規尼涅液注射　各前ノ如シ
チオコール　一、〇
ザロール　二、〇
アスピリン　一、〇
ピラミドン　〇、三
乳糖　一、〇

右散三包トナス一日三回分服

二月十四日　嘔吐止マズ此日體溫朝三十九度五分、夕三十九度九分、脈朝百二十八、夕百十二

處方

樟腦油　一、〇

右注射ス

一%斯篤里規尼涅液　〇、二

右注射ス

二月十五日　嘔吐止マズ蝟蟲一疋吐出ス顏面ノ丹毒ハ益々蔓延シ殆ド上唇ニ及ビ耳殼亦侵害セラル然レドモ頸部及ビ背部ニハ毫モ蔓延ノ兆ナシ此日體溫朝四十度二分、夕三十九度七分、脈朝百〇四、夕百二十

處方

サントニーネ　〇、〇五
乳糖　〇、五

右一包トナシ即時頓服

フエナセチン　〇、六
ピラミドン　〇、二
カンフル　〇、二
乳糖　一、〇

右散二包トナス今夜一包明朝一包頓服

セルテル水　三〇〇、〇

右飲料

樟腦油　一、〇

右注射ス

蟲ニ大阪血清藥院製丹毒治療液ヲ注射セシモ效ナシ依テ此日午後傳染病研究所製丹毒治療液及ビ連鎖狀菌血清ノ注射ヲ試ム

處方

丹毒治療液　五、〇

右十五日夕一、〇　十六日朝夕一、〇宛　十七日朝夕一、〇宛注射ス

連鎖狀球菌血清　二〇、〇

右注射ス

二月十六日　體溫朝三十九度五分、夕三十七度八分、脈朝百、夕百

二月十七日　丹毒症狀依然タリ諸種ノ內服藥ヲ廢シ單ニ左劑ノミヲ與フ此日體溫朝三十九度六分、夕三十七度六分、脈朝百二十、夕九十二

處方

鹽酸リモナーデ　一〇〇、〇　沃度丁幾　五滴
メンタ水　五、〇

右一日三回分服

二月十八日　體溫朝三十八度四分、夕三十五度七分、脈朝九十六、夕九十二

二月十九日　丹毒症狀輕快シ且從來存セシ兩肺ノ濁性輕減シ呼吸音亦佳良トナレリ此日體溫朝三十八度六分、夕三十五度九、脈朝九十六、夕百〇二

處方

佐氏液（四、〇）	一〇〇、〇
ピラミドン	〇、三
苦味丁幾	二、〇
單舍利別	五、〇
右一日三回分服	
炭酸ゲアヤコール	一、〇

予ハ本患者ニ於テ丹毒治療液若クハ連鎖狀球菌血清ノ間質性肺炎ニ對シ其炎症ヲ消退セシムルノ作用アルヲ偶然ニ知得シ之ニ據リテ斯病ニ對スル效果ノ如何ヲ研究スルノ念ヲ惹起セリ然ルニ三月十一日ニ至リ本患者ヲ診スルニ再ビ右肺全部及ビ左肩胛上部左前胸第三肋間以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音ノ微弱ナルヲ知レリ之ヲ以テ丹毒治療液若クハ連鎖狀球菌血清ノ斯病ニ對スル治效ノ微弱ナルヲ推知シ而シテ多價連鎖狀球菌わくちんヲ使用センコトヲ思ハシメタリ

乳糖	一、〇

右散三包トナス一日三回分服

鹽酸沃丁劑　前方

二月二十一日　丹毒症狀殆ド亡失シ肺ノ病變モ亦佳良ニシテ殆ド理學的異狀ヲ認メズ然ルニ項部ノ右側ノ尙ホ腫脹硬結シ微ニ波動アリ依テ切開シテ粘稠ナル膿汁ヲ泄セリ、此日體溫朝三十九度二分、夕三十六度三分、脈、朝百〇四、夕九十

二月二十二日　全身症狀佳良ニシテ體溫朝三十六度五分、夕三十六度五分、脈朝七十、夕百

此日鹽沃劑ヲ休止シ佐氏液劑及「ゲアヤコール」劑ヲ投與シ且持續シテ服用セシメタリ

三月六日　全治退院ス

次ニ從來加療セシ主要ナル病歷ヲ記述スルニ急性症ト慢性症トニ區別スルノ便宜ナルヲ信ズ

其一　急性間質性肺炎ニ對スル特殊療法ノ治驗

第二病例　澤畔某男　二十八才

夜間發熱ノ故ヲ以テ往診ヲ乞フ

大正四年三月十五日夜診ス　兩背ノ全部ト左前胸第二肋間以上ト共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ處々ニ乾性囉音アリ右腸骨窩部ハ打音ニ異常ナクシテ壓痛アリ脈ハ稍軟ニシテ其數少ナク體溫三十九度七分アリ患者云フ頭痛甚シクシテ乾咳多シト

診斷　間質性肺炎　喘息

處方

甘汞	〇、七
乳糖	〇、五
右散一包トナス卽時頓服	
稀鹽酸	二、〇
苦味丁幾	四、〇
橙皮舍利別	一〇、〇
水	二〇〇、〇
右一日三回二日分服　但シ明朝ヨリ服用セシム	

間質性肺炎之特殊療法及其原因

ザロール	五、〇
乳糖	二、〇
炭酸ゲアヤコール	一、五
右散六包トナス一日三回二日分服　但シ明朝ヨリ服用セシム	

三月十七日　諸症依然タリ甘汞服後ニ便通ナシト云フ體溫三十九度五分

處方

甘汞	〇、七
乳糖	〇、五
右散一包トナシ頓服	
蓖麻子油	二五、〇
右甘汞服後二時間ヲ經テ頓服	
ザロール	五、〇
佐氏結列阿會篤丸	十二粒
メンタ油糖	二、〇
右散六包トナス一日三回二日分服	

水　劑　　前方ヲ與フ

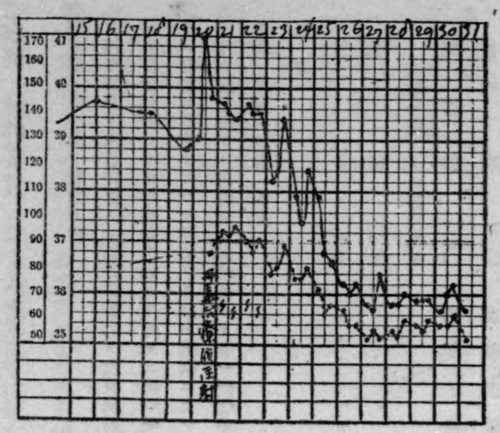
三月十八日　朝體溫三十九度五分

處　方

佐氏解熱丸　各〇、五

右一包トナシ三包ヲ與フ

朝夕一包頓服



三月十九日　夕體溫三十八度八分

三月二十日　午前十時頃體溫三十九度午後二時頃體溫四十一度依テ入院セシム

入院時診スルニ兩肩胛間部中央以上輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ肩

腸部ニ壓痛ナシ精神明瞭ナリ胸部ノ處ニ乾性囉音アリ入院時體溫三十九度八分脈八十六

處　方

鹽沃合劑　散劑　佐氏解熱丸　各別方

傳染病研究所製丹毒治療液　一、〇

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

三月二十一日　背部ノ濁音界狹小ス今朝佐氏解熱丸ノ服用ヲ休止ス此日體溫朝三十九度七分、夕三十九度四分、脈朝九十四、夕九十五

處　方

丹毒治療液　一、〇

右朝夕一回注射ス

三月二十二日　昨夜存セシ兩肩胛上部ノ輕濁音ハ亡失シ呼吸音亦佳良トナル然レドモ依然トシテ乾性囉音アリ胸背部ニ淡キ暗褐色ノ發疹少數アリ而シテ脾臟ノ存在部ニ濁音ヲ現出ス蓋シ脾腫ヲ來セルナリ昨夜治療液ヲ注射セシ部ノ皮膚發赤ス體溫朝三十九度七分、夕三十九度五分、脈朝九十、夕九十

處　方

佐氏煎（四、〇）　一〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　一、五

ピラミドン　〇、二　臭素加里　一、五

ストロフアンツス丁幾一、〇　メンタ水　五、〇

右一日三回食前服用

佐氏ケレオソート丸　六粒

右一日三回食後分服

鹽沃合劑　前方ヲ與フ

丹毒治療液　一、〇

右朝夕一回注射

三月二十三日　體溫朝三十八度二分、夕三十九度四分、脈朝七十八、夕八十八

三月二十四日　體溫朝三十七度九分、夕三十八度四分、脈朝七十六、夕八十

三月二十五日　體溫朝三十七度九分、夕三十六度六分、脈朝七十二、夕六十六

三月二十六日　鹽沃合劑ノ服用ヲ休止ス、體溫朝三十六度二分、夕三十六度二分、脈朝五十二、夕五十二

處　方

佐氏煎劑　佐氏ケレオソート丸劑　各前方

三月二十七日　胸部ニ打診的異常ノ認メザルモ尚ホ少許ノ乾性囉音アリ

處　方

佐氏煎（四、〇）　一〇〇、〇　臭劑　一、五

ストロフアンツス丁幾一、〇　杏仁水　四、〇

メンタ水　五、〇

右一日三回食前服用

佐氏ケレオソート丸　九粒

右一日三回食後分服

三月三十一日　全治退院ス此際乾性囉音ハ全ク亡失セリ

第三病例　福田某男　二十五才

十七歲ノ時ニ肋膜炎ニ罹リ其際ニ喀血セシモ其後ハ何等ノ異常ヲモ自覺セザリシニ昨年某工場ニ入ルニ際シ體格檢査ヲ受ケシニ肋膜炎貽殘スト云ヘリ然レドモ其病症ノ陳舊ナルガ故ニ支障ナシトテ就職スルヲ得タリ然ルニ昨日午前九時頃喀痰ト共ニ血液ヲ喀出

シ次デ二回血痰ヲ喀出シ午後四時頃ヨリ發熱シ眩暈アリ且右胸痛アリテ吸氣時ニ增劇ス依テ診ヲ乞フト云フ

大正五年四月十二日　診ス右胸全背部及ヒ左胸肩胛下隅以上ハ共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ他ニ異常ナシ體溫三十九度七分

診斷　間質性肺炎

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　鹽酸モルヒネ　〇、〇二
杏仁水　八、〇　法列兒水　十滴
苦味丁幾　四、〇
右一日三回食前二日分服

結劑　四號膠囊六個
右一日三回食後二日分服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

四月十四日　高熱依然タリ

處方

佐氏煎劑　劑結　各前方
特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、二五
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

四月十六日　熱候少シク下降ス夜間咳嗽多クシテ喘鳴アリト（喘息）

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　臭素加里　三、〇
ストロフアンツス丁幾　二、〇　杏仁水　八、〇
右一日三回食前二日分服

結劑　前方ヲ與フ
特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

四月十八日　熱候大ニ下降ス

處方

佐氏煎劑　結劑　各前方
特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、五
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

四月二十日　兩胸背部ノ濁性大ニ減シ咳嗽亦減少ス

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　杏仁水　八、〇
苦味丁幾　四、〇
右一日三回食前二日分服

結劑　前方
特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

四月二十三日　兩胸背部ノ理學的變常ハ全ク亡散シ其所謂陳舊肋膜炎ナル病症ノ存在ヲ微知スルコトナシ

處方

佐氏煎劑　結劑　各前方
特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス

四月二十五日　各前方ヲ處ス

第四病例　相樂某男　二十四才

從來健全ナリシガ約一ヶ月程以前ニ喀痰中ニ血液ヲ混セシモ醫藥ヲ服スルコト　六日ニシテ止血セリ九月二十三日東京醫科大學三浦內科ニ診ヲ乞ヒ左ノ處方ヲ得タリ然レドモ故アリテ服藥セザリシ

處方（三浦內科）

ゾーダール　〇、八　乳糖　一、五
右分三包一日三回分服

然ルニ本月二十日惡寒戰慄ヲ以テ發熱シ少シク咳嗽アリ盜汗アリ從來左ノ肩ノ凝ルニ惱メリト云フ

四月二十八日　全治休藥

本患者ノ治績ニ據リテ世ノ所謂陳舊肋膜炎ナル者ヲ推考スルニ其病症ノ眞ニ肋膜炎ノ久時存在スルノ結果トシテ肋膜ニ肥厚ヲ來シ爲ニ濁音及ヒ呼吸音ノ減弱若クハ亡失ヲ呈スル者ナリセバ叙上ノ治療ニ據リテ斯ク短時日ノ間ニ其肥厚ノ亡失スル理由ノ存在ス可キ者ニ非ザルナリ之ニ據リテ從來唱道セシ所ノ陳舊肋膜炎ナル病症ノ或數ハ其部ニ慢性間質性肺炎ノ存在スル者ナルヲ知ルニ足ルナリ

大正四年十月二十九日　診ス右胸全背部ハ打音輕濁ヲ呈シ聽診スルニ右肩胛下隅以上ハ呼吸音微弱ニシテ右肩胛下部ハ呼吸音粗烈ナリ右鎖骨下窩ハ打音ニ少シク抵抗アリ他ノ肺部ハ打音ニ異常ナキモ呼吸音ハ一般ニ弱シ背部ニあくれアリ體溫三十九度

診斷　間質性肺炎

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　四、〇
杏仁水　八、〇　苦味丁幾　四、〇
メンタ水　一、〇〇

右一日三回食前二日分服

結　劑　　四號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　　四分一筒

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

十月三十一日　午後體溫三十八度五分

處　方

佐氏煎劑　結劑　　各前方

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　　二分一筒

右注射ス

十一月二日　午後體溫三十七度五分

第五病例　田代某男　二十二才

去月三十日頭痛アリ翌三十一日人ノ勸メニヨリあすぴりん〇、七ヲ頓服セシニ多量ノ發汗アリ發汗後約一時間程ヲ經テ寒戰ニ次テ發熱シ幣來醫療ヲ加フルモ熱候下降セズ四五日來體溫朝ハ三十八度九分乃至四十度夕刻ハ四十度アリシ而シテ二三ノ醫師ハ皆其腸窒扶斯ニ非ザルヤヲ疑フ依テ診ヲ乞フト云フ

大正四年九月八日　診ス兩肩胛下隅以上輕濁音ヲ呈シ呼吸音微弱

ナリ他ニ異常ナシ依テ間質性肺炎ト診定シ入院スベキヲ告グ

九月九日入院ス體溫晝三十七度五分、夕三十九度二分、脈晝百〇四、夕百〇六

處　方

鹽酸リモナーデ　二〇〇、〇　　赤葡萄酒　二五、〇

右飲料

炭酸ガアヤコール　〇、五　　乳　糖　一、〇

處　方

佐氏煎劑　結劑　　各前方

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　　四分三筒

右注射ス

十一月四日　午後常溫胸部ニ於ケル理學的變常殆ド亡散ス

處　方

佐氏煎劑　結劑　　各前方

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　　一筒（一、〇cc）

右注射ス

十一月六日　全治休藥

右散三包トナス一日三回食後分服

二〇%鹽素酸加里液　　三〇〇、〇

右含嗽料

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　　〇、五

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

九月十日　體溫朝三十八度、夕三十九度五分、脈朝八十、夕百

內服藥ハ各前方ヲ與フ

九月十一日　體溫朝三十七度六分、夕三十八度八分、脈朝九十四夕九十

內服藥ハ各前方ヲ與フ

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　　一、〇

間質性肺炎之特殊療法及其原因

右注射ス

九月十二日　體溫朝三十七度三分、夕三十七度五分、脈朝八十、夕九十八

內服藥ハ各前方ヲ與フ

九月十三日　體溫朝三十七度一分、夕三十九度一分、脈朝八十六夕九十二

內服藥ハ各前方ヲ與フ

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　　一、〇

右注射ス

九月十四日　體溫朝三十七度八分、夕三十八度七分、脈朝八十六夕九十四

內服藥ハ各前方ヲ與フ

九月十五日　體溫朝三十六度三分、夕三十七度、脈朝七十六、夕九十

內服藥ハ各前方ヲ與フ

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　　一、〇

右注射ス

九月十六日　一旦下降セシ體溫ノ再ビ上昇セシニヨリ左方ヲ處ス

體溫朝三十七度五分、晝三十八度、脈朝八十四、晝九十、夕體溫三十六度ニ下降セリ

處方

甘　汞　〇、七　フェナセチン　〇、五
乳　糖　〇、五

右一包トナシ頓服

佐氏煎劑(四、〇)一〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　二、〇
苦　味　丁　幾　二、〇　メンタ水　五、〇

右一日三回食前分服

結　劑　四號膠囊三個

右一日三回食後分服

第六病例　宮崎某男　三十八才

本月十一日某工場ニテ眩暈ヲ來シ卒倒セリ爾來發熱シ歸宅後咳嗽アリ殊ニ夜間ニ咳嗽多シ某醫ニ治ヲ乞フモ今ニ至ルマデ毫モ解熱セズ漸次身體ノ衰弱ヲ來セリ或ハ驚望扶斯ナルヤヲ疑フニヨリ診ヲ乞フト云フ

大正五年四月十九日　診ス左鎖骨下窩以上及ビ左背全部ト右肩胛間部中央以上トハ共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ體溫三十九度五分脈力弱シ

診斷　間質性肺炎　喘息

處方

佐氏煎(八、〇)二〇〇、〇　臭　劑　三、〇

九月十七日　體溫朝三十八度八分、夕三十八度、脈、朝百、夕九十四

內服藥ハ各前方ヲ與フ

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　一、〇

右注射ス

九月十八日　胸部ニ殆ド異常ヲ認メズ體溫朝三十五度八分、夕三十六度九分、脈朝八十八、夕七十六、內服藥ハ各前方ヲ處ス

爾來內服藥ハ佐氏煎劑及ビ結劑ヲ持續シテ服用セシメ十月五日全治退院セシモ尙ホ引續キ二十日迄服藥セリ

ストロフアンツスT幾二、〇　杏　仁　水　八、〇

右一日三回食前二日分服

結　劑　四號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

一%硝酸斯篤里規尼涅液　〇、二五

右上膊ノ皮下ニ注射ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一五

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

四月二十一日　體溫三十七度二分患者云フ咳嗽大ニ減ジ且從來ハ不眠ナリシガ昨夜ハ安眠セリ　內服藥ハ各前方ヲ與ヘ且斯篤里規尼涅液同量ヲ注射セリ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、三

右注射ス

四月二十三日　常溫ニ復シ患部ノ濁性大ニ減ジ且呼吸音モ亦佳良トナレリ　內服藥ハ各前方ヲ處シ且斯篤里規尼涅液同量ヲ注射ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四五

右注射ス

四月二十五日　脈性佳良トナリ胸部ノ變常ハ益々輕減ス　內服藥各別方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　一、〇

右注射ス

四月二十七日　肺部ニ異常ヲ認メズ依リテわくちんノ注射ヲ休止シ內服藥ハ各前方ヲ持續シテ飲用セシム蓋シ間質性肺炎ノ再發ヲ豫防スル目的ナリ

五月二日　左肩胛上部ハ輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ咳嗽ナシ

處方

佐氏煎(八、〇)二〇〇、〇　苦　味　丁　幾　四、〇

右一日三回食前二日分服

結　劑　三號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、五

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

五月五日　左肩胛上部ハ打音ニ異狀ナキモ呼吸音少シク粗烈ナリ

內服藥前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

五月十日　內服藥ハ前方ヲ處ス　肺ニ異狀ヲ認メズ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、七

右注射ス

五月十二日　內服藥ハ各前方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、七

右注射ス

五月十八日　十二日以降內服藥ハ各前方ヲ與ヘ居リシモ此日休藥セシム

一昨十一日壹頃ヨリ下腹ニ疼痛ヲ發シ某醫ニ治ヲ託スルモ腹痛ノ依然トシテ存スルニヨリ入院治ヲ乞フト云フ

大正五年一月十四日　診ス右肩胛間部中央以上及ビ左肩胛上部ハ共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ右腸骨窩部ハ打音輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ黄血ス

診斷　間質性肺炎　腹膜炎

處方

佐氏煎（四、〇）一〇〇、〇　沃度加里　〇、五
苦味丁幾　二、〇　メンタ水　五、〇
右一日三回食前分服

結劑　四號膠囊三個
右一日三回食後分服

佐氏塗布劑
右朝夕一回下腹部ニ塗布

混合連鎖狀球菌ワクチン（大阪血清藥院製三分、石神傳染病研究所製一分）　〇、一五
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

此日午後體溫三十七度、六分脈八十八

一月十五日　體溫朝三十七度、夕三十八度、脈朝八十六、夕九十二、內服藥塗布藥　各前方

一月十六日　體溫朝三十七度七分、夕三十九度、脈朝八十八、夕百、腹痛依然タリ混合「ワクチン」缺品ス

處方

佐氏煎劑　結劑　塗腹劑　各前ノ如シ
大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四
右注射ス

一月十七日　體溫朝三十八度、夕三十八度八分、脈朝九十二、夕百〇八、內服藥塗布藥各前方

一月十八日　諸症依然タリ體溫朝三十七度四分、夕三十九度五分脈朝八十八、夕百

內服藥塗腹藥各前方

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　〇、五
右注射ス

一月十九日　諸症依然タリ體溫朝三十八度、夕三十九度、脈朝八十八、夕百〇八

內服藥塗腹劑各前方

一月二十日　體溫朝三十七度四分、夕三十七度二分、脈朝夕八十

處方

結劑　三號膠囊三個

右一日三回食後分服

佐氏煎劑　塗腹劑各前方

混合連鎖狀球菌ワクチン　〇、三
右注射ス

一月二十一日　腹痛依然タリ體溫朝三十六度五分、夕三十七度二分、脈朝八十、夕八十八

內服藥塗腹劑各前方

一月二十二日　體溫朝三十六度六分、夕三十七度、脈朝八十八、夕八十

內服藥塗腹劑各前方

一月二十三日　體溫朝三十七度一分、夕三十七度八分、脈朝夕八十八

內服藥塗腹劑各前方

一月二十四日　諸症依然タリ體溫朝三十六度九分、夕三十九度二分、脈朝八十八、夕百〇四

內服藥塗腹劑各前方

混合連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス

一月二十五日　脾ノ所在部ニ濁音生ズ患者云フ曾テ廉拉里亞ニ罹リシコトナシト腹痛依然タリ體溫朝三十六度八分、夕三十八度五分、脈朝八十、夕百

處方

鹽酸キニーネ　〇、五
右一包トナシ二包ヲ與フ　朝夕一包頓服

佐氏煎劑　結劑　塗腹劑　各前方

一月二十六日　體溫朝三十六度六分、夕三十七度、脈朝八十、夕

内服藥塗腹劑各前方

混合連鎖狀球菌ワクチン　〇、七

右注射ス

一月二十七日　脾濁音部亡失ス體溫朝三十六度六分、夕三十七度一分、脈朝七十、夕九十

内服藥塗腹劑各前方

一月二十八日　體溫朝三十六度三分、夕三十六度四分、脈、朝七十、夕八十　内服藥各前方

混合連鎖狀球菌ワクチン　〇、八

右注射ス

一月三十日　内服藥塗腹劑各前方

混合連鎖狀球菌ワクチン　〇、九

右注射ス

以上記述スルガ如ク肺ニ炎症々狀アリテ熱候ヲ呈スル患者ニ對シ連鎖狀球菌わくちんヲ用フレバ熱候ト肺ノ病變トハ共ニ容易ニ亡失ス然ル若キハ從來知得セラレタル肺炎以外ニ連鎖狀球菌性肺炎ノ存在スルヲ立證スルモノト謂ハザルヲ得ズ然リト雖モ肺ニ輕濁音ヲ呈シ呼吸音微弱ニシテ所謂間質性肺炎ト診定ス可キ症ニシテ連鎖狀球菌わくちんヲ用ヒ縱令其熱候ハ亡失スルモ肺ノ理學的變常ノ容易ニ消失セザルアリ卽チ第七病例ノ如キハ之ニ屬スルモノニシテ斯ノ如キハ肺ノ症炎ノ比較的陳久ニシテ炎性ノ浸潤頑强ナルカ又ハ他ノ細菌ノ混合傳染セルニ因スルモノナルヤヲ思ハザルヲ得ズ殊ニ結核菌ノ混合傳染シ所謂消耗性ノ熱型ヲ呈スルヲ思ハシムルモノニ於テハ連鎖狀球菌わくちんヲ用ヒテ縱令熱候ノ一時ハ下降スルコトアルモ亦直チニ發病シ毫モ熱度ノ下降セザルモノアルナリ今左ニ一二ノ病例ヲ掲ゲン

第八病例　石井某男　十九才

本患者ハ曾テ本院ニ於テ間質性肺炎、腹膜炎、肝臟腫大ノ診斷ノ下ニ加療セシコトアリト而シテ其後ノ經過ハ聽取セザリシモ本年四月十三日ヨリ二十八日マデ小石川病院ニ入院シ數回靜脈ヶ注射チ受ケシモ效ナク且其不治ノ症ナルチ宣告サレシト云フ目下主タルノ病苦ハ腹部ノ疼痛、一日三四行ノ下痢、頑固ノ發熱及ビ咳嗽殊ニ夜間ニ頻發スル咳嗽ナリト

大正四年五月十日　診スルニ患者ハ衰微甚シクシテ自ラ床上ニ起坐スルチ得ズ脈性不良ニシテ其力弱シ胸部ヲ檢スルニ右胸全背部ト左肩胛上部トハ輕濁ニシテ呼吸音弱ク下腹部ハ少シク膨滿シ叩打スルニ輕濁音チ呈シ觸診スルニ抵抗强ク且壓痛アリ下肢ニ浮腫アリ

診斷　間質性肺炎　腹膜炎　喘息

處方

佐氏煎（五、〇）一〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　二、〇
臭素加里　一、五　ストロフアンツス丁幾一、〇
沃度加里　〇、五　杏仁水　四、〇
阿片丁幾　一、〇　薄荷水　五、〇
右一日三回食前分服

結劑　四號膠囊三個
右一日三回食後分服

一％撒曹水　三〇〇、〇
右浣腸料

佐氏塗布劑
右朝夕一回下腹部ニ塗布ス

一％硝酸斯篤里規尼涅液　〇、二五
右上膊ノ皮下ニ注射ス

此日體溫入院時三十五度六分、夕三十八度七分、脈入院時七十四、

二月二日　諸症輕快ス

處方

結劑　二號膠囊三個
右一日三回食後分服

佐氏煎劑　塗腹劑　各前方

二月五日　腹腸部ノ病變ハ全ク亡散ス然レドモ兩肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ此日退院ス

爾來外來患者トシテ加療セシニ三月ニ至リ兩肩胛上部ノ病變殆ド亡失セシモ同月二十六日發熱シ喀血アリ咯痰中ニ血液ヲ混ジ腹部ノ疼痛再發セリト之ヲ診スルニ右肩胛間部中央以上ト左肩胛間部上三分一以上トハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ左腸骨窩部ハ輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ越テ四月ニ至リ胸腹部ノ變常ハ亡失セリ

夕七十八

五月十一日　體溫朝三十七度二分、夕三十九度一分、脈朝八十、夕八十四、各前方ヲ處ス

五月十二日　體溫朝三十六度九分、夕三十九度五分、脈朝七十八、夕八十八

結劑ヲ除キ各前方ヲ處ス

處方

結劑　四號膠囊四個

右一日三回食後分服

佐氏解熱丸　各〇、五

右一包トナシ二包ヲ與フ　朝夕一包頓服

樟腦油　一、〇

右注射ス

五月十三日　體溫朝三十六度三分、夕三十八度四分、脈朝八十、夕八十、各前方ヲ處ス

五月十四日　體溫朝三十六度一分、夕三十八度九分、脈朝七十八、夕九十　各前方ヲ處ス、但シ佐氏解熱丸ノ服用ヲ休止シ結劑ヲ四號膠囊五個一日量ニ增加ス

傳染病研究所製丹毒治療液　一、〇

右注射ス

五月十五日　體溫朝三十六度四分、夕三十七度七分、脈朝六十四、夕七十八、各前方ヲ處ス

傳染病研究所製丹毒治療液　一、〇

右朝夕一回注射ス

五月十六日　夕刻診スルニ兩肩胛上部ニ異常ナク右肩胛上部ノ呼吸音ハ粗雜ナリ脈少シク力アリ此日體溫朝三十五度七分、夕三十八度九分、脈朝七十二、夕八十二、各前方ヲ處ス

傳染病研究所製丹毒治療液

右朝一、〇cc夕二〇cc注射ス

五月十七日　體溫朝三十六度、夕三十六度七分、脈朝六十、夕七十、各前方ヲ處ス

五月十八日　體溫朝三十六度八分、夕三十六度二分、脈朝六十六、夕六十四、各前方ヲ處ス

五月十九日　體溫朝三十六度九分、夕三十七度三分、脈朝六十六、夕七十、各前方ヲ處ス

五月二十日　右肩胛上部及ビ下部ハ輕濁ニシテ呼吸音弱シ咳嗽ナシ腹痛緩解シ下痢亦ナシ、體溫朝三十六度九分、夕三十七度、脈朝夕七十二

處方

佐氏煎（五、〇）　一〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　二、〇、

苦味丁幾　二、〇　メンタ水　五、〇

右一日三回食前分服

結劑　三號膠囊六個

右一日三回食後分服

佐氏解熱丸　各〇、六

右一包トナシ二包ヲ與フ　朝夕一包頓服

佐氏塗布劑ヲ朝夕塗腹スルコト前ノ如シ

五月二十一日　夜診スルニ右肩胛上部ハ濁音ナ呈シ呼吸音弱ク少許ノ水泡音アリ右肩胛下部ハ輕濁ニシテ普通ノ呼吸ニテハ只呼吸音ノ減弱スルノミナレドモ深呼吸ヲナサシムル時ハ呼吸音粗烈ニシテ且水泡音及ビ乾性囉音アリ、體溫朝三十六度八分、夕三十七度、脈朝七十、夕六十四

處方

結劑　四號膠囊七個

右一日三回食後分服

佐氏煎劑　佐氏解熱丸　佐氏塗布劑ノ塗腹　各前ノ如シ

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　〇、五

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

五月二十二日　右肩胛上下部ノ打音ニ異常ナク右肩胛上部ノ呼吸音ハ殆ド健常トナリ右肩胛下部ノらっせるハ減少ス、體溫朝三十七度七分、夕三十八度六分、脈朝六十六、夕七十四、佐氏解熱丸ヲ止メ他ハ前方ヲ與フ

五月二十三日　右肩胛下部ノ水泡音ハ殆ド亡失スルモ尙ホ少許ノ笛聲アリサレド打音ニ異常ナシ、體溫朝三十七度四分、夕三十七度九分、脈朝七十四、夕八十、佐氏煎劑　結劑　塗腹劑各前方ヲ處ス

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　〇、七五

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

五月二十四日　右背全部及ビ左肩胛下隅以上ハ輕濁ニシテ呼吸音弱ク且右肩胛下部ノ水泡音ハ增加シ少シク咳嗽アリ而シテ肩胛間部ノわくちん注射部ハ極メテ微ニ發赤ス、體溫朝三十八度一分夕三十八度、脈夕朝八十六

處方

佐氏煎（五、〇）　一〇〇、〇　撒曹　二、〇

杏仁水　四、〇　苦味丁幾　二、〇

メンタ水　五、〇

右一日三回食前分服

結劑　四號膠囊八個

右一日三回食後分服

佐氏塗布劑ヲ朝夕塗腹スルコト前ノ如シ

五月二十五日　體溫朝三十七度八分、夕三十八度、脈朝八十、夕七十四、內服藥各前方ヲ處ス

五月二十六日　兩胸ノ背面ニ於ケル濁音ハ皆消失シ只右肩胛下部ノミニ殘殘シ且同部ニ水泡音及ビ笛聲アリ而シテ一旦常溫ニ復セシ體溫ハ二十二日以降昇騰シ下降セザルヲ以テ再ビ佐氏解熱丸ヲ試用ス體溫朝三十七度九分、夕三十八度、脈朝夕八十二

處方

佐氏解熱丸　各〇、五

右一包トナシ二包ヲ與フ　朝夕一包頓服

結劑　四號膠囊九個

右一日三回食後分服

佐氏瓶劑　塗腹劑　各前方

五月二十七日　體溫朝三十七度四分、夕三十八度二分、脈朝七十六、夕八十二、各前方ヲ處ス

五月二十八日　體溫朝三十七度八分、夕三十八度八分、脈朝八十夕八十四、各前方ヲ處ス

五月二十九日　體溫朝三十七度三分、夕三十八度二分、脈朝八十二、夕九十、各前方ヲ處ス

五月三十日　脾臟ノ所在部ニ濁音ヲ生ズ、體溫朝三十七度二分夕三十七度九分、脈朝七十六、夕八十六

處方

鹽酸キニーネ　〇、五

右一包トナシ二包ヲ與フ　朝夕一包頓服

佐氏瓶劑　結劑　塗腹劑　各前方

五月三十一日　體溫朝三十七度二分、夕夕三十七度九分、脈朝七十六、夕八十六、各前方ヲ與フ

六月一日　體溫朝三十六度九分、夕三十九度四分、脈朝七十四夕八十八、各前方ヲ與フ

六月二日　脾臟部ニ濁音ナシ兩肩胛上部及ビ右肩胛下部ハ共ニ濁音ニシテ呼吸音弱シ、體溫朝三十八度四分、夕三十九度二分、脈朝九十、夕百

處方

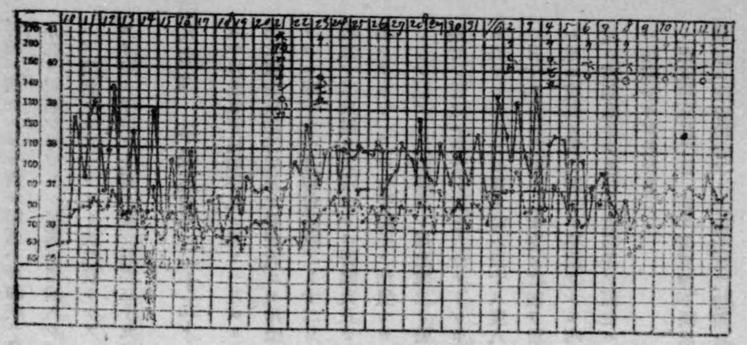
佐氏瓶劑　結劑　塗腹劑　各前方

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　〇、五

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

六月三日　體溫朝三十七度九分、夕三十九度六分、脈朝八十夕百、鹽規ヲ廢止シ各前方ヲ處ス

六月四日　兩肩胛部ノ打音ニ異常ナク右肩胛下部ノ打音ハ輕濁ナリ、體溫朝三十六度六分、夕三十八度四分、脈朝七十六、夕九十二、各前方ヲ與フ



大阪血清藥院製

運鎖狀球菌ワク

チン　〇、七五

右注射ス

六月五日　體溫朝三十八度三分、夕三十七度八分、脈朝八十八、夕八十四、各前方ヲ與フ

六月六日　體溫朝三十七度八分、夕三十七度、脈朝七十二、夕九十二、各前方ヲ與フ

大阪血清藥院製

連鎖狀球菌ワク

チン　一、〇

右注射ス

六月七日　體溫朝三十七度五分、夕三十六度八分、脈朝八十四、夕八十、各前方ヲ與フ

六月八日　體溫朝三十六度四分、夕三十六度一分、脈朝七十六、夕六十　各前方ヲ與フ

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　一、〇

右注射ス

六月九日　體溫朝三十六度八分、夕三十七度二分、脈朝六十四、夕七十四、內服藥塗腹劑各前方ヲ處ス

六月十日　體溫朝三十六度八分、夕三十七度二分、脈朝七十四、夕八十、內服藥塗腹劑各前方ヲ處ス

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　一、〇

右注射ス

六月十一日　體溫朝三十七度、夕三十七度二分、脈朝七十六、夕八十、內服藥塗腹劑各前方ヲ處ス

六月十二日　體溫朝三十七度、夕三十七度五分、脈朝七十六、夕八十二、內服藥塗腹劑各前方ヲ處ス

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　一、〇

右注射ス

斯ノ如ク經過シ肺ノ病變ハ解熱時ニ減退シ發熱時ニ增加シ不定ナリト雖モ體力ハ漸次ニ加ハリ脈性亦佳良トナリ曾テ存セシ下肢ノ

浮腫ハ消失スルモ尚ホ顔面ハ浮腫狀ヲ呈ス然レドモ尿ニ蛋白質ノ存在ヲ證明シ得ザリシ腹痛亦輕減スルモ全ク亡失スルニ至ラズ便ハ下痢狀ヲナスコトアリ軟泥狀ヲナスコトアリ而シテ六月十四日ヨリ漸次熱度ノ上昇ヲ來シ最高三十九度二分ナリ依テ再ビ連鎖狀

第九病例　茅根某男　二十五才

六年以前氣管枝加答兒ニ罹リ一月ヨリ八月マデ加療シ三年経テ再ビ氣管枝加答兒及ビ腎臓炎ニテ治療セリ其後ハ異常ヲ自覺セザリシニ昨年十一月初旬咳嗽アリ十二月十九日發熱セシニ據リ日本橋區ノ某病院ニ入院セシニ腎臓炎及ビ肺尖加答兒存在スト云ヘリ而シテ本年一月中旬腎臓炎ノ治癒セシガ故ニ郷里ニ於テ靜養ス可シトノ話ニテ退院歸省シ爾來郷里ノ醫師ニ治療ヲ託セリ而シテ退院時ノ體溫ハ三十七度五六分ナリシモ退院後ハ體溫三十七度以下ニ降リシコトナク高キ時ハ三十八度八分ニ達セシコトアリ然ルニ二月十六日ヨリ時々四十度ノ高熱ヲ發スルコトアリ目下咳嗽頻發シ殊ニ夜間ニ於テ甚シク咯痰アルモ咳嗽ニ比スレバ少ナシ而シテ常ニ右側臥ヲナス故ニ大轉子ノ部位ニ褥瘡ヲ生セリ是レ仰臥スレバ咳嗽多キガ故ナリ

大正五年三月二日　診ス兩肩胛下隅以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音粗烈ニ氣管枝音アリ左前胸第二肋間以上ハ濁音ニシテ許多ノ水泡音アリ加之ナラズ水泡音ハ心臓ノ上方ヨリ外側腋窩線部ニマデ存セリ脾臓ノ所在部ハ濁音ヲ呈シ右腸骨窩部ハ輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ而シテ患者ハ貧血シ羸瘦セリ、體溫晝三十九度三分、夕三十八度九分、脈夕百〇四

診斷　間質性肺炎　腹膜炎　脾腫大　喘息

處方

佐氏煎（四、〇）一〇〇、〇　臭素加里　一、五
ストロフアンツス丁幾一、〇　杏仁水　四、〇
メンタ水　五、〇

右一日三回食前分服

チオコール　〇、七　鹽酸モルヒネ　〇、〇一
乳糖　一、〇

右散三包トナス一日三回食後分服

鹽酸キニーネ　〇、五

球菌わくちん六、五ヲ注射シ同月三十日ニ至リテ常溫ニ復セリ、七月十三日故アリテ退院シ退院後ハ某醫其治療ニ任セシニ甚シキ弛張熱ヲ呈シテ其後死ニ歸セリト云フ

右一包トナシ二包ヲ與フ　朝夕一包頓服

佐氏塗布劑

右朝夕下腹部ニ塗布ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

三月三日　體溫朝三十七度八分、夕三十九度、脈朝七十四、夕百

内服藥ハ各前方ヲ處ス

三月四日　咳嗽減ズ嘔氣アリテ今朝一回吐セリト、體溫朝三十七度三分、夕三十八度四分、脈朝八十四、夕九十二

處方

セルテル水　三〇〇、〇

右飲料嘔吐時服用

佐氏煎劑　散劑　鹽規　塗腹劑　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、二

右注射ス

三月五日、咯痰ヲ檢セシニ無數ノ結核菌アリ、體溫朝三十七度、夕三十九度、脈朝七十六、夕九十二、各前方

三月六日、體溫朝三十七度二分、夕三十八度五分、脈朝夕七十六

處方

間質性肺炎之特殊療法及其原因

結劑　四號膠囊三個

右一日三回食後分服

佐氏煎劑　塗腹劑　鹽規　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、三

右注射ス

三月七日　體溫朝三十七度、夕三十八度七分、脈朝七十六、夕九十、各前方ヲ處ス

三月八日　脾部ノ濁音殆ド消失ス、體溫朝三十七度三分、夕三十九度八分、脈朝八十、夕八十八

處方

佐氏煎（五、〇）一〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　二、〇
臭剥　一、五　ストロフアンツス丁幾　一、〇
杏仁水　四、〇　メンタ水　五、〇

右一日三回食後分服

結劑　鹽規　塗腹劑　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四

右注射ス

三月九日　體溫朝三十七度五分、夕三十九度、脈朝八十、夕八十六、鹽酸規尼涅ノ服用ヲ休止ス

處方

佐氏解熱丸　各〇、四

右一包トナシ二包ヲ與フ　朝夕一包頓服

一%硝酸斯篤里規尼涅液　〇、二五

右注射ス

佐氏煎劑　結劑　各前方

三月十日、體溫朝三十八度、夕四十度、脈朝七十四、夕百十二、夜間ノ咳嗽大ニ減シ且仰臥スルヲ得ルニ至レリ

處方

佐氏煎（五、〇）　一〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　二、〇

ストロフアンツス丁幾　一、〇　杏仁水　四、〇

鹽酸モルヒネ　〇、〇一

右一日三回食前分服

結劑　佐氏解熱丸　塗腹劑　各前方

一%硝酸斯篤里規尼涅液　〇、二五

右注射ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、五

右注射ス

三月十一日　體溫朝三十七度、夕三十九度六分、脈朝八十八、夕百〇八

處方

佐氏解熱丸　各〇、二五

右一包トナシ四包ヲ與ヘ、午後四時、八時ト明午前八時、十二時トニ各一包頓服

佐氏煎劑　結劑　塗腹劑　斯篤里規尼涅注射　各前方

三月十二日、體溫朝三十八度二分、夕三十九度二分、脈朝八十八、夕百〇四、各前方ヲ處ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

三月十三日　脾臟ノ所在部ニ濁音ヲ生ズ、體溫朝三十八度二分、夕四十度五分、脈朝九十、夕百十二

處方

鹽酸規尼涅　〇、五

右一包トナシ二包ヲ與フ、朝夕一包頓服

佐氏煎劑　結劑　塗腹劑　斯篤里規尼涅注射　各前方

三月十四日、昨夕二回吐アリ且惡寒アリシト、體溫朝三十七度六分、夕三十八度九分、脈朝八十八、夕九十二、各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

三月十五日　體溫朝三十六度六分、夕三十八度四分、脈朝八十、夕九十二

處方

鹽酸規尼涅　〇、五

右爲一包與三包明日午前七時、九時、午後九時各一包頓服

佐氏煎劑　結劑　塗腹劑　斯篤里規尼涅液注射　各前方

三月十六日　左鎖骨下部ノ濁性ハ少シク減ジ水泡音ノ大半ハ亡失シテ僅カニ其二三ヲ存ス心ノ上外側ニ於ケル水泡音モ亦殆ド消失ス脾部ニ存セシ濁音ナシ、體溫朝三十七度、夕三十八度、脈朝七十八、夕八十

佐氏煎劑　結劑　塗腹劑　斯篤里規尼涅液注射　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

三月十七日　體溫朝三十六度、夕三十八度七分、脈朝七十二、夕九十、各前方ヲ處ス

三月十八日　體溫朝三十七度、夕三十八度六分、脈朝八十四、夕九十六、各前方ヲ處ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

三月十九日　體溫朝三十七度一分、夕三十九度四分、脈朝七十八、夕八十八、各前方ヲ處ス

三月二十日　體溫朝三十七度九分、夕三十八度五分、脈朝八十四、夕九十六、各前方ヲ處ス

三月二十一日　昨日來嘔氣アリ食慾不進ニシテ胃部ニ停滯ノ感アリ、體溫朝三十七度、夕三十六度二分、脈朝九十二、夕九十二、佐氏煎劑結劑塗腹劑ヲ與フル外ニ左方ヲ處ス

處方

セルチル水　二〇〇、〇　阿片丁幾　一、〇
右催嘔時六回分服

サントニーネ　〇、〇五　乳糖　〇、五
右散一包トナシ頓服

鹽酸モルヒネ　〇、〇一
右皮下ニ注射ス

三月二十二日　食慾不振依然タリ、體溫朝三十七度、夕三十八度、脈朝九十六、夕八十四

處方

佐氏煎（四、〇）一〇〇、〇　杏仁水　四、〇
薑根丁幾　一、〇　メンタ水　五、〇
苦味丁幾　二、〇
右一日三回食前分服

重炭酸曹達　三、〇　ゲンチアナ末　〇、五

ケレオソート　一滴　薄荷油　一滴
澱粉　一、〇
右散三包トナス一日三回分服

三月二十三日　食慾生ジ嘔氣ナシ、體溫朝三十六度八分、夕三十九度一分、脈朝八十四、夕九十六

處方

佐氏煎（四、〇）一〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　二、〇
ストロフアンツス丁幾　一、〇　杏仁水　四、〇
メンタ水　五、〇
右一日三回食前分服

結劑　三號膠囊二個
右一日三回食後分服

斯ノ如ク本患者ニ對スル連鎖狀球菌わくちんノ作用ハ其熱候ニ對シ甞ニ上記ノ治療日子ノミナラズ四月ニ至ルモ尚ホ依然トシテ無效ナリキ然リ而シテ其左前胸部ニ於ケル濁性ノ輕減、水泡音ノ減失及ビ兩肩胛上部ニ於ケル濁性ノ減退等ノ如キハ之チわくちん療法ノ療病的效果ト假定スルモ他ニ於テハ理學的變常ノ漸次ニ左胸ノ後下部ニ蔓延シ四月中旬ニ於テハ左肩胛下隅附近ハ輕濁音ヲ呈シ呼吸音微弱ニシテ且水泡音アリタリ是ニ據リテ之ヲ觀レバ結核菌ノ混合傳染ヲ想像セシムル所ノ間質性肺炎ノ末期ノ症ニハ連鎖狀球菌わくちんノ治效ノ微少ナルチ證スルニ足ル而シテ本患者ハ五月中旬ヨリ熱候ノ低減チ來シ引續キ治療中ナリ吾人ハ之ニ鑑ミテ混合傳染性間質性肺炎ノ治法ヲ他ニ研鑽セザル可カラズ

然リト雖モ又他ニ於テハ高熱ヲ有スル從來ノ第二期肺痨ノ末期ト認ム可キ症ニシテ尚ホ連鎖狀球菌わくちんニテ容易ニ治スルアリ故ニ肺痨ハ其病症ノ如何ニ拘ハラズ之ガ治療ニ任ズル時ハ先ヅ連鎖狀球菌わくちんノ治療ヲ試ミザル可カラズ左ノ一例ノ如キハ卽チ是レナリ

第十病例　上田某女　十七才

十日程以前ヨリ悪寒アリタリシモ某工場ニ就業セリ然ルニ昨今ハ咳嗽頻發シ深吸氣時及ビ咳嗽時ニ右側胸ニ疼痛アリ且熱候高クシテ就業シ得ザルニヨリ病室ニ收容セラレタリト但シ本患者ハ從來數々間質性肺炎ニテ加療セシコトアルナリ

大正四年七月十九日　診ス左胸第三肋骨以上ト左肩胛上部トハ共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音弱ク多數ノ水泡音アリ而シテ左鎖骨下部ハ之チ右側ニ比スルニ少シク膨隆セルチ覺ユ左側胸ノ下部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱ク且少シク摩擦音アリ身體羸痩シ皮色帶黃蒼白チ呈シ皮溫高ク脈力弱ク殆ド結核性肺痨第二期ノ末ニ似タリ

診斷　間質性肺炎

療法

稀鹽酸　二、〇　苦味丁幾　四、〇
薑根丁幾　一、〇　橙皮舍利別　一〇、〇
杏仁水　八、〇　水　二〇〇、〇
右一日三回二日分服

佐氏ケレオソート丸　十二粒
右一日三回食後二日分服

七月二十日　諸症依然タリ　內服藥ハ前方ヲ與フ

大阪血淸藥院製連鎖狀球菌ヌクチン　〇、三
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

七月二十二日　諸症依然タリ　內服藥各前方ヲ給ス

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチソ　〇、五
右注射ス

七月二十三日　右腸骨窩部ハ打音輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ且

下腹痛ヲ覺ユ胸部ノ諸症熱候共ニ依然タリ

處方

佐氏塗布劑　三〇、〇

右毎日一回下腹部ニ塗布ス

鹽苦合劑　佐氏ケレオソート丸　各前方

七月二十四日　左鎖骨下部ノ打診音ハ依然トシテ輕濁音ニシテ呼吸音微弱ナレドモ水泡音ナシ左肩胛上部亦然リ左肩胛下部ハ打音ニ異常ナキモ呼吸音弱ク摩擦音ナシ熱候漸ク減ズ　內服藥及ビ塗布藥前ノ如シ

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　一、〇

右注射ス

七月二十七日　左鎖骨下部左肩胛上部共ニ異常ナク呼吸音ハ少シク粗雜ナリ右肩胛下部輕濁ニシテ呼吸音弱シ熱候亡失ス　內服藥ハ各前方ヲ與フ塗腹亦前ノ如シ

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　一、〇

右注射ス

七月二十九日　全胸部ニ異常ヲ認メズ腹部亦異常ナシ　內服藥塗腹劑各前方

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　一、〇

右注射ス

七月三十一日　兩手腕關節ニ疼痛アリ

處方

稀鹽酸　二、〇　薑根丁幾　一、〇
橙皮舍利別　一〇、〇　苦味丁幾　四、〇

水　二〇〇、〇

右一日三回二日分服

佐氏ケレオソート丸　十八粒　規鐵丸　六粒

右分六包一日三回食後二日分服

佐氏塗布劑

右手腕關節部ニ塗布セシム

八月三日　各前方ヲ處ス

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　一、〇

右注射ス

八月五日　手腕關節ノ疼痛ナシ　各前方ヲ處ス

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　一、〇

右注射ス

八月十七日　五日以降內服藥トシテハ鹽苦合劑及ビ佐氏結丸ヲ服用セシメシニ漸次體力ノ恢復ヲ致シ且胸部ノ病症再發ノ兆ナキニ由リ此日休藥就業セシム

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　苦味丁幾　四、〇

右一日三回食前二日分服

佐氏ケレオソート丸　十二粒

右一日三回食後二日分服

特製連鎖狀球菌ワクチン

右四月十二日〇、一cc　十四日〇、二cc　十六日〇、三cc
十八日〇、四cc　二十日〇、五cc　二十四日〇、六cc　五月五日〇、六cc　八日〇、六cc　注射ス

第十一病例　椎木某女　五十二才

其二　慢性ニ經過スル所ノ間質性肺炎ニ對スル特殊療法ノ治驗

從來肩ノ凝ルコト甚シク其部度灸ヲスヘテ僅カニ一時ヲ凌ギシモ昨今ハ灸治更ニ效ナキニヨリ治ヲ乞フト云フ

大正五年四月十二日　診ス左右肩胛間部中央以上ハ共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ背部ハ一面ニ炎痕アリ他ニ異常ヲ認メズ

診斷　間質性肺炎　惟フニ肺ノ間質組織ニ於ケル炎症ニシテ肋膜ニ蔓延スルトキハ其肋膜ノ炎性刺戟ハ吾人ヲシテ肩ノ凝ヲ感ゼシムル者ナルベシ

處方

本患者ハ斯ノ如ク治療シ特製連鎖狀球菌「ツクチン」ヲ注射スルコト第三回ニシテ肩ノ凝リハ殆ド亡失シ背部ノ間質炎症狀モ亦漸次ニ消褪シ二十日ニ至リテハ全ク理學的變狀ヲ認メザリシ故ニ夫レ

第十二病例　小田○某男

某會社ニ就職ノ約ナリシガ爲ニ木村博士ノ健康診査ヲ受ケシニ肺痨ノ故ヲ以テ破約セラレタリ然レドモ從來遊和ヲ自覺セシコトナシト云フ

大正四年六月十日　診スルニ左右兩側ノ肩胛骨下隅以上ハ輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ他ニ異常ヲ認メズ

診斷　間質性肺炎

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　苦味丁幾　四、〇
瀉荷水　一〇、〇
右一日三回食前二日分服

結劑　三號膠囊六個
右一日三回食後二日分服
大阪血清藥院製連鎖狀球菌ツクチン
右注射スルコト次ノ如シ
六月十日〇、二五cc　十二日〇、五cc　十四日〇、七五cc

ヨリ以後ハ隔日ノ注射ヲ廢シ八日以後ハ單ニ内服藥ノミヲ投與シ而シテ五月十二日休藥ヲ命セリ

十六日一、〇cc　十八日一、〇cc　二十三日一、〇cc
六月十八日　背部ノ理學的變常ハ叙上ノ治療ヲ行フテヨリ漸次下方ヨリ消失シ殆ド異常ヲ認メザルニ至レリ

處方

結劑　三號膠囊十二個
右一日三回食後二日分服
佐氏煎劑　前方

六月二十三日　兩胸背部ハ全ク異常ヲ認メズ

處方

結劑　三號膠囊十八個
右一日三回食後二日分服
佐氏煎劑　前方

六月二十七日　鎌倉ニ避暑スル由ニツキ佐氏煎劑結劑各十二日分ヲ與フ次デ歸京後某銀行ニ奉職シ爾來健全ナリト云フ

第十三病例　松川某男　二十一才

今朝少シク咽頭部ニ疼痛アリテ晝頃ヨリ增症セリト云フ

大正四年八月二十八日　診ス右側扁桃腺ハ少シク發赤ス兩肩胛下隅以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ右鎖骨窩部ハ輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ

診斷　間質性肺炎　腹膜炎　口峽炎

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　沃度加里　一、〇
苦味丁幾　四、〇　メンタ水　一〇、〇
右一日三回食前二日分服
炭酸グアヤコール　一、〇　健胃散　二、〇
右散六包トナス一日三回食後二日分服
一%ピクリン酸液　扁桃腺部ニ塗布ス
佐氏塗布劑　下腹部ニ塗布ス

第十四病例　松居某男　二十二才

七年前ニ重症ノ腦脊髓膜炎ニ罹リ幸ニシテ治セシム右顔面神經痲痺（但シ前額枝ハ侵サレズ）及ビ左手ノ運動萎弱ヲ貽殘セリ十八歲ノ時ニ左側偏頭痛ニ罹リ中年程ニシテ治セリ而シテ爾來時々三十

二%鹽素酸加里液　三〇〇、〇
右含嗽料
大阪血清藥院製連鎖狀球菌ツクチン
右肩胛間部ニ注射スルコト次ノ如シ
八月二十八日〇、三cc　五月五日〇、五cc　九日〇、七五cc　十四日一、〇cc　十九日一、〇cc　二十六日一、〇cc
九月五日　「ピクリン」酸ヲ二回塗布シテ口峽炎消治ス
九月九日　胸背部ノ理學的變常ノ大半ハ亡失シテ只兩肩胛上部ニノミ殘レリ
九月二十六日　兩肩胛上部ニ異常ヲ認メズ而シテ佐氏煎劑散劑ノ内服及ビ佐氏塗布劑ヲ持續シ十月二十三日大阪ニ轉任スルガ爲ニ休藥セリ

九度乃至四十度位ニ發熱スルコトアリ從來ハ發熱ヲ以テ蛔蟲ノ爲ナリトナセリ然ルニ先月二十八日急ニ不快ヲ感ジ食物ヲ攝取スレバ直チニ吐出セリ之ニ據リ健胃散ヲ飲用スルモ依然トシテ食慾進

マズ且時々頭重ヲ感ズ而シテ十八歳ノ時ヨリ背部ニ發疹セリト

大正四年七月二十六日　診ス右背全部及ビ左肩胛間部中央以上ハ輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ背部ニ多數ノ「アクネ」アリ

診斷　間質性肺炎　背部惡液性アクネ、

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　重炭酸曹達　六、〇
苦味丁幾　四、〇　蘆根丁幾　二、〇
メンタ水　一〇、〇
右一日三回食前二日分服

結劑　四號膠囊六個
右一日三回食後二日分服

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン
右肩胛間部ノ皮下ニ注射スルコト次ノ如シ
七月二十六日〇、三cc　二十八日〇、五cc　三十日一、〇cc
八月一日一、〇cc　八月三日一、〇cc

第十五病例　松本某女　十二才

昨年六月頃腹膜炎ニ罹リ附近ノ某醫ノ治療ヲ受クルコト約半月程ニシテ赤十字病院ノ診療ヲ受ケタリ而シテ昨今ハ病症既ニ治癒セリト附近醫師ノ談ナレドモ尚ホ腹痛アリ一日二回位下痢シ且時惡寒スルアリ依テ診ヲ乞フト云フ

大正五年四月十日　診ス右胸全背部及ビ左胸肩胛間部中央以上ハ共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ心窩部ニ抵抗アリ壓痛アルニ

七月三十日　氣分大ニ爽快ニシテ食慾少シク進ム頭重ナク又肩ノ凝ルコトナシト云フ右肩胛上部ノ輕濁ニシテ呼吸音ノ微弱ヲ呈スルノミニテ他胸部ニ異常ナシ

處方

結劑　四號膠囊十二個
右一日三回食後二日分服

佐氏煎劑　前方ヲ給與ス

八月一日全背部殆ド異常ナシ患者云フ從來存セシ右上肢ノ筋痛亡散セリト

八月三日肺部ニ異常ナシ內服藥前方ヲ與フ爾後來院セズ

茲ニ一言附記スベキハ本患者ノ往年患ヒシ所ノ腦脊髓膜炎ハ果シテ正確ナル診斷ナリシヤ之ヲ疑ハザルヲ得ズ蓋シ間質性肺炎ハ數々顏面神經痲痺、筋ノ痿弱及ビ惡液性あくね等ヲ來ス者ナレバナリ偏頭痛ニ於テモ亦然リ

リ肝臟ノ腫大セルニ非ザルヤヲ想像スルモ肝緣ヲ觸知シ得ズ下腹ハ少シク膨大シ輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ四肢ノ筋肉ニ提痛アリ膝蓋腱反射亢進ス

診斷　間質性肺炎　腹膜炎　多發性神經炎

處方

佐氏煎（五、〇）一〇〇、〇　沃度加里　〇、五
苦味丁幾　二、〇　單舍利別　五、〇
右一日三回二日分服

ファゴール　〇、五　乳糖　一、〇
右散六包トナス一日三回食後二日分服

佐氏塗布劑　三〇、〇
右朝夕一回下腹部ニ塗布セシム

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン
右肩胛間部ノ皮下ニ注射スルコト次ノ如シ
四月十日〇、一五cc　十二日〇、三cc　十四日〇、四五cc
十六日〇、六cc　十八日〇、六cc　二十日〇、七五cc

四月十二日　諸症依然タリ患者腹痛下痢ヲ訴フルニヨリ轉方ス

處方

佐氏煎（五、〇）一〇〇、〇　沃度加里　〇、五
阿片丁幾　〇、五　苦味丁幾　二、〇
單舍利別　五、〇
右一日三回食前二日分服

ファゴール劑　前方

四月二十日　諸症輕快ス

處方

ファゴール　〇、七五　乳糖　一、〇
右散六包トナス一日三回食後二日分服

佐氏煎劑　前方

四月二十二日　背部ニ殆ト異常ヲ認メザルヲ以テ此日わくちんノ注射ヲ休ム　內服藥ハ各前方ヲ與フ

四月二十四日　わくちんノ增量セルガ爲ニ注射部ニ疼痛アルヲ訴フ依テわくちんヲ變更ス

處方

佐氏煎劑　散劑　塗腹劑　各前方
特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、二五
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

四月二十六日　曾テ本年一月體重ヲ檢セシニ衣服ノマヽニテ六貫五百目アリシト云フ此日衣服ヲ着タルマヽ量リシニ六貫五百五十目アリタリ而シテ其一月ニ比スレバ衣服ノ減ゼシヲ以テ其體重ノ增加セシヲ推知シ得ベシ　內服藥ハ前方ヲ與フ

四月二十八日　胸部ニ理學的變常ナシ腹部ノ膨大去リ壓痛亦ナシ而シテ患者ハ何等病苦ヲ自覺セザルヲ以テ來月ヨリ通學センコトムヽルモ尚ホ暫ラク休校シテ加療スルハ其將來ニ利益ナル

第十六病例　須藤某女　三十九才

一昨々年一月頃ヨリ身體違和アリシガ爲ニ時々醫藥ヲ服セリ然ルニ同年四月中旬ニ至リ肋膜炎ノ存在スルヲ診知セラレ就臥加療シ同月三十日更ニ某病院ニ入院シ在院スルコト約一ケ月ニシテ相州葉山ニ轉地療養シ同年十二月末日マデ服藥セリ而シテ其後ハ異常ナカリシニ昨年六七月頃ニハ甚シク眉ノ凝ヲ覺ヘタリ次デ十月ニ至リ再ビ肋膜炎ニ罹リ加療セルニ拘ハラズ十二月ニ至リ身體重ク少シク運動スレバ直チニ心悸亢進ヲ來シ且下腹以下ニ輕度ノ浮腫アルヲ知得セリ依リテ某醫ニ診療ヲ乞ヒシニ腎臓炎存在スト云ヘリ之ニ由リ本年二月ニ入リ轉地療養セシニ同月八日下腹ノ深部ニ疼痛アリタリ昨今時々惡寒アリ頭重ス昨夕體溫三十七度五分アリシト

大正五年三月九日　診ス兩肩胛上部及ビ肩胛下部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ蓋シ其肩胛下部ノ輕濁ニシテ呼吸音ノ微弱ナルハ人ヲシテ肋膜炎ト誤認セシムル者ナリ左腸骨窩部ハ輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ上下肢筋ニ攣痛アリ膝蓋腱反射ハ亢進シ下腿ニ輕度ノ知覺異常アリ尿ニ蛋白ナシ身體肥胖シ脈力弱クシテ且時々結滯ス

診斷　間質性肺炎　腹膜炎　多發性神經炎

處方

佐氏煎（四〇）一〇〇、〇　沃度加里　〇、五
硫酸苦土　一五、〇　苦味丁幾　二、〇
右一日三回食後半時分服

結劑　四號膠囊二個
右一日三回食後分服

佐氏塗布劑
右朝夕下腹部ニ塗布ス
一%硝酸斯篤里規尼溶液　〇、二五
右上膊ノ皮下ニ注射ス

ヲ告ゲ蓋シ病症ノ潛在スルヲ恐ルレバナリ翌五月五日迄服藥シテ復タ來ラズ

特製連鎖狀球菌ワクチン右肩胛間部ノ皮下ニ注射スルコト次ノ如シ

三月九日〇、一cc　十一日〇、二cc　十三日〇、三cc　十五日〇、四cc　十七日〇、五cc　二十日〇、六cc　二十二日〇、六cc　二十四日〇、六cc　二十七日〇、六cc　三十日〇、六cc　四月七日〇、六cc　九日〇、六cc　十二日〇、七cc

三月十日　體重十九貫目　各別方ヲ處ス　此日便通三回
三月十一日　脈ノ結滯ナシ　各別方ヲ處ス　此日便通一回
三月十二日　此ロ夜ニ入ルモ便通ナシ下腹脹リテ苦シト十二時左劑ヲ與フ

處方

旅那浸（三〇）一〇〇、〇　硫苦　五、〇
右頓服

三月十三日　昨日便通一回アリシ　兩肩胛上部及ビ左肩胛下部ニ異常ヲ認メズ右肩胛下部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ是レ從來肋膜炎ト診定セラレシ者ナルベシ

處方

佐氏煎（四〇）旅那浸（五、〇）　一〇〇、〇
間質性肺炎之特殊療法及其原因

硫苦　一〇、〇
右一日三回食前半時二日分服

結劑　塗腹劑　斯篤里規尼涅注射　各前ノ如シ

三月十四日　昨日ハ便通四回アリシモ腹痛アリシト依テ旅那ヲ廢ス

處方

佐氏煎（五、〇）二〇〇、〇　硫苦　一五、〇
メンタ水　一〇、〇
右一日三回食前半時分服

結劑　塗腹劑　斯篤里規尼涅　各前ノ如シ

三月十五日　昨日便通一回ナリ體重十九貫百匁アリ　各別方ヲ處ス

三月十六日　昨日便通二回アリシ

處方

佐氏煎（五、〇）二〇〇、〇　硫苦　二〇、〇
メンタ水　一〇、〇
右一日三回食前半時分服

結劑　塗腹劑　斯篤里規尼涅　各前方ヲ處ス

三月二十二日　運動後ノ尿ヲ檢スルモ蛋白ナシ胸腹部共ニ異常ヲ

認メズ運動時ニ下肢ニ異常ヲ感ゼズ亦心悸亢進スルコトナシ然レドモ腓腸筋ニ尚ホ提痛アリ體重十九貫目此日便通五回　佐氏煎劑

結劑　塗布劑　斯篤里規尼涅　各前方ヲ處ス

三月二十五日　全治退院ス然レドモ尚ホ持續シテ服藥セシム

四月七日　昨日發熱シ且胃部ニ疼痛アリ而シテ其疼痛ハ咳嗽ニヨ

リテ增劇セリト診スルニ右肩胛上部輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ左腸骨窩部ハ僅カニ濁性ヲ帶ビ抵抗アリ壓痛アリ心窩部ヲ按壓スルニ少シク抵抗アリ

處　方

佐氏煎（一〇、〇）三〇〇、〇　沃　劑　一、〇

硫　苦　四〇、〇　鹽酸モルヒネ　〇、〇二

杏　仁　水　八、〇　メンタ水　一、〇〇

右一日三回食前半時二日分服

結　劑　三號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

四月九日　體重十七貫九百目ニ減ス然レドモ腹圍ハ尚ホ九十七セんちめーとるアリ患者ハ其體ノ輕クナリシヲ喜ブ從來本患者ニ硫苦ヲ伍用セシ所以ノ者ハ其肥胖ヲ減ズルニ在リタリ然ルニ本日共目的ノ一部ニ到着セシメ得タリト云フベシ

四月十二日　胸腹部ニ異常ヲ認メズ然レドモ佐氏塗布劑ノ塗腹ハ持續シテ行ハシム

四月二十四日　全治休藥ス

第十七病例　矢澤某男　六十三才

先月十五日頃ヨリ咳嗽アリ四五日前ヨリ時々喀痰ニ血液ヲ混ズルコトアリ然レドモ惡寒盜汗等ナシ

大正五年三月十四日　診ス右胸全背部及ビ左胸肩胛下隅以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ他ニ異常ヲ認メズ

診　斷　間質性肺炎

處　方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　杏　仁　水　八、〇

苦　味　丁　幾　四、〇

右一日三回食前二日分服

結　劑　四號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

三月十六日　內服藥ハ前方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、二

右注射ス

三月十八日　胸背部ノ濁性ハ大ニ減ジ呼吸音モ亦從フテ佳良トナル　內服藥前方

間質性肺炎之特殊療法及其原因

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、三

右注射ス

三月二十日　受療後喀血ナカリシニ昨日來再ビ喀痰ニ少量ノ血液ヲ混ズト云フ　內服藥ハ各前方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四

右注射ス

三月二十二日　胸背部ニ理學的變常ヲ認メズ血痰亦ナシ　內服藥前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、五

右注射ス

三月二十四日　異常ナシ　內服藥ハ各前方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

三月二十六日　胸部ニ全ク異常ヲ認メザルモ其再發ヲ豫防スルガ爲ニ少シク持續シテ服藥スベキヲ忠告ス　內服藥ハ前方ヲ與フ

四月一日

處　方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　苦　味　丁　幾　四、〇

右一日三回食前二日分服

結　劑　　三號膠囊六個

第十八病例　鈴木某男　二十一才

五年前僂麻質斯樣ノ疾病ノ爲ニ醫ニ診チ乞ヒ始メテ肋膜炎ノ存在スルチ發見セラレタリ大正元年四月上顎竇蓄膿症ノ手術チ受ケ越テ五月頃ヨリ咳嗽喀痰アリテ六月頃始メテ喀血セリ爾來殆ド毎月喀血シ喀血量ノ多キ時ハ二百ぐらむ位ニ達セシコトアリシ而シテ病初ハ體溫三十八度位アリシモ昨年頃ヨリハ通常三十七度內外ナリ喀血後ハ鄉里ノ醫師及ビ宮城病院等ノ治療チ受ケシモ荏苒治セザルチ以テ本年三月上京シ始メ杏雲堂病院ニ入院シ五月下旬北里氏養生園ニ入院セリ養生園ニテ檢セシびろけい反應ハ陽性ナリキ而シテ入院後つべるくりんノ注射チ受クルコト四回ニシテ喀血セシチ以テ該注射チ休止スルコト三ケ月ニシテ再ビつべるくりんノ注射療法チ受ケシモ注射スルコト三回ニシテ亦喀血セリ之チ以テつべるくりんノ注射ニ適應セザルノ病症ナリト斷定セラレシチ以テ在院スルコト約七ヶ月ニシテ退院シ直チニ小石川病院ニ入院セリ入院當日約十ぐらむ程ノ喀血アリテ三日間程喀痰ニ血液チ混セリ而シテ同院ニ於テ二十日程ニ十二三回靜脈注射チ行ヘリ次デ新個島海岸病院ニ入院シ同所ニ於テ復タ亦喀血セリ而シテ最終ノ喀

右一日三回食後二日分服

四月十三日各前方ヲ與フ其後來ラズ

血ハ三日前ニシテ三日間血痰持續セリ昨今咳嗽少ナク朝及ビ午前中ハ多少ノ咳嗽アリ喀痰ハ午前ニ多キモ午後ハ減ジ夜間ハ殆ド喀出スルコトナシ又右鼻ツマリ鼻汁多シト

大正四年十二月十日　診ス兩胸ノ全背部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱ク殊ニ右肩胛上部ハ殆ド呼吸音ヲ聽取スルコトナシ左肩胛下隅附近ニ弱キ捻音ト水泡音トチ聽取ス思フニ同所ニ氣管枝擴張ノ存スル者ナルベシ

診　斷　間質性肺炎

療　法

佐氏煎（七、〇）一〇〇、〇　杏　仁　水　四、〇
メンタ水　五、〇　苦　味　丁　幾　二、〇
右一日三回食前分服

結　劑　四號膠囊三個
右一日三回食後分服

石神傳染病研究所製連鎖狀球菌ワクチン　〇、二
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

十二月十三日　體重四十三五きろぐらむアリ內服藥各前方　〇、四
石神傳染病研究所製連鎖狀球菌ワクチン
右注射ス

十二月十四日脾臟ノ所在部ニ濁音チ呈ス（脾腫大）

處　方

鹽酸キニーネ　〇、五
右一包トナシ二包チ與フ　朝夕一包頓服

佐氏煎劑　結劑　各前方
十二月十六日　昨夜少量ヅヽ三回血痰チ喀出セリト　內服藥ハ各前方チ與フ

石神傳染病研究所製連鎖狀球菌ワクチン　〇、五
右注射ス

十二月十八日　昨夜少シク喀血セリト　內服藥ハ各前方チ與フ

十二月十九日　昨夜八時今曉三時ニ喀血セリト

處　方

實芙蓉利斯浸（〇、五）一〇〇、〇　ストロフアンツス丁幾　一、〇
右一日三回分服

佐氏煎劑　結劑　鹽規　各前方
午前十時頃喀血ス

間質性肺炎之特殊療法及其原因

處　方

二%フチゾール　三、〇
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

十二月二十日　昨夜喀血ナシ今朝一回喀血セリト體溫朝ニ十七度夕三十七度一分、脈朝七十二、夕八十四

處　方

佐氏煎（一二、〇）乙切草煎（五、〇）　一〇〇、〇
杏　仁　水　四、〇　苦　味　丁　幾　二、〇
メンタ水　五、〇
右一日三回分服

參　角　丸　〇、八
右分二包　朝夕一包頓服

實芙蓉利斯浸劑　結劑　各前方

十二月二十一日　尙ホ喀血アリ嘔氣アリ體溫朝三十七度二分、夕三十七度六分、脈朝七十、夕九十八

處　方

千倍アドレナリン液　〇、五
右上膊ノ皮下ニ注射ス

佐氏煎（一〇、〇）乙切草煎（五、〇）　一〇〇、〇

鹽酸モルヒネ　〇、〇一
杏仁水　四、〇
苦味丁幾　二、〇
メンタ水　五、〇
右一日三回食前分服

結劑
三號膠囊三個
右一日三回食後分服

十二月二十二日
昨夜喀血ナシ今朝少シク喀血ス嗽氣尚ホ止マス體溫朝三十七度三分、夕三十七度五分、脈朝夕八十二

處方
佐氏煎（一二、〇）一〇〇、〇　ストロフアンツス丁幾
鹽酸モルヒネ　〇、〇一　メンタ水　五、〇
杏仁水　四、〇
右一日三回食前分服

結劑
麥角丸　前方ヲ與フ　一、〇

處方
セルテル水　三〇〇、〇　阿片丁幾　一、〇
右嘔吐時數回服用

佐氏煎劑　結劑　各前方
終日少量ヅヽノ喀血アリ

處方
千倍アドレナリン液　〇、九
右上膊ノ皮下ニ注射ス

十二月二十三日尚ホ少量ヅヽノ血痰アリ而シテ今回喀血ヲ來セシ以來ハ膿痰ノ排出ナカリシモ今朝來膿痰ト血痰ト相半シテ喀出スト體溫朝三十七度、夕三十七度三分、脈朝七十八、夕八十二

處方
佐氏煎（一二、〇）一〇〇、〇　ストロフアンツス丁幾
鹽酸モルヒネ　〇、〇一　メンタ水　五、〇
杏仁水　四、〇
右一日三回食前分服

結劑
二號膠囊三個
右一日三回食後分服

佐氏煎劑　前方
混合連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス　引續キ混合「ワクチン」ヲ注射スルコト次ノ如ク
九日〇、七cc　十一日〇、八cc　十三日〇、九cc　十五日一、〇cc

一月十日
處方
佐氏煎（五、〇）一〇〇、〇　苦味丁幾　二、〇
メンタ水　五、〇
右一日三回食前分服

一月十七日　體重四十六きろぐらむ　增加二、五きろぐらむ　內服藥各前方
大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン
右肩胛間部ノ皮下ニ注射スルコト次ノ如シ
十七日一、〇cc　十九日一、〇cc

一月二十日　今朝鮮血アリシト
處方
結劑

右三包トナシ一日三回分服

十二月二十四日　體溫朝三十六度六分、夕三十六度八分、脈朝六十六、夕六十　各前方ヲ處ス

十二月二十六日　內服藥ハ前方ヲ與フ
混合ワクチン（大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン三分
石神傳研究所製連鎖狀球菌ワクチン一分）
右其〇、四ccヲ肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

十二月二十八日　喀痰ハ全ク血點ヲ帶ビズ
佐氏煎（八、〇）一〇〇、〇　ストロフアンツス丁幾一、〇
杏仁水　四、〇　メンタ水　五、〇
右一日三回食前分服

結劑　前方
混合連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス

大正五年一月五日　朝少シク血痰アリシト　內服藥ハ前方ヲ與フ

一月七日　肺部ノ變常ハ大ニ狹小シ只右肩胛上部及ビ左肩胛下隅以下ノミ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ左肩胛下隅ノ附近ニ存セシ水泡音亡失ス

處方

右一日三回食後分服

佐氏煎劑

前方

一月二十一日 內服藥ハ各前方ヲ處ス

特製連鎖狀球菌ワクチン

右注射スルコト次ノ如シ

二十二日 〇、五cc

二十三日 〇、六五cc 二十五日、〇、八cc 二十七日〇、九cc 二十九日一、〇cc 三十一日一、〇cc

一日二十二日 右肩胛間部中央以上左肩胛上部及ビ左肩胛下部トハ共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ 內服藥ハ各前方ヲ處ス

一月二十四日 體重四十七きろぐらむ 增一きろぐらむ

二月三日 內服藥ハ各前方ヲ與フ

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン

右注射スルコト次ノ如シ

三日一、〇cc 五日一、〇cc

二月八日 佐氏煎劑及結劑各前方ヲ處ス

特製連鎖狀球菌ワクチン

右注射スルコト次ノ如シ

二月八日〇、四cc 十日〇、五cc 十二日〇、六cc 十四日〇、六cc 十六日〇、七cc 十八日〇、七cc 二十日〇、七cc 二十二日〇、七cc 二十四日〇、七cc 二十七日〇、八cc 二十九日〇、八cc 三月二日〇、八cc 四日〇、八cc

二月九日 喘息ヲ發ス

處方

佐氏煎（五、〇）一〇〇、〇 臭素加里 一、五

ストロフアンツス丁幾一、〇 杏仁水 四、〇

單舍利別 五、〇

右一日三回食前分服

結劑 前方

二月十一日 體重四十八きろぐらむ

二月十七日 兩三日來復ヲ繰血スト云フ又昨日下痢樣ノ便通三回アリシトノ之ヲ診スルニ左腸骨窩部ハ輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ腹膜炎併發 喘息症狀ハ既ニ亡散ス

處方

佐氏煎（六、〇）一〇〇、〇 沃度加里 〇、五

苦味丁幾 二、〇

右一日三回食前分服

結劑 前方

佐氏塗布劑

右朝夕下腹部ニ塗布ス

三月一日 右肩胛上部及ビ左肩胛下隅ノ內側ハ尙ホ輕濁ニシテ呼吸音弱シ腹膜炎未ダ治セズ體重四十八、七五〇きろぐらむ、（入院當初四十三、五きろぐらむニ比スレバ五、二五〇きろぐらむノ增加ナリトス）

處方

佐氏煎（五、〇）一〇〇、〇 苦味丁幾 二、〇

右一日三回食前分服

結劑 〇號膠囊三個

右一日三回食後分服

佐氏塗布劑ノ塗腹前ノ如シ

二月十日以降ノ體溫ハ三十七度前後ニシテ時トシテ三十七度一分乃至三分ニ上昇スルコトアリ是レ或ハわくちん注射ノ多少干與スルコトアルヲ想像セザル可カラズ而シテ胸部ノ變常ハ之ヲ入院當初ニ比スレバ殆ド全治セルノ看アリ故ニ患者親族ノ醫師ヲシテ全治セリト誤認セシメシヤモ亦知ル可カラズ加之ナラズ患者ハ其體重ト其體力トノ逐次ニ增加シ自覺症狀ノ殆ド亡失セシトヲ以テ病症ノ治癒セシヲ想像セシ者ナルガ切リニ其親族醫師ノ住地ヘル伊勢ニ行カンコトヲ望メリ然レドモ予ノ診知スル右肩胛上部及ビ左肩胛下隅部ノ變常ハ假リニ之ヲ其經過ノ長カリシ疾病ノ治癒セシ痕跡ナリト爲スモ這般ノ病症ニシテ加療日數ノ短キハ病竈再燃ノ恐レ大ナル者ナルヲ以テ尙ホ暫ラク在院加療スルノ利益ナルヲ勸メシト雖モ終ニ三月六日退院シテ而シテ伊勢ノ海岸ニ赴ケリ

第十九病例　矢部某女　三十七才

一昨々年暮ヨリ翌年一月ニ亘リ流行性感冒ニ罹リ且二月迄ニ三四回屢々シテ同病ニ罹レリ而シテ其際ニ肺尖加答兒ノ存在スルトノ醫師ノ診斷ニ據リ三月小田原ニ轉地シ四月下旬歸京セリ而シテ其小田原ニ行キシ當初ニハ少シク熱候アリシモ其後ハ發熱スルコトナク且同地滞在中ニ體重増加セリ歸京後ハ別ニ異常ヲ自覺スルコトナカリシモ肺尖加答兒ニ對スル豫防ニつべるくりんノ注射ヲ行フベシトノ醫師ノ勸告ニ據リ同年八月ヨリつべるくりんノ注射ヲ開始シ翌年二月ニ至リテ終リ其間ニ六十回注射セリ但シ其注射ヲ行フニ當リテびるけい反應ノ有無ハ檢セザリシ注射終了後本年一月頃迄ハ異常ナカリシニ一月五日發熱シ大約三十七度二分乃至三十七度三分ノ微熱ハ約十四五日間持續セリ

小田原ヨリ歸リタル後ニ胃部ニ異常ノ感アリ昨年二月頃ヨリ同所ニ抵抗ノ増加セシヲ自覺セリ而シテ其異常ノ感ハ漸次ニ増加シ昨年十一月頃ヨリハ心窩部ニ棚ヲツリタルガ如キ異常ノ感アリ且時々右肩胛骨窩部ニ疼痛ノ發作アリ

小田原滞在中ヨリ左季肋部ノ肋骨上ニ疼痛ヲ起シ其疼痛ハ呼吸ニ據リテ増加スルコトナク左側臥ヲナスカ又ハ壓迫スル時ハ増痛スト云フ

近來肩ノ凝ルコト甚シク且歩行時ニハ容易ニ疲勞ヲ感シ殊ニ坂路ヲ歩スルニ困難ナリ又夜間時ニ膀腸部ニ瘙癢アリト

大正五年二月二十七日　診スルニ兩胸全背部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ右前胸ハ第三肋間以下打診上ニ抵抗ノ感強ク第三肋骨以上ハ打音ニ異常ヲ認メザルモ右前胸ハ一般ニ呼吸音減弱シ且呼息少シク延長ス胸骨下端部ハ濁音ヲ呈シ心窩部ニ抵抗アリ壓痛アリ肝臓ノ腫大セルヲ確知スルモ其緣ヲ觸知シズ下腹部ハ一般ニ輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ上下肢筋ニ捉痛アリ膝蓋腱反射亢進シ下腿ニ輕度ノ知覺鈍麻アリ而シテ叙上ノ所診ニ據レバ其胸部ニ於クル廣大ナル病變ハつべるくりんノ注射ハ啻ニ病竈部ヲ充血セシムルノミナラズ其炎症ヲ健康部ニ波及セシメシ結果ナリト斷セザルヲ得ズ

診　斷　間質性肺炎　肝臓腫大　腹膜炎　多發性神經炎

處　方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　沃度加里　一、〇
硫酸苦土　三〇、〇　苦味丁幾　四、〇
メンタ水　一〇、〇
右一日三回食前半時二日分服

結　劑　四號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

佐氏煎劑　三〇、〇
右朝夕下腹部ニ塗布セシム
一%硝酸斯篤里規尼涅液　〇、二五
右醫部ノ筋肉内ニ注射スルコト次ノ如シ

三月二日　四日　八日　十二日　十四日　十六日　十八日　二十日　二十三日　二十五日　二十七日　二十九日　四月四日　六日　十日　十三日　計十七回

特製連鎖狀球菌ワクチン

右肩胛間部ノ皮下ニ注射スルコト次ノ如シ

三月二日〇、一cc　四日〇、二cc　八日〇、三cc　十二日〇、四cc　十四日〇、五cc　十六日〇、六cc　十八日〇、六cc　二十日〇、六cc　二十三日〇、六cc　二十五日〇、六cc　二十七日〇、七cc　二十九日〇、七cc　四月一日〇、六cc　四日〇、六cc　六日〇、七cc　十日〇、七cc　十三日〇、七cc　二十一日〇、六cc　二十四日〇、六cc　二十七日〇、六cc

五月十一日〇、六cc　十九日〇、六cc　計二十二回

三月十六日

處　方

結　劑　三號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

佐氏煎劑　塗腹劑　久前方

四月六日　左季肋部ニ疼痛ヲ訴フ佐氏塗布劑ヲ塗布セシム

四月十日　脾臓ノ所在部ニ濁音ヲ生ズ

處　方

鹽酸キニーネ　〇、五
右一包トナシ四包ヲ與フ　朝夕一包頓服

四月十三日　多發性神經炎ノ症狀亡失スルヲ以テ斯篤里規尼涅ノ注射ヲ休止ス

四月二十一日　脾部ノ濁音亡失ス依テ鹽規ノ服用ヲ休止ス

五月一日

處　方

結　劑　二號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

佐氏煎劑　塗布劑　各前方

五月十六日　腹膜炎症狀亡失スルヲ以テ佐氏塗布劑ノ塗腹ヲ休止ス

處　方

結　劑　一號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

佐氏煎劑　　前方

六月四日胸部ニ異常ヲ認メズ心窩部ニ棚ヲツクルガ如キ異常感覺ハ既ニ亡失スト云フモ尚ホ深呼吸時ニ腫大セル肝ノ右葉緣ヲ臍上約一指中ニ觸知ス緣ハ稍鈍ニシテ壓痛アリ脾部ノ濁音ハ亡失スルモ尚ホ左側臥及ビ壓迫ニ對シ左季肋部ニ痛ミアリト

往年永ラクつべるくりんノ注射ヲ行ヒシ一患者ニ單ニ佐氏煎劑及ビ結劑ノミヲ併與シ加療セシコトアリ此際ニハ肺ノ炎症ハ頑强ニシテ容易ニ治癒ノ傾向ヲ呈セズ服藥セシムルコト約六ケ月ニシテ漸ク理學的變常ノ減退スル兆ヲ示シ更ニ三四ケ月ヲ經テ氣管枝擴張ヲ殘シテ治癒セシ病例ヲ有ス故ニ今之ヲ本患者ニ對照スルニ其本患者ノ肺ニ於ケル炎性症狀ノ短時日ニシテ亡失セルハ蓋シ特殊療法ノ效果ニ歸セシメザル可カラザルモノナルヲ信ズ加之ナラズつべるくりん注射ノ爲ニ增廣セル炎症ノ本療法ニ據リテ消退スルヲ觀レバ蓋シつべるくりんハ非結核性炎症ヲ增惡セシムルモノト謂ハザルヲ得ズ

第二十病例　池田某男　二十四才

昨年七月始メテ喀血シ次デ本年八月再ビ喀血セリ之ヲ以テ親族某醫ノ勸告ニ據リ最新ノ療法タル古賀氏液ノ注射療法ヲ受クベク九月中旬上京シ北里氏養生院ニ入院セリ入院後同所ニ於テ施行セシぴろけい反應檢査ハ只最弱液ニノミ少シク赤色ヲ呈セリ爾後つべるくりん注射治療ヲ行フコト十回越テ十月八日始メテ古賀氏液ノ注射ヲ受ケタリ從來發熱センコト無カリシニ此日ノ體溫ハ三十七度四分アリ注射後ハ三十七度一分ニ昇リシハ最高度ナリシ又注射後ヨリ咳嗽ヲ發セリ次テ十月二十二日第二回古賀氏液ノ注射ヲ受

處方

結劑　　○號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

佐氏煎劑　　前方

目下治療中

ケ尚ホ引續キ注射治療ヲ受クル心算ナルモ次回ノ注射マデ約一週間ハ在園スルノ要ナクサリトテ旅館ニ宿泊スルモ不安ナリトノ故ニ知人ノ紹介ニテ予ガ許ニ來レリ予ハ人ノ治療ノ成績ヲ隆ニテ實驗スルノ好都合ナルヲ以テ喜デ入院セシメタリ

大正四年十月三十日　診ス左背ハ肩胛間部中央以上ハ輕濁ニシテ呼吸音弱ク右肩ハ肩胛下隅以上輕濁ニシテ右肩胛上部ハ濁音ヲ呈シ呼吸音ハ其變濁部ニ於テ減弱スルモ殊ニ右肩胛上部ニ顯著ナリ右肋膜腔ノ下部ニ滲水アリ移動性ニ富メリ兩鎖骨下窩ニ脉管音ヲ聽ク而シテ右胸前部ハ打音ニ異常ヲ認メザルモ呼吸音弱シ

診斷　間質性肺炎

本患者ハ古賀氏液ノ注射治療中ナルヲ以テ單ニ其經過ヲ觀察スレバ足レリト雖モ患者ヲ慰安スルノ爲ニ左ノ方ヲ投與セリ

處方

機那煎（八〇〇〇）　二〇〇〇　稀鹽酸　二〇

單舍利別　一〇〇

右一日三回二日食前分服

規鐵丸　　十二粒

右一日三回食後二日分服

鹽酸モルヒネ　〇〇二　乳糖　二〇

右散六包トナス劇咳時一包服用

十一月三日　咳嗽ハ依然トシテ多シ右前胸ハ第三肋間以上右背ハ全部又左前胸ハ鎖骨下窩以上左背ハ肩胛間部中央以上ハ皆共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ右肋膜下腔ニ滲水アリ右乳房ノ外下方ニ微弱ナル摩擦音アリ同部ニ疼痛ヲ自覺ス此日養生園ニ行キ第三回古賀氏液ノ注射ヲ受ケ越テ七日歸院セリ而シテ歸院後ノ所診ハ記載ヲ缺キシヲ以テ茲ニ示スコト能ハズト雖モ病症ノ更ニ增强セルヲ以テ該注射療法ノ中止　ベキヲ勸告セシモ患者ハ親族某醫ノ該注射療法ノ成績如何ニ拘ハラズ四回マデ必ズ注射ヲ受クベシトノ言ニ從ヒ尚ホ一回注射スベシト云ヘリ

十一月十四日　此日養生園ニ行キ第四回古賀氏液ノ注射ヲ受ケ二十五日歸來ス

十一月二十五日診スルニ右胸ハ全背部左背ハ肩胛下隅以上輕濁ニシテ呼吸音弱ク右肩胛上部ニ無響水泡音アリ左肩胛下部ハ打音異常ナキモ呼吸音弱シ右前胸下部ニ微弱ナル摩擦音アリ既ニ認メシ滲液ハ亡失セリ

患者云フ東都ノ氣候ハ之レヨリ漸次ニ寒冷ノ酷烈ヲ加フルノ時季ニ際シ家族ノ其健康ヲ害スベキヲ憂慮シ歸鄉スベキヲ命ズルニ據リ其命ニ從ヒ比較的ニ氣候ノ溫暖ナル鄉里ニ歸リ冬期ヲ經過シ來

春再ビ上京シテ加療スベシト予囑ヲ彼ニ告グルニ東都ノ氣候ハ之ヲ其郷里ニ比スレバ冬期ノ寒冷ハ酷シト雖モ尚ホ十二月中ハ左程ニ寒氣ノ甚シカラザルヲ以テ決シテ其健康ヲ害スルノ患ヒナシ且療病ノ爲ニ上京シ其加療ノ結果トシテ多少ナリトモ病症ノ輕快セルアレバ折角上京セル甲斐アルヲ以テ嚴冬ノ間郷里ニ靜養シ來春再ビ治療ヲ繼續スルモ敢テ不可アルナシト雖モ現時ノ病狀ヨリ推及スレバ予ハ來京時ノ病狀ヲ診知セザルモ必ズヤ其病症ノ增惡セルヤ疑ナシ貴重ナル時ト金トヲ空費シ却テ其病症ヲ增惡シテ歸國スルノ愚ヲナス勿

リハ尚ホ一ケ月間在京シ病症ヲ輕快若クハ治癒セシメテ而シテ歸郷スルノ優レルニ若カザルベシト彼之ニ從フテ予ニ其治療ヲ託ス

十二月二日　古賀氏液ノ性狀ハ予ノ知ラザル所ナリト雖モ彼等ハ注射後大約二週日ヲ經テ次回ノ注射ヲ行フニ據リ注射後二週日ヲ經過スレバ其注射セシ藥品ハ悉ク體外ニ排除セラルヽ者ナルベキヲ想像シ本日ヨリ予ノ治療ヲ施行スルコトヽナシス

診スルニ兩肩胛間部中央以上ハ濁音ニシテ呼吸音弱シ兩肩胛間部中央以下ハ抵抗强クシテ呼吸音亦微弱ナリ兩鎖骨下窩ハ輕濁ヲ呈シ他ノ前胸部ハ打音ニ異常ヲ認メザルモ前胸一般ニ呼吸音弱シ

處方

佐氏煎（四、〇）一〇〇、〇　苦味丁幾　二、〇
單舍利別　五、〇
右一日三回食前分服

結劑　四號膠囊三個
右一日三回食後分服

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　〇、二五
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

十二月四日　內服藥ハ各前方ヲ與フ

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　〇、五
右注服ス

十二月六日　昨夕腹痛アリ昨夜二三時頃亦腹痛シ今朝ハ食後ニ腹痛アリシト

胸部ノ打診的變常ハ大ニ狹小シ只右肩胛上部ノ輕濁音ヲ呈スルノミニシテ他部ハ殆ド打音ニ異常ヲ認メズ然レドモ呼吸音ハ兩肺ノ全部ヲ通ジテ微弱ナリ

內服藥前方

大阪血清藥院製
連鎖狀球菌ワクチン　〇、七五
右注射ス

十二月八日　內服藥ハ各前方ヲ處ス

大阪血清藥院製
連鎖狀球菌ワクチン　一、〇
右注射ス

十二月十一日　內服藥ハ各前方ヲ處ス

石碑傳染病研究所製連鎖狀球菌ワクチン
右肩胛間部ノ皮下ニ注射スルコト次ノ如シ
十二月十一日〇、五cc　十五日〇、七五cc　十八日〇、八cc
二十一日〇、八cc　二十三日〇、九cc　二十四日一、〇cc
二十六日一、〇

十二月十三日

處方

結劑　三號膠囊三個
右一日三回食後分服

佐氏煎劑　前方
十二月二十日　胸部ノ變常殆ド消失ス然レドモ尚ホ輕咳アリ

處方

結劑　二號膠囊三個
右一日三回食後分服

十二月二十六日　肺部ノ變常全ク亡散スルニヨリ歸國ヲ許シ明春更ニ加療スベキヲ約セリ蓋シ吾人ノ理學的診査法ニ據リテ知得スベキ病變ハ一定ノ限度アリテ其全ク異常ヲ認メザルニ至ルモ全然

治癒セルノ謂ニ非ズ加之ナラズ其既ニ抵抗力ノ減損セル局部ハ再ビ發炎シ易キノ傾向大ナル者ナルヲ以テ或時日間服藥シテ以テ其炎機ノ潜在セルヲ全癒シ且其抵抗力ヲ增進センメザレバ其全治ヲ期スルコト能ハザル者ナレバナリ依テ内服藥各一ケ月分ヲ携帶セシム

歸國後ノ來信ニ據レバ直京出立ノ際ニ多少存セシ所ノ咳嗽ハ既ニ沼津ニ至リテ全ク亡失シ且在京中ニ存セシ輕微ノ熱候ハ歸鄉後全ク低降シテ常溫ニ復シ爾來更ニ病惱ノ存スルナシト

大正五年四月十八日約ニヨリ再ビ上京セリ患者云フ歸鄉後ハ全ク健康ヲ自覺セシニ三月下旬流行性感冒ノ流行シ全家之ニ罹患セリ其際ニ體溫ハ三十七度八分以上ニ昇リシコトナカリシモ永フク平リシ

間質性肺炎ニ對スル連鎖狀球菌わくちん注射治療成績表

大正五年五月調

姓名	年齡	病症摘要	注射日數	注射回數	成績
今井某	女 十八	右肩胛上部間質性肺炎 主訴肩ノコリ	自大正四年九月十四日 至同九月二十六日	二	全治
石井某	女 十七	兩肩胛上部間質性肺炎	自八月三十日 至九月十四日	四	全治
池田某	女 二十	兩背全部間質性肺炎	自八月十七日 至九月六日	四	全治
池田某	女 二十	右胸全背部間質性肺炎 主訴肩ノコリ	自同 至九月二日	一	主訴亡失
池田某	男 二十四	兩背全部及兩鎖骨下窩以上間質性肺炎	自同十二月二日 至同十二月二十六日	十	全治
石井某	男 十九	右背全部、左肩胛上部間質性肺炎、腹膜炎(結核混合傳染)	自同五月十日 至同七月十四日	十九	事故退院 其後死亡
伊東某	女 十七	兩背全部間質性肺炎、腹膜炎	自同八月二十四日 至同九月三十日	五	全治
伊東某	女 十四	兩肩胛間部中央以上間質性肺炎	自同十月二十六日 至同十一月十五日	四	全治
伊東某	女 八十	兩肩胛上部間質性肺炎	自同十二月七日 至同十二月廿五日	六	全治
牟田某	男 三十八	兩肩胛間部中央以上間質性肺炎、腹膜炎、貧血	自同九月七日	七	事故休止
萩原某	男 十九	兩背全部間質性肺炎	自同十二月一日	三	事故退院
富岡某	女 十九	兩肩胛上部間質性肺炎 腹膜炎	自同八月一日	五	事故休療
堀某	男 十九	右肩胛下隅以上左背全部間質性肺炎 腹膜炎(結核混合傳染)	自同三月三日 至同十月十日	死亡	
小田某	男	兩肩胛下隅以上間質性肺炎	自同六月十日 至同廿七日	六	全治
小田某	女	兩肩胛間部中央以上間質性肺炎	自同六月十日 至同十八日	四	全治
奥田某	男 二十二	兩肩胛下隅以上間質性肺炎	自同七月七日 至同三十一日	九	事故休療
大場某	女	右肩胛下隅以上 左肩胛間部中央以上 間質性肺炎	自同九月十八日 至同三十日	五	全治
奥田某	女 十九	兩肩胛上部間質性肺炎 腹膜炎	自同七月四日	十四	事故退院 其後死亡

大竹某女	二十一	兩肩胛上部間質性肺炎 主訴肩ノコリ	自大正四年九月十二日	二	主訴全治
樫村某女	二十一	右肩胛間部中央以上間質性肺炎	自同 九月十三日	五	全治
田名某男	二十九	右背全部、左肩胛下隅以上間質性肺炎、肋膜腔滲水	自同 十月二十六日 至同 十一月十二日	六	全治
太野某男	五十二	兩肩胛下隅以上間質性肺炎	自同 十月三日 至同 十月二十九日	六	全治
武田某女	二十八	兩肩胛下隅以上間質性肺炎	自同 五月十六日 至同 六月十日	七	全治
田代某男	二十二	兩肩胛下隅以上間質性肺炎	自同 九月八日 至同 十月二十日	六	全治
土屋某女	六十六	兩肩胛上部間質性肺炎 膝關節炎	自同 七月十二日 至同 二十三日	三	全治
土屋某女	六十六	兩背全間質性肺炎、喘息	自同 十二月十七日 至同 十八日	三	全治
中崎某女	三十六	兩肩胛間部中央以上間質性肺炎 腹膜炎	自同 九月廿四日 至同 十月三日	四	全治
中嶋某女	二十一	兩肩胛間部中央以上間質性肺炎 喘息	自同 七月十一日 至同 八月十二日	七	全治
南條某男	三十	右肩胛下隅以上、左肩胛間部中央以上間質性肺炎	自同 九月九日 至同 十二月三十日	十四	殆ド治癒中
宇田某女	二十	兩肩胛上部、右肩胛下部間質性肺炎 腹膜炎	自同 八月四日 至同 同 十日	三	輕快休止
○上田某女	十七	左第三肋間以上、左肩胛ト部間質性肺炎	自同 七月十九日 至同 八月三十日	七	全治
鵜殿某女	七十九	兩肩胛上間質性肺炎、下痢	自同 九月廿四日 至同 十月十二日	五	全治
鵜殿某女	二十四	兩肩胛上下部間質性肺炎	自同 九月廿四日 至同 十月十二日	七	全治
野村某男	五十二	兩肩胛間部中央以上間質性肺炎	自同 十一月八日 至同 十二月二日	五	全治
矢口某女	二十五	兩背全部間質性肺炎 腹膜炎	自同 九月十二日 至同 三十日	六	全治
矢口某男	六十八	兩肩胛間部中央以上間質性肺炎 腹膜炎	自同 八月十六日 至同 十一日	三	事故休療
鎗田某女	二十	右肩胛下隅以上間質性肺炎 左肩胛上部間質性肺炎	自同 八月二日 至同 八月八日	三	自覺症狀亡失事故休止
○松居某男	二十二	右背全部及左肩胛間部中央以上間質性肺炎	自同 七月廿六日 至同 八月廿五日	五	全治
○松川某男	二十一	兩肩胛下隅以上間質性肺炎、腹膜炎	自同 八日廿八日 至同 十月廿三日	六	全治
福嶋某女	十八	兩肩胛上下間質性肺炎 腹膜炎	自同 七月四日 至同 同廿一日	四	輕快事故休止
小峰某女	十八	右背全部間質性肺炎、多發性神經炎	自同 八月廿五日 至同 九月十三日	四	輕快事故休止
小峰某女	十八	左肩胛上部及右肩胛間部中央以上間質性肺炎 腹膜炎	自同 八月九日 至同 九月十日	九	全治
秋元某女	三十四	兩肩胛上部間質性肺炎	自同 九月廿八日 至同 十月廿二日	六	全治
相場某女	二十五	兩肩胛下隅以上間質性肺炎	自同 八月十六日 至同 八月十九日	五	全治
荒木某男	三十二	兩肩胛下隅以上間質性肺炎、多發性神經炎	自同 十二月十三日 至同 廿五日	六	全治
佐野某女	十八	兩肩○上部間質性肺炎 喘息	自同 八月十九日 至同 九月十八日	七	全治

佐藤某	男	三十八	兩肺全部及右第二肋間以上間質性肺炎	自大正四年九月廿四日 至同十月八日	七	事故休止
○澤幡某	男	二十八	兩胸全背部及左第二肋間以上間質性肺炎、喘息	自同三月十五日 至同卅一日	丹毒治療液注射	全治
○相樂某	男	二十四	右肺全背部間質性肺炎	自同十月廿九日 至同十一月四日	四	全治
○佐藤某	女	二十	關背全部間質性肺炎、腹膜炎、項部皮下蜂窩織炎、丹毒	自同一月五日 至同三月六日	丹毒治療液及血清	全治
三井某	女	二十	右胸全背部、左肩胛下隅以上間質性肺炎	自同十一月廿七日 至同十二月十三日	六	全治
新川某	男	三十一	左鎖骨下窩以上、左背全部、右肩胛下隅以上間質性肺炎、足關節炎	自同九月八日 至同三十日	六	全治
茂野某	女	三十九	兩肩胛上部間質性肺炎	自同八月二十九日 至同九月廿七日	六	全治
關矢某	男	四十七	兩肩胛間部中央以上間質性肺炎、多發性神經炎	自同六月三日 至同三十日	五	全治
須黑某	女	十八	右胸全背部左肩胛棘以上間質性肺炎	自同七月十六日 至同八月十三日	八	輕快事故中止
諏訪某	男	二十五	兩肩胛上下間質性肺炎	自同八月三十日 至同九月六日	四	全治
井原某	男	十八	兩胸全背部間質性肺炎、多發性神經炎	自大正五年一月七日 至同三十日	十三	全治
土屋某	女	二十二	右肩胛下隅以上左肩胛間部中央以上間質性肺炎	自同四月二十日 至同五月八日	九	全治
村杜某	女	三十五	右肩全部左肩胛間部中央以上間質性肺炎	自大正四年十二月二十七日 至同五年二月九日	八	全治
內海某	勇	五十七	兩肩胛上部間質性肺炎、喘息	自大正五年四月二十三日 至同二月十二日	七	全治
增本某	男	三十七	兩背全部間質性肺炎	自大正四年十二月二十日 至同五年二月十二日	十	全治
○松本某	女	十二	肝腫大			
○福田某	男	二十五	右背全部左肩胛間部中央以上間質性肺炎、腹膜炎、多發性神經炎	自大正四年四月十日 至同五月八日	七	全治
寺門某	男	四十五	右肩胛間部中央以上左肩胛上部間質性肺炎	自同四月十二日 至同二十六日	七	全治
小嶋某	男	三十七	右肩胛間部中央以上左肩胛上部間質性肺炎	自大正四年十二月二十二日 至同五年一月十九日	六	全治
○鈴木某	男	二十三	左鎖骨下窩以上及兩肩胛上部間質性肺炎、肝腫大	自大正五年四月十日 至同五月二十九日	十二	全治
○矢澤某	男	六十三	兩胸全背部間質性肺炎	自大正四年十二月十日 至同五年三月六日	三十三	大約全治
藤田某	男	二十二	右背全部左肩胛下隅以上間質性肺炎	自大正五年三月十四日 至同三月三十日	六	全治
○深澤某	男	二十八	兩肩胛間部中央以上間質性肺炎、腹膜炎、肛門周圍炎	自大正四年十一月十六日 至同五年三月末日	十二	全治
○宮崎某	男	三十八	右肩胛間部中央以上左肩胛上部間質性肺炎、腹膜炎	自大正五年一月十四日 至同五年五月末日	三十六	大約全治
○椎木某	男	五十二	左背全部、左鎖骨下窩及右肩胛間部中央以上間質性肺炎、肝腫大、喘息	自大正五年四月十九日 至同五年五月十六日	八	全治
○矢部某	女	三十七	右肩胛間部中央以上左肩胛上部間質性肺炎	自大正五年四月二十二日 至同五年五月十九日	四	全治
多田某	男	三十五	兩全背部、右前胸全部、間質性肺炎、肝腫大、腹膜炎、多發性神經炎	自大正五年二月二十七日 至同五年五月十九日	二十二	全治
			右肩胛上部間質生肺炎、肝腫大	自大正四年十二月二十九日 至同五年五月十九日	十八	全治
○須藤某	女	三十九	左右肩胛上下部間質性肺炎、腹膜炎、多發性神經炎	自大正五年三月九日 至同五年四月二十二日	十二	全治

關某	男	四十	右肺全部左肩胛下隅以上間質性肺炎 肝臓大	自大正五年二月十三日 至大正五年五月一日	十四 全治
水野某	男	二十八	左右肩胛下隅以上間質性肺炎、腹膜炎、肛門周圍炎	自大正四年十二月十七日 至大正五年三月十三日	十六 輕快 事故休止

上表中頭部ニ○印ヲ付セルハ前段ニ其病歴ヲ記述セル者ナリ

其三 結論

叙上ノ治驗的基礎ハ茲ニ左ノ結論ニ到達スルヲ得セシメタリ

一、從來間質性肺炎ニ對スル唯一ノ療病的藥劑ハ

處方

佐氏煎(八、〇—二五、〇) 二〇〇、〇
苦味丁幾 四、〇
撒里矢爾酸曹達 四、〇
メンタ水 一〇、〇

右一日三回食前二日分服

結劑

右最初ニハ四號膠囊ニ容レ一日三回食後ニ一個宛ヲ服用セシメ漸次ニ增量シテ終ニハ〇號膠囊トシ一日三回食後ニ其三個宛ヲ服用セシメタリ

ニシテ之ニ據リテ其肺ニ於ケル炎症々狀ヲ治癒セシムルコトヲ得タリ然レドモ其加療ノ當初若クハ中途ニ高熱ヲ呈スル病者ニ對シテ所謂頓挫藥トシテ左方ヲ與フルヲ常トセリ

處方

甘汞 〇、七
乳糖 〇、五
フエナセチン 〇、五

右一包トナシ頓服

其發熱ノ新鮮ナル症ニ於テハ多クハ之ニ據リテ解熱スルモノナリト雖モ復タ往々其熱候ノ頑强ニシテ這般ノ頓挫藥ニ應ゼザルコトアリ然ル時ハ常規トシテ

處方

佐氏解熱丸 各〇、五

右一包トナシ四包ヲ與フ朝夕一包頓服

ヲ兼用セシメテ克ク解熱セシムルコトヲ得タルモ尙ホ時ニ此等解熱劑ノ無效ナル患者ニ遭遇スルコト無キニ非ラズ然レドモ叙上ノ療法ハ現時ニ知ラレタル肺癆療法ニ比スレバ其治效ノ優越ナルモノナルヲ以テ其治驗ヲ基礎ト爲シテ曩ニ肺癆病論ヲ著述シテ之ヲ世ニ示セリ。

二、叙上ノ治療法ハ縱令其治效ノ現時世上ニ知ラレタル肺癆療法ニ比シテ優越ナルモ尙ホ其肺ニ於ケル炎症々狀ヲ消退セシムルニハ或長キ日子ヲ費シテ始メテ其目的ヲ達スルコトヲ得ルモノナルヲ以テ强キ信念ノ下ニ加療スル所ノ患者ニ非ザレバ時トシテ加療ノ中途ニシテ休藥スルモノアルハ誠ニ彼我ノ爲ニ遺憾ト爲

ザルヲ得ザリシモ特殊療法ノ發見ハ治療日數ヲ短縮シテ此患ヲ除クコトヲ得タリ。

三、間質性肺炎ニ對スル特殊療法ハ偶然ノ賜ニシテ從來用ヒシ製劑ニ左ノ數種アリ。

(1) 丹毒治療液

(2) 連鎖狀球菌血清

(3) 連鎖狀球菌ワクチン

A 大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン

B 石神傳染病研究所製連鎖狀球菌ワクチン

C 混合ワクチン 大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン 石神傳染病研究所製連鎖狀球菌ワクチン 等分

D 某製連鎖狀球菌ワクチン

斯ノ如ク種々ナル連鎖狀球菌製劑ヲ用ヒシ所以ノモノハ敢テ他意アルニ非ズシテ斯病ニ對スル細菌的療法ハ丹毒患者ヲ治療セシ際ニ發意セルモノナルヲ以テ其特殊療法ヲ行フノ初メニ於テハ三四ノ患者ニ丹毒治療液ヲ用ヒ或ハ連鎖狀球菌血清ヲ併用セシモノアリシト雖モ其丹毒治療液ハ斯病ニ對スル治效ノ微弱ナルヲ知リ又連鎖狀球菌血清ハ其治效ヲ驗知スルニ先チテ劇甚ナル血清病ニ罹リシモノアリ且持續シテ用ユル時ハあなふいらきしいモ亦一顧ス可キノ大害ナルヲ以テ此等二種ノ製劑ハ少數患用ニ試用セシ以後ハ其使用ヲ廢シ更ニ多價わくちんヲ用ユルコトヽナシ又然ルニ當時市場ニ存セシ連鎖狀球菌わくちんハ唯大阪血清藥院ノ製品ノミナリシヲ以テ之ヲ使用シテ豫期ノ效果ヲ收ムルコトヲ得タルモ昨年末ニ至リ大阪血清藥院ノ製品ハ市場ニ缺亡シ之ニ代リテ石神傳染病研究所ノ製品ヲ供給スルニ至リシヲ以テ爾後石神傳染病研究所ノ製品ヲ使用セシト雖モ該劑ハ其注射後ニ比較的疼痛多ク且多少發熱スルコト多キ傾向アリシガ故ニ再ビ大阪血清藥院ノ製劑ヲ購入シ且曩キニ購入セシ石神傳染病研究所ノ製品ニ尙ホ殘餘アリシヲ以テ或ハ單ニ此等製劑ヲ使用シ或ハ兩種ノ製劑ヲ等分ニ混合シテ試用シタリキ然ルニ叙上ノ實驗ヲ重ヌルニ及ビ或偶然ノ考案ハ幸ニ石神傳染病研究所ノ容ルヽ所トナリシヲ以テ同所ニ依賴シ特ニ連鎖狀球菌わくちんヲ製造セシメテ爾來之ヲ使用スルコトヽナシヌ是レ現時ニ用ユル所ノ特製連鎖狀球菌わくちんナリトス然リト雖モ叙上ノ連鎖狀球菌製劑ハ其何レガ治效ノ最モ顯著ナルモノナルカ又ハ各種ノ製劑ヲ混合スルノ其わくちんヲ益々多價ナラシムルモノナルカハ未ダ知ラザル所ナリ。

四、多價連鎖狀球菌わくちんノ注射療法ハ間質性肺炎ニ對スル特效藥ニシテ其治效ハ確實ニシテ且迅速ナリ之ヲ以テ單ニ其肺ニ於ケル炎症々狀ヲ亡散セシムルノミノ目的ナリセバ他ハ內服藥ノ併用ヲ要セズ只該注射ノミヲ行フニ據リテ治病ノ目的ヲ達スルコトヲ得ルナリ而シテ予ノ從來用ヒシ所ノ注射量ハ左ノ如シ。

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン

右ハ最初ニ〇、二五ccヲ肩胛間部若クハ肩胛下部ノ皮下ニ注射シ隔日ニ〇、二五cc ツヽ增量シ一、〇ccニ達スレバ其同量ヲ隔日ニ注射シ以テ肺ノ炎症々狀ノ亡散スルニ至ル而シテ理學的診査上ニ

異常ヲ認メザルニ至ルモ尚ホ或期間ハ其間隔ヲ延長シテ注射ヲ繼續ス。

石神傳染病研究所製連鎖狀球菌わくちん

右ハ最初ニ一、一五ccヲ注射シ隔日ニ其〇、一五ccヅヽ增量シ而シテ其注射量一、〇ccニ達スレバ或期間同量ヲ持續シテ隔日ニ注射ス。

特製連鎖狀球菌ワクチン

右ハ最初ニ〇、一cc若クハ〇、一五ccヲ注射シ隔日ニ〇、一cc又ハ〇、一五ccヅヽ增量シテ多クハ其注射量ノ〇、六ccニ達スルニ至レバ同量ヲ持續シテ注射セリト雖モ時トシテハ更ニ增量シテ一、〇ccヲ注射セシコトアリ但シ多量ノ注射ハ發熱スルノ傾向アルヲ以テ微量ヨリ注射シ始メテ少量ヅヽ增加スルヲ良トス。

五、肺ノ間質組織ニ於ケル炎症ヲ一時亡散セシムルノミヲ以テ其治病ノ職責ヲ完了セルモノナリセバ上記ノ如ク單ニ連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルノミニテ足ルモノナリト雖モ由來間質性肺炎ハ慢性ニ起リテ慢性ニ經過シ其頑强ナル炎症ハ常ニ潛行的ニ漸次ニ蔓延スルノ性質ヲ有シ而シテ吾人ノ臨床上ニ應用スル所ノ夫ノ理學的診法ハ一定ノ限度ヨリ狹小ナルカ又ハ一定ノ厚徑ヨリ薄キ病竈部ハ之ヲ知得シ能ハザルモノナルヲ以テ吾人ノ臨床上ニ認メテ以テ炎症々狀ノ亡散シテ異常ナシト爲スモ唯是レ單ニ理學的變常ヲ診知シ能ハザルニ過ギザルノミニシテ敢テ之ニ據リテ全然該部ニ於ケル炎性浸潤ノ治癒セルモノナリト爲ス可キ

ニ非ズ故ニ縱令吾人ノ診知シ得ザル狹小ナル炎症部タリトモ尚ホ貽殘スルニ於テハ注射セルわくちんノ療病的作用ノ亡失スル直後カ又ハ短キ未來ニ炎症々狀ヲ增進セシムル或機會ニ際會スル時ハ其遺殘セシ炎症部ハ更ニ炎症ヲ再燃セシメテ復タ舊時ノ病態ニ歸來スルコトアルヲ思ハザル可カラズ加之ナラズ慢性炎症ノ存在セシ局部ハ一般ニ其組織ノ抵抗力モ亦慢性的ニ衰弱スルモノナルヲ以テ縱令一時加療ノ爲ニ其炎症々狀ノ全ク亡失シテ完全ニ治癒スルアルモ其組織ノ抵抗力ニシテ健常ニ恢復スルニ非ザレバ輕微ナル發炎的害因モ尚ホ能ク容易ニ其所ニ發炎セシムルコトヲ得ルモノナリ況ヤ特殊療法ニ因ル急速ナル消炎作用ハ其慢性炎症ヲ完全ニ治癒シ得ルモノニ非ザルヲヤ蓋シ慢性炎症ハ細菌ノ發炎性毒素ニ因ル慢性ノ血管神經衰弱ニシテわくちん療法ノ爲ニ其病原菌ヲ殄殺シ其發炎性毒素ヲ中和スルモ血管神經衰弱ハ之ガ爲ニ急速ニ健常ニ恢復スルモノニ非ザレバナリ之ヲ以テ間質性肺炎ニ特殊療法ヲ行ヒ其病竈部ノ存在ヲ診知シ得ザル底ニ治癒スルニ至ルモ尚ホ其消炎的療法ヲ繼續シテ曾ニ貽殘セル炎症ヲ全ク亡失セシムルノミナラズ更ニ進デ其組織ノ抵抗力ヲ恢復シ且之ヲ增强セシメザル可カラザルモノタルヤ明カナリ而シテ這般ノ目的ニ對シ予ハ常ニわくちん注射ヲ或期間續行スルノ傍ニ其治病ノ初メヨリ佐氏煎劑及ビ結劑ヲ飲用セシメテ且病症ノ喪失後モ或期間持續シテ服用セシメタリ蓋シ佐氏煎劑及ビ結劑ヲ飲用セシメテ且治癒スルノ效能アルモノナレバナリ。

所謂後療法トシテノ連鎖狀球菌わくちんノ注射ハ必ズシモ隔日ニ行フ可キノ要ナシ一週二回又ハ一週一回

之ヲ行ヒ缺ニ或日子ヲ經過セシ後ニハ每月一回若クハ二回之ヲ行ヒ而シテ三四ヶ月間ハ其經過ヲ觀察スルヲ良トス但シ其間ニ佐氏煎劑及ビ結劑ヲ投與スベキハ勿論ナリ。

佐氏煎劑ハ從來ハ通規トシテ撒里矢爾酸曹達ヲ配伍セシモノナリト雖モ歐洲大戰ノ餘波ハ吾人ヲシテ賢ナラシメ撒里矢爾酸曹達ヲ配伍セザルモ能ク其目的ヲ達スルモノナルコトヲ知ラシメ得タリ而シテ病症ニヨリ喘息肝臟腫大等ノ併存スル時ハ之ニ適スルノ藥材ヲ配伍ス可キハ勿論ナリ。

六、夫ノつべるくりん療法ヲ行ヒシ所ノ肺癆患者ハ其つべるくりんヲ注射セシ回數ノ多キニ準ジ本療法ニ對スル炎症ノ抵抗ハ大ニシテ治癒スルノ傾向甚ダ鈍キモノナリ之レ蓋シ其注射セルつべるくりんハ非結核性炎症ヲ增進シ且つべるくりんノ注射量ノ多キニ失スル時ハ結核性病竈モ亦發炎シ之ガ爲ニ增强セル炎症性浸潤ハ或ハ血管ノ收縮機能ノ衰微スルコト甚大ナルガ爲ニ或ハ吸收作用ノ衰退スルガ爲ニ或ハ瘢痕形勢ノ遲徐ナルガ爲ニ其治癒機能ノ發現スルヲ遷延セシムルニ因ルモノナル可シ而シテ其病竈部ノ漸次ニ狹小シ次第ニ治癒スルニ方リテハ氣管枝ノ擴張ヲ來スコト少ナカラズ之レ間質結締織ノ增殖ノ甚シカリシガ爲ニ治病ノ結果トシテ瘢痕收縮ヲ致セルヲ證スルモノナリ又古賀氏液ノ注射治療ヲ受ケシモノモ復タ其治機ノ發現ノ遲徐ナルモノナルニ似タリ故ニ這般ノ治法ハ絶對的ニ之ヲ試ミザルヲ宜トス。

七、間質性肺炎ハ連鎖狀球菌わくちんヲ注射シ傍ラ佐氏煎劑及ビ結劑ヲ飲用セシムルヲ斯病ニ對スル治法ノ最モ優越スルモノナリト斷定スルニ憚ラズト雖モ然レドモ其治效タルヤ絶對的ナルニ非ズシテ或症ニ於テハ其廣汎ナリシ浸潤症狀ハ亡失スルモ一局部殊ニ多ク右肩胛上部ニ理學的變常ノ貽殘シテ容易ニ消退セザルコトアリ然ル若キハ其病竈ノ陳舊ナルガ爲ニ他ニ比シテ細胞性浸潤ノ强甚ニシテ治癒的傾向ノ緩慢ナルガ爲ナルカ又ハ瘢痕機胼胝ヲ形成シテ治癒セル疾病ノ遺跡ナルコト無キニシモ非ザル可シト雖モ亦他ノ細菌殊ニ結核菌ノ混合傳染ニ因スル炎症ナルコトアル可シ。

又間質性肺炎ト診定ス可キ病症ニシテ其熱候ノ頑强ニシテ本療法ニ據リテ解熱セザルコトアリ然ル若キノ熱候ハ他ノ細菌ノ混合傳染ニ因スルモノタルヤ論ヲ俟タズシテ明カナリ殊ニ夫ノ結核菌ノ混合傳染ヲ思ハシムル所ノ末期ノ病症ニ來ル消耗熱ニハ本療法ハ毫モ解熱ノ作用ナキモノナリ。

八、連鎖狀球菌性間質性肺炎ニ他ノ細菌ノ混合傳染ヲ致セル症ニ對シテハ更ニ之ニ適スルノ治法ヲ討究セザル可カラザルモノナルハ勿論ナリ而シテ予ハ這般ノ病症ニ對シ多少ノ治驗ノ無ナルニ非ズト雖モ本編ハ單ニ間質性肺炎ニ對スル特殊療法ヲ說述スルノミノ目的ナルト其混合傳染性炎ニ對スル治驗ノ尙ホ少ナキトキハ更ニ後日ヲ期シテ之ヲ執筆スルコトアル可シ。

九、吾人ハ夫ノ實布的里治療血淸ニ於テ其病症ノ新鮮ニシテ且其病勢ノ薄弱ナルトニ準ジテ之ガ治療成績ノ益々良好ナルモノナルヲ知ル間質性肺炎ニ對スル特殊療法モ亦其關係ヲ同フスルモノナルヲ以テ若シ本編ヲ一讀スルノ士ニシテ本療法ヲ試ミント欲セバ須ラク間質性肺炎ヲ其病初ニ診知シ得ルノ技倆ヲ練熟スベシ而シテ此目的ニ對シ予ハ切ニ既著肺癆病論ヲ閱讀セラレンコトヲ望ム。

第三章　間質性肺炎ノ原因及其本態

叙上ノ治療的證明ニ據リテ予ハ其連鎖狀球菌製劑ニ據リテ治癒スル所ノ肺ノ急性及ビ慢性炎症ヲ以テ連鎖狀球菌ニ因スル肺炎ナルヲ玆ニ斷言ス蓋シ現時ノ細菌學ノ敎ユル所ニ據レバ夫ノ細菌製劑ハ總テ特異的ニシテ甲細菌製劑ハ只甲細菌性疾病ノミニ作用シ乙細菌性疾病ニハ決シテ療病的作用ヲ呈セザルヲ其大則ト爲スモノナレバナリ之ヲ以テ此大則ニシテ變易セザル限リハ連鎖狀球菌製劑ヲ以テ治癒スル所ノ疾病ハ卽チ連鎖狀球菌性疾病ト爲サヾル可カラザルノ原理ニシテ從テ連鎖狀球菌わくちんヲ以テ完全ニ治癒スル所ノ間質性肺炎ハ其急性症タルト慢性ニ起リ慢性ニ經過スル症タルトヲ問ハズ卽チ連鎖狀球菌性疾病タルハ自ラ明カナル理ナルガ故ニ復タ隨テ連鎖狀球菌性間質性肺炎ハ其原因ヲ連鎖狀球菌ニ歸セザル可カラズ是レ現時ノ學說ニ從フモノナレバナリ。

予ハ實驗的治病上ノ證明ニ據リ現時ノ細菌學的原則ニ遵ヒ從來醫人ノ知得セル肺炎以外ニ連鎖狀球菌ニ因スル一種ノ肺炎ノ確實ニ存在スルコトヲ認識シ而シテ之ヲ夫ノ丹毒ノ病狀ヨリ推及シテ其炎症ノ本態ヲ以テ細小氣管枝及ビ肺胞周圍ノ間質結締織ノ充血若クハ炎症ナルコトヲ玆ニ斷定スルニ憚カラザルナリ此故ニ予ハ曩キニ肺癆病論及ビ腎學新論ヲ著述スルニ當リ單ニ臨床上ノ所見ノミヲ以テ斯病ヲ肺ノ間質組織ノ炎症ナリト想定セルヲ誇ラザルヲ得ズ然リ而シテ斯病ノ連鎖狀球菌ニヨリテ發スルニ拘ハラズ夫ノ丹毒ト其ノ病狀ノ趣ヲ異ニシ慢性ニ經過スルニ據リテ觀レバ或ハ其菌ノ性質ヲ異ニスルモノナルヤヲ思ハザルヲ得ズ。

連鎖狀球菌性間質性肺炎ハ既ニ肺癆病論ニ於テ論ゼシ如ク國民ノ極メテ多數ハ確實ニ之ニ罹患スルモノナリト雖モ其慢性ニ經過スル症ニ於テハ自覺的症狀ノ極メテ輕微ナルカ又ハ苦惱ヲ自覺セザルガ爲ニ其有病者ナルヲ覺知セズ又他覺的症狀ノ極メテ輕微ナルガ爲ニ醫人ノ注意ヲ惹起セザルアリ多少ノ理學的變常ノ存スルヲ診知スルモ之ヲ不問ニ附スルアリテ從來世人ノ注意ヲ喚起セザリシモノナル可シト雖モ一朝急性ニ變症シ發熱スルニ當リテハ其胸部ノ病狀ノ如何ニヨリテ或ハ單ニ流行性感冒ト目セラレ或ハ流行感冒性肺炎ト名ヅケラレ又從來甚ダ不明瞭ニシテ且不定型ナル夫ノ格魯布性肺炎若クハ單ニ肺炎ナル病名ノ下ニ經過スル病症及ビ加答兒性肺炎等ノ多數ハ必ズ本病ニ屬ス可キモノナルヲ信ジテ疑ハズ加之ナラズ本病ノ慢性ニ經過シテ肋膜腔ニ漲水スルニ及デハ濕性肋膜炎若クハ陳舊肋膜炎ト誤ラレ其發疹ト共ニ熱候アル症ニ於テハ麻疹若クハ猩紅熱ト診定セラレシモノアルヤ知ル可キナリ曾テ知人ノ治療スル患者ヲ一診シ間質性肺炎ト斷定セシモ知人ハ或理由ノ爲ニ之ヲ發疹窒扶斯ノ病名ノ下ニ送院セリ故ニ亦發疹窒扶斯ノ或數ハ其間質性肺炎タルヤ之ヲ知ルニ難シトセズ之ヲ以テ一般醫人ノ間質性肺炎ノ存在ヲ認識スルト否トハ國民ノ保健上ニ至大ナル關係アルモノナリト謂ハザルヲ得ズ。

從來說ク所ニ據レバ肺癆ハ結核菌ニ據リテ發症シ而シテ其經過中ニ他ノ細菌殊ニ連鎖狀球菌、葡萄狀球菌等ノ混合傳染ヲ致スモノナリト疾病ノ經過セシ後方ヨリ之ヲ觀察スレバ斯ク想像スルモ敢テ其病狀ニ相違スル

モノニ非ザルヲ以テ絶テ異議ノ生ゼシコト無カリシト雖モ叙上ノ治療的實驗ニ據リテ見レバ其觀察ノ誤謬ナルハ多言ヲ要セズシテ自ラ明カナリ之ヲ以テ吾人々類ニ於ケル肺癆ナルモノハ其病初ハ非結核性炎症卽チ連鎖狀球菌性間質性肺炎ヲ以テ起リ而シテ其經過中ニ殊ニ比較的早期ニ於テ結核菌ノ混合傳染ヲ蒙ムルアレバ卽チ結核性肺癆ニ轉症スト雖モ其然ラザルニ於テハ其慢性炎症ノ存在セル局部ニ自然良能ノ療病的機能ノ發顯スルアレバ其增殖セル間質組織ニ炎症ノ治癒機轉タル瘢痕樣收縮ヲ形成シ氣管枝擴張ヲ併發シ夫ノ成書ノ慢性間質性肺炎ニ移行スルモノナリトス而シテ吾人ハ之ニ據リテ從來其發病狀況ノ甚ダ不明瞭ナリシ慢性間質性肺炎ノ發生スルノ顚末ヲ了解シ得ルモノナリト謂フ可シ

第二編　續間質性肺炎之特殊療法

第一章　緒　言

昨年初夏ニ間質性肺炎ノ特殊療法及ビ其原因ト題セル一編ヲ著述シ之ニ據リテ夫ノ從來世人ノ概括的ニ命名セシ所ノ急性肺炎卽チ加答兒性肺炎、小兒肺炎、上葉性肺炎、變型的格魯布性肺炎及ビ流行性感冒若クハ流行性感冒腸窒扶斯、ぱらちふす、發疹窒扶斯等ニ類スル急性熱性病中ニ前人未說ノ連鎖狀球菌性間質性肺炎ノ確實ニ存在スルコトヲ療病的ニ證明シ且從來肺癆ナル病名ヲ慣用スル所ノ慢性肺炎ハ其病初ハ常ニ必ズ連鎖狀球菌ニ據リテ發症スルモノナルヲ以テ其當初ニ細菌學的特殊療法トシテ連鎖狀球菌わくちんノ注射療法ヲ行フ時ハ其病症ヲ容易ニ治癒セシメ得ルモノナルコトヲ論述セリ然リ而シテ其所說タルヤ單ニ急性及ビ慢性ノ連鎖狀球菌性肺炎ノ存在スルヲ證明スルノミニ止リテ其連鎖狀球菌性肺炎ノ慢性ニ經過スル間ニハ種々ノ病症ノ混合的併發ヲ致シテ其病症ヲ複雜ナラシメ其治癒ヲ困難ナラシメ而シテ時ニ其特殊療法ノ無效ナルヤヲ思ハシムルコト無キニ非ズト雖モ一切其說明ヲ省略シテ以テ他日ヲ期シタリキ之レ今回本編ヲ稿スル所以ナリトス。

惟フニ連鎖狀球菌性間質性肺炎ノ存在ニシテ世人ニ周知セラルヽニ至レバ啻ニ夫ノ意義ノ不明ナル所ノ小兒

肺炎、加答兒性肺炎、上葉性肺炎、一種ノ格魯布性肺炎及ビ流行性感冒若クハ之ニ類スル所ノ不明ナル熱性病等ノ其病理及ビ療法ヲ明カナラシムルコトヲ得ルノミナラズ更ニ或發疹性熱性病ヲ闡明ナラシムルヲ得テ此等急性熱性病者ヲ其早期ニ救治シ得ルノ效績タルヤ蓋シ尠ナカラザルモノナル可シ加之ナラズ更ニ進デ夫ノ國民ノ多數ニ潛在スル所ノ慢性肺炎ニシテ其病症ヲ知リ其治法ヲ解シ而シテ之ヲ其早期ニ診知シ而シテ之ヲ其初期ニ於テ容易ニ痊癒セシムニ於テハ單ニ慢性肺炎ノ續發症タル喘息、肋膜腔潴水、肝臟腫大、腹膜炎、多發性神經炎、神經衰弱、或精神異常症等ノ發生ノ因ヲ亡失セシメテ國民ノ健康ヲ向上セシメ得ルノミナラズ夫ノ結核性肺癆ニ移行スル所ノ因モ亦之ガ爲ニ喪失スルニ據リ間接ニ結核性肺癆患者ヲ或少數ニ減退セシムルヲ期シ得テ現時ニ喧シキ夫ノ肺結核ヲ豫防スルノ目的ハ其大半ヲ完成セシメ得ベキモノナリト爲スモ敢テ誇言ニ非ザル可シ

結核性肺癆ニ對スル治法ハ今ニ尙ホ不明ニシテこっほ氏以來結核菌製劑ノ研究ニ熱中スルモノ少ナカラズト雖モ概ネ其效果ノ不良ニ歸着セザルハナシ又近來青酸銅液若クハ之ニ類スルモノヲ用ユルモノアリト雖モ之レ亦其創製者ノ唱フルガ如ク治效アルモノニ非ザルガ如シ蓋シ然ル所以ノモノハ畢竟慢性肺炎ヲ以テ結核菌ニ由リテ發起スル所ノ單一ナル病症ナリト妄信シ其妄信ハ復タ他ヲ研鑽スルノ意志ヲ惹起セシメザルヲ以テ縱令病體ノ解剖上ニ結核性肺癆ハ結核性病竈ト非結核性炎症ト併存スルモノナリト說ク者アルモ毫モ之ヲ顧慮スルコトナク一途ニ結核性病竈ニノミ眩惑シテ肺癆ヲ以テ結核菌ニ據リテ發起スル所ノ病症ナリトナシ肺癆ノ其病初ハ連鎖狀球菌ニヨリテ發症シ而シテ其經過中ニ結核菌ノ傳染スルニ由リテ結核性病竈ノ併發スルモノナルヲ覺知セザルニ因由スルモノナリト爲サヾルヲ得ズ之ヲ以テ假リニつべるくりん又ハ其他ノ結核菌製劑若クハ靑酸銅液等ハ結核菌性病竈ニ對シ治效アルモノナリト爲スモ過去及ビ現在ニ於テ此等藥品ノ肺癆ニ治效ナキ所以ノモノハ複雜ナル病症ヨリナル肺癆ヲ以テ單一ナル病症ナリト過信スルニ因スルモノニシテ此等藥劑ノ作用ハ連鎖狀球菌性病竈ニ多大ノ刺戟ヲ附與シテ其炎症ヲ增强シ其病勢ヲ增惡シ而シテ其結核性病竈ニ對スル所ノ治效ヲシテ不良ニ歸セシムルモノナルヤモ亦知ル可カラズ此故ニ間質性肺炎及ビ其特殊療法ノ發見ハ既ニ結核菌ノ混合傳染ヲ致セル肺癆ニ對シ之ガ應用ニ由リテ先ヅ其病原タル非結核性炎症ヲ消退シ次デ結核性病竈ヲ孤立セシメ得ルヲ以テ其純乎タル結核性肺癆ニ對スル治療法ノ研究ニ至大ナル便宜ヲ有セシメテ他日必ズ其治法ノ完成ノ域ニ達スルアルヲ期待シ得ルモノナル可シ。

予ノ從來ノ治驗ニ據レバ新鮮ナル間質性肺炎ハ皆悉ク連鎖狀球菌ニ據リテ發症スルモノナルヲ以テ其特殊療法ニヨリテ容易ニ治癒セシメ得ルモノナリト雖モ既ニ多少ノ日子ヲ慢性ニ經過セル症ニ於テハ已ニ其病症ノ單純ナルヲ豫期シ得ベキニ非ズ之ヲ以テ其特殊療法ヲ行フヤ往々ニシテ或ハ既存ノ熱候ノ消褪セザルモノアリ或ハ既存ノ熱候ノ一旦下行シ次デ再ビ發熱スルモノアリ或ハ無熱又ハ微熱ニ經過セシモノニ突然高熱ヲ誘發セシメシヤノ看ヲナスモノアリ或ハ全身症狀ハ一般ニ佳良ニ赴クモ患部ノ濁性ノ依然トシテ亡散セザルモノアリ之レ卽チ本療法ノ眞價ヲ疑ハシメ且肺癆ノ眞因ノ連鎖狀球菌ニ在ルモノナルヲ悟得セシムルニ大ナル

支障タルモノナリトス然リ而シテ這般ノ複雜ナル病症ニ對シテハ單一ナル治法ヲ以テ之ヲ治癒セシムルコト能ハズ其病症ニ由リテ之ニ適スル所ノ治法ヲ併用セザル可カラザルハ固ヨリ明カニシテ未ダ其治法ノ研鑽ヲ盡セルニ非ズト雖モ從來最モ多ク遭遇スル所ノ病症ノ治法ヲ記述シ以テ斯病ノ治法ヲ研究スルノ資ニ供セント欲ス。

第二章　瘧

由來間質性肺炎ハ慢性ニ發症シ慢性ニ經過スル所ノ病症ナルヲ以テ病者ハ其經過中ニ諸種ノ疾病ニ罹患スルコトアルハ必然ノ理ニシテ敢テ異トスルニ非ズ故ヲ以テ夫ノ瘧ノ地方病トシテ存在スル地方ニ於テハ本病患者ノ之ニ罹患スルコトアルハ亦避ク可カラザルノ理タルナリ然シテ從來本邦ニ於テハ彼ノ新領土ノ惡性麻拉里亞ト假面間歇熱トヲ除ケバ一般ニ瘧ノ病症タルヤ整然トシテ固有ノ熱型ヲ有スルヲ以テ敢テ血液ノ檢査ヲ行フヲ要セズ單ニ其熱ノ經過ノミニ據リテ之ヲ診知スルニ難カラザルモノナルヲ常ナリトス之ヲ以テ斯ク固有ノ熱型ヲ有スル所ノ瘧ニシテ間質性肺炎ノ經過中ニ併發スルコトアルモ尙ホ其診斷ハ容易ニシテ殊更ニ之ヲ論述スル要ノ存スルモノニ非ザルナリ而シテ予ノ茲ニ說カント欲スル所ノ目的モ亦之レニ非ザルナリ。

質性肺炎ノ急性症ニ於テハ突然惡寒ヲ以テ高熱ヲ發シ頭重、頭痛、筋痛稀レニ嘔吐下痢等ノ之ニ伴フアリ而シテ其熱候タルヤ弛張熱ニシテ多クハ朝時ニ下降シ晩間惡寒ヲ以テ高昇スルヲ常ナリトス此故ニ若シ間質性肺炎ヲ有スル所ノ患者ニシテ一朝瘧ニ感染シ而シテ其瘧ノ熱型ニシテ非定型性ナルニ於テハ其發熱ヲ以テ急性間質性肺炎ニ因スルモノナリト誤認スルヲ免カレズ蓋シ吾邦ノ內地ニ於ケル間歇熱ハ寒戰ニ亞デ高熱ヲ發シ一定時ノ後ニ發汗ヲ以テ解熱シ次回ノ發熱期トノ間ニハ無熱期ノ存在スルモノナリトハ一般ニ承認スル所ナリト雖モ敢テ悉ク皆然ルニ非ズシテ戰慄ヲ缺如シ單ニ惡寒ノミヲ呈スルアリ又惡寒ノ極メテ輕微ナルコトアリ殊ニ間質性肺炎ヲ有スル所ノ患者ニシテ瘧ニ感染スル時ハ往々ニシテ寒戰ヲ缺如シ單ニ惡寒ノミヲ呈スルアリ同ジク弛張熱ヲ呈スルモ其解熱時ニ常溫若クハ常溫下ニ下行セザルヲ以テ一ノ特徵タル無熱期ノ缺クルアリ且這般ノ熱候ノ持續スル時ハ肺ニ於ケル變濁部ノ漸次ニ增大ヲ來スアリ之レ卽チ瘧ノ感染ヲ看過シ而シテ其發熱ヲ以テ直チニ之ヲ間質性肺炎ノ急性發作ニ嫁セシメザルヲ得ザル所以ナリトス況ヤ間質性肺炎ノ急性發作ト瘧ノ感染ト同時ニ存在スルモノニ於テヲヤ誤診ニ陷ラザラント欲スルモ得ザルナリ然レドモ仔細ニ之ヲ診査スルニ於テハ病初既ニ脾臟ノ腫大ヲ認ムルアリ或ハ其經過中ニ脾臟ノ腫大ヲ來スアリ又脾臟ノ腫大ト共ニ往々頑固ノ嘔吐ヲ來スモノアルナリ蓋シ間質性肺炎ハ絕對的ニ脾臟ノ腫大ヲ致スモノニ非ズシテ唯脾臟ノ腫大ヲ續發スルノ後ニ於テノミ始メテ脾腫ヲ來スモノナレバナリ之ヲ以テ其診査時ニ常ニ脾腫ノ有無ニ留意スル時ハ多クハ其誤診ヲ免カルヽヲ得ルモノナリト雖モ若シ夫レ其診査ノ粗漏ニシテ脾腫ノ有無ヲ檢知セズ單ニ肺ニ於ケル病變ノミヲ知得シ而シテ間質性肺炎ニ對シ其特殊療法ヲ行フモ熱候ノ下行セザルコ

トアル知ル可キナリ然レドモ予ノ茲ニ論述セント欲スル所ノモノハ單ニ叙上ノ病症ノミニ非ザルナリ。

予ハ從來脾臓ノ腫大ヲ診知スルニ主トシテ觸診ヲ行ヒ脾臓ノ尖端ヲ左季肋下部ニ觸知スルヲ以テ茲ニ脾腫ノ存スルモノト爲シタリ然レドモ其脾臓ノ輕微ナル腫大ニ於テハ斯ク之ヲ觸知シ得ベキ底ニ增大スルモノニ非ズ故ヲ以テ近來ハ殆ド單ニ打診ノミヲ用ヒ脾臓部ニ濁音ノ發現スルヲ以テ其腫大ヲ致セルモノト爲スナリ然レドモ脾部ニ於ケル濁音ハ唯脾臓ノ腫大ニノミ之ヲ來スニ非ズ而シテ本病ニ頻多ニ隨伴スル所ノ夫ノ胸水ノ爲ニ來ス半月狀部ノ變濁ハ體位ヲ變換セシムレバ消失シ脾腫ニ基ク濁音ハ遺殘スルヲ以テ之ヲ識別スルニ容易ナリトス然レドモ又稀有ナル症ニ於テハ同所ニ間質性肺炎ニ因スル濁音及ビ濕性肋膜炎ニ因スル濁音ノ存在スルコトアルモノナルヲ以テ時トシテハ其熱型若クハ其病狀ニヨリテ之ヲ想像セザルヲ得ザルコトアルナリ。

其一。慢性ニ經過スル間質性肺炎患者ニ瘧ノ發作ヲ來シ而シテ其熱候ノ不定型ナルモノアリ。

第一病例 生田目某女 四十三才

四五日前ヨリ不快ナリシモ勉メテ就業セシニ昨日來發熱シ頭痛アリ故ニ診ヲ乞フト云フ患者ハ昨年九月健康檢査ノ際ニ間質性肺炎存シびるけい反應ハ陽性ナリキ

大正五年十二月九日 診ス兩胸全背部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ依テ病室ニ入ルベキヲ勸キシモ肯セズ

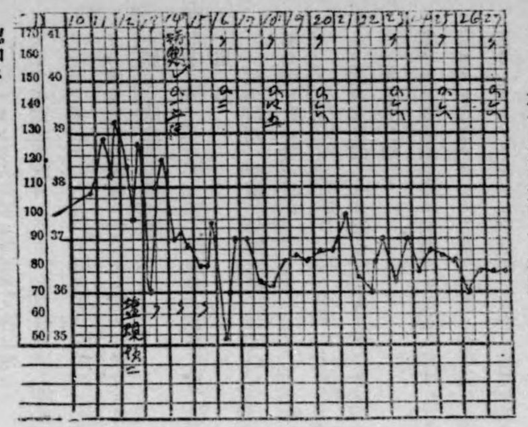
診斷 間質性肺炎

處方

甘汞 〇、七 フエナセチン 〇、五

乳糖 〇、五

右一包トナシ頓服



其二。又他ノ間質性肺炎患者ニ於テハ瘧ノ併存スルニ係ハラズ殆ド惡寒ナク唯僅カニ微熱ノミヲ呈スルコトアリ

第二病例　關　某　男　四十一才

一昨年頃ヨリ左肩及ビ左側胸ニ疼痛ヲ覺ヘ常ニ氣分爽快ナラズ且時々感冒ニ罹ルノ癖アリ肺ノ疾患ノ初メニ非ザルヤヲ疑ヒ醫學士白川某ノ診ヲ受ケシニ肺尖加答兒ニシテ全治セシムルニ三年ヲ要スト云ヘリト友人ノ勸ニヨリ予ノ許ニ來レリ

大正五年二月十三日　診スルニ左右肩胛下隅以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ右肩胛下隅以下ハ濁音ニシテ體位ノ變換ニヨリテ其濁音移動シ濁音ノ亡失セル部ノ呼吸音ニ異動ヲ認メズ肝右葉ハ腫大シ臍位ニ其緣ヲ觸ル

診　斷　間質性肺炎　右肋膜腔滿水　肝左葉腫大

處　方

佐氏煎劑　結劑　特製連鎖狀球菌わくちん注射

其加療日數ハ次ノ如シ

二月六日間　三月十日間　四月十四日間　五月二日間
六月八日間　七月六日間　八月十二日間　九月八日間
十月二日間

斯ノ如ク其治療ハ時々間歇セリト雖モ三月九日ニハ單ニ右肩胛上部ニノミ病變ヲ殘シ次デ肺ノ病變ハ一時全ク之ヲ認知シ得ザルニ至リシコトアリシモ其間歇的ノ加療ハ治效ヲ完成シ得ザルガ故ニ休療スレバ多少ノ日子ヲ經テ再ビ違和ヲ感シ肩ノ凝ヲ覺ヘ或ハ右肩胛上部又ハ兩肩胛上部ニ打音ノ輕濁ト呼吸音ノ減弱トヲ來シ加療スレバ諸症容易ニ亡散ス其間時ニ脾臟ノ腫大ヲ來シ其都度規尼涅ヲ投與セシコトアリシ斯ノ如クシテ十月十二日ノ診査時ニハ右肩胛上部ニ病變ヲ存セリ

大正六年一月二十八日　再ビ違和ヲ覺ユルヲ以テ治ヲ乞フ之ヲ診スルニ兩肩胛上部輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ依テ左方ヲ處ス

處　方

佐氏煎（八、〇）　二〇〇、〇　苦味丁幾　四、〇
右一日三回二日分服

結　劑　三錢膠囊六個
右一日三回食後二日分服

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

一月二十八日〇、五cc
二月一日　〇、六cc　三日　〇、六cc　五日　〇、六cc　八日　〇、六cc　十日〇、六cc　十三日〇、六cc　十五日〇、七cc　十七日〇、七cc　十九日〇、七cc　二十一日　〇、七cc　二十三日〇、七cc　二十五日〇、七cc　二十七日〇、七cc

二月十九日　兩肩胛上部ニ異常ヲ認メズ患者毎夕倦怠ヲ覺ユルニヨリ臨臥時ニあすびりん〇、五ヲ頓服スレバ翌朝氣分宜敷モ然ラザレバ翌朝氣分惡シク且尿色濃厚ナリト然ル若キハ其必ズ微熱ヲ發スルニ因由ルモノナルヲ想像スルモ肺ニ異常ヲ認メズシテ診時ハ常ニ平溫ナリ發熱ノ原ヲ知ル能ハズ依テ脾臟ヲ檢セシニ其腫大スルヲ知リシモ昨年數々脾腫ヲ來シ其際ニ規尼涅ヲ投與セシコトハ概ニ忘失シ患者臺灣ニ渡航セシコトヲ知ルガ故ニ既往ノ病歷ヲ問ヒ左ノ答ヲ得タリ

日清戰役ニ際シ征討ニ從ヒ臺灣ニ航シ戰後同地ニ滯在スルコト數年其間數々痲拉里亞ニ罹リ其蓄地ニ於テ發作アリシ時ノ知キハ薬入ニ習ヒ全身ヲ河水ニ浸シテ以テ治癒セシメタルコトアリ

歸京後二三年間ハ亦屢其再發アリシモ或賣藥ヲ連用シテ以來茲ニ數年間ハ痲拉里亞發作ノ徵候ハ曾テナカリシモ尚ホ感冒時ニハ一種不快ノ感アリシヲ以テ其都度規尼涅ヲ飲用セリト之ニ據リテ其發熱ノ必ズ痲拉里亞ニ因スルモノナルヲ信ジ左方ヲ處セリ

處　方

鹽酸キニーネ　〇、五
右一包トナシ四包ヲ與フ　朝夕一包頓服

二月二十一日　患者云フ規尼涅服後ハ倦怠ナク尿色淡シト依テ尚ホ其服用ヲ持續セシメ二十四日ヨリ一週日間ハ毎日其一包ヲ服用セシメタリ

以上記スルガ如ク吾人ノ間質性肺炎患者ヲ診スルニ當リテハ其病症ノ急性タルト否ラザルトヲ論セズ又其既往ニ痲拉里亞ニ罹患セシコトアルト否ラザルトヲ問ハズ常ニ脾臟ノ腫大アルヤ否ヤヲ注意シ苟クモ多少脾臟部ニ濁音ノ存在スルアレバ先ヅ規尼涅ヲ投與シテ以テ瘧ノ併存ヲ攻治シ其誤謬ヲ來スヲ防ガザル可カラズ而シテ夫ノ窒扶斯ノ早期ニ於テモ亦既ニ脾臟ノ腫大ヲ來スコトアルモノナルヲ以テ注意シテ之ヲ識別スベキハ勿論ナリトス然リト雖モ叙上ノ記述ハ唯是レ單ニ間質性肺炎患者ニ瘧ノ併存スルコト敢テ稀有ニ非ザルガ故ニ其診療時ニ際シ常ニ之ヲ忘却セザランコトヲ注意スルノミニ過ギズシテ亦予ノ茲ニ論述セント欲スル所ノ主要ナル目的ニハ非ザルナリ

其三 間質性肺炎患者ニ特殊療法ヲ行フニ際シ殊ニ注意セザル可カラザルハ往々其注射療法ヲ行フガ爲ニ瘧ノ發作ヲ誘致スルヤヲ疑ハシムルノ一事ナリトス卽チ高熱ヲ有スル間質性肺炎患者ニ對シ特殊療法ヲ行ヒ豫期ノ如ク解熱シ一日若クハ數日間無熱ニ經過スルヲ以テ其治效ノ佳良ナルヲ誇ラントスルニ際シ突如トシテ發熱シ其際ニ惡寒ノ前驅スルアリ惡寒ノ缺如スルアリ又大弛張熱ナルアリ小弛張熱ナルアリ又ハ其熱候ノ甚ダ高キアリ中等度ノ輕熱ナルアリ而シテ特殊療法ニ據リテハ絕ヘテ解熱ノ傾向ヲ呈スルコトナキモ此際ニ注意シテ脾臟部ヲ診査スレバ必ズ脾部ニ濁音ヲ現出スルアリ規尼涅ヲ投與スレバ容易ニ其熱候ヲ下行シ且脾部ノ濁音ヲ消失セシムルコトヲ得ルモノナリ

第三病例 田代某男 二十二才

去月三十日頃ヨリ頭痛アリ翌三十一日あすぴりん〇、七ヲ頓服セシニ多量ノ發汗アリ發汗後約一時間ヲ經テ寒戰ニ次デ發熱シ爾來醫療ヲ加フルモ熱候下降セズ四五日來體溫朝三十八度九分乃至三十九度夕四十度ナリシ而シテ二三ノ醫師ハ皆其腸窒扶斯ニ非ザルヤヲ疑ヘリ依テ診ヲ乞フト云フ

大正四年九月八日 診ス兩肩胛下隅以上ハ輕濁音ヲ呈シ呼吸音微弱ナリ他ニ異常ナシ依テ間質性肺炎ト診定シ翌九日入院セシム

九月九日 左方ヲ處ス

處方

鹽酸リモナーデ 二〇〇、〇 赤葡萄酸 二五、〇
右飲料 口渴時數回ニ服用セシム
炭酸アヤコール 〇、五 乳糖 一、〇
右散三包トナス一日三回分服
大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン 〇、五cc
右肩胛間部ノ皮下ニ注射フ
二%鹽素酸加里液 三〇〇、〇
右含嗽料

九月十一日 內服藥及含嗽藥ハ各前方ヲ與フ

處方

鹽酸キニーネ 〇、五
右丸一包トナシ二包ヲ與フ 朝夕一包頓服

九月十五日 內服藥及鹽規ヲ與フルコト前ノ如シ
連鎖狀球菌ワクチン 一、〇
右注射ス

九月十六日 昨朝常溫下ニ下行セシ體溫ハ再ビ上昇セシヲ以テ左方ヲ處ス

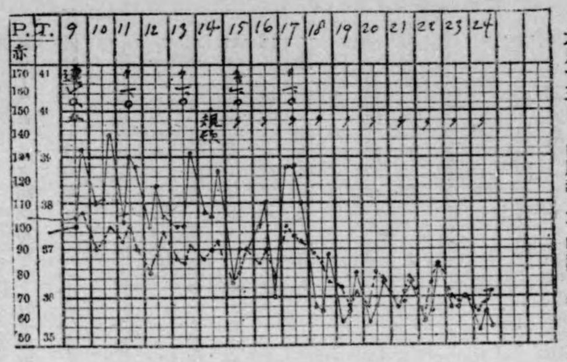
處方

甘汞 〇、七 フエナセチン 〇、五
乳糖 〇、五
右一包トナシ頓服
佐氏煎(四、〇) 一〇〇、〇 撒里矢爾酸曹達 二、〇
苦味丁幾 二、〇 メンタ水 五、〇
右一日三回分服
結劑 四號膠囊三個
右一日三回食後分服
鹽酸キニーネ 〇、五
右一包トナス 朝夕一包頓服

九月十七日 脾部ノ濁音ナシ佐氏煎劑、結劑及鹽規ヲ與フルコト前ノ如シ

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン
右注射ス 一、〇

九月十三日 內服藥及含嗽藥ハ各前方ヲ與フ



大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン
右注射ス 一、〇

九月十四日 入院卽日ヨリ連鎖狀球菌わくちんヲ注射セシニ豫期ノ如ク體溫漸次ニ下行シ昨日朝時ノ體溫ハ三十七度一分ナリシニ夕刻ハ急劇ニ高昇シ三十九度一分ニ達シ本日朝溫三十七度八分ナリシヲ以テ脾部ヲ檢セシニ同所ニ濁音ノ存在スルヲ以テ其發熱ノ扁拉里亞發作ニ因スルモノナルヲ信ジ上記內服藥ノ外ニ左方ヲ處セリ

處方

續間質性肺炎之特殊療法

大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　一、〇
右注射ス

九月十八日　此日體溫常溫ニ下行シ爾來再ビ上昇セズ內服藥ハ佐氏煎劑、結劑ヲ持續シ與ヘ鹽規ハ二十日マデ同量ヲ朝夕一回宛服用セシメシモ其以後ハ一日一回トナシ二十四日ニ至リ之ヲ休止セリ而シテ十月五日全治退院ス

第四病例　深澤某男　二十八才

一昨日晝頃ヨリ下腹ニ疼痛ヲ發シ某醫ニ治ヲ托スルモ疼痛依然トシテ存スルニヨリ入院治ヲ乞フト云フ

大正五年一月十四日　之ヲ診スルニ右肩胛間部中央以上及ビ左肩胛上部ハ共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ右腸骨窩部ハ打音輕濁ニシ抵抗アリ壓痛アリ　貧血ス

診斷　間質性肺炎　腹膜炎

處方

佐氏煎（四、〇）一〇〇、〇　沃度加里　〇、五
苦味丁幾　二、〇　メンタ水　五、〇
右一日三回食前分服

結劑　四號膠囊三個
右一日三回食後分服

混合連鎖狀ワクチン（大阪血清藥院製　三分ノ一、五cc
石神傳染病研究所製一分ノ者〇、五cc
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

佐氏塗布劑
右朝夕一回下腹部ニ塗布セシム

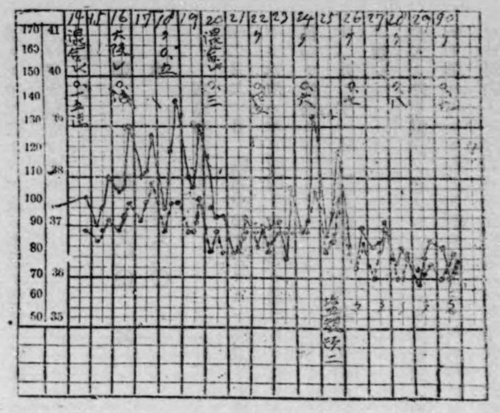
一月十六日　諸症依然タリ內服藥及ビ塗布劑ヲ用ユルコト前ノ如シ混合わくちん缺品ス依テ大阪血清藥院製わくちんヲ用ユ
大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四cc
右注射ス

一月十八日　諸症依然タリ內服藥、塗腹藥前ノ如シ
大阪血清藥院製連鎖狀球菌ワクチン　〇、五cc
右注射ス

一月二十日　諸症依然タリ
處方

結劑　三號膠囊三個
右一日三回食後分服

佐氏煎劑　佐氏塗劑之塗腹　各前ノ如シ
混合連鎖狀球菌ワクチン　〇、三
右注射ス



一月二十二日　一昨廿日來體溫下行ス　佐氏煎劑、結劑、塗腹劑各前方

混合連鎖狀球菌ワクチン　〇、四五
右注射ス

一月二十四日　各前方ヲ處ス

混合連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス

一月二十五日　一旦下降セシ體溫ハ一昨二十三日少シク高昇シ昨朝ハ三十七度ニ下行セシモ夕刻突然三十九度二分ニ上昇ス依テ診査セシニ脾部ニ相當シテ濁音ヲ生ズ患者云フ曾テ瘧ニ罹リシコトナシト然レドモ其發熱ノ瘧發作タルヲ思フベシ

處方

鹽酸キニーネ　〇、五
右一包トナシ二包ヲ與フ　朝夕一包頓服

佐氏煎劑　結劑　塗布劑　各前方
一月二十六日　各前方ヲ處ス

混合連鎖狀球菌ワクチン　〇、七
右注射ス

一月二十七日　體溫ハ昨日來殆ド常溫ニ復シ且脾部ノ濁音亡失ス
各前方ヲ處ス

二月二日　諸症輕快ス越ヘテ五日退院ス爾後外來患者トシテ引續キ加療セリ

第五病例　伊藤某男　十五才

○○○四　微熱若クハ發熱ヲ以テ經過スル患者ニ一回若クハ數回特殊療法ヲ行ヒシ後ニ瘧ノ發作ヲ來スコトアリ

誤テ湯槽ニ落チ熱傷ヲ蒙リシガ爲ニ入院治ヲ乞フ

大正五年十二月十九日夕　診ス左前膊ノ下四分一部、左下腿全部及右足關節部トハ第二度ノ熱傷ニシテ處々ニ水泡ヲ形成セリ而シテ多量ノ阿列布油ヲ塗布シアリタルガ爲ニびくりん酸液ノ塗布ヲ試ムルモ無效ナルガ故ニ水泡ヲ切破ノ局部ノ皮膚ヲ其儘ニ保存シ左ノ濕布繃絡ヲ行ヘリ

處方

硼酸　一〇、〇　食鹽　一〇、〇
水　一〇〇〇、〇

右濕布料トス

十二月二十日　濕布交換ヲ行フニハ注意シテ患部ノ表皮ヲ保存セシメ水泡ハ單ニ切開シテ内容ヲ漏ラスニ止マラシム但シ朝夕二回濕布ヲ交換ス

十二月二十一日　經過佳良ニシテ滲出液甚ダ少ナシ　濕布交換前ノ如シ

患者入院來微熱ノ存スルアリ而シテ其發熱ノ原ノ或ハ熱傷ニ基クヤヲ思ハザルニ非ズト雖モ速了スベキニ非ザルヲ以テ背部ヲ診スルニ兩胸ノ全背部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ依テ患者ニ遡災前ノ狀況ヲ問ヒシニ時々午後ニ惡寒ヲ感ズルコトアリトノ之ヲ以テ其發熱ノ一部ハ的確ニ間質性肺炎ニ因スル者ナルヲ想像シ左方ヲ與フ

處方

佐氏煎（四、〇）一〇〇、〇　苦味丁幾　二、〇
右一日二回分服
佐氏結列阿賈篤丸　六粒
右一日三回分服

十二月二十二日　熱傷部ノ滲出液甚ダ少ナシ　濕布、佐氏煎劑、結丸各前方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一五
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

十二月二十四日　各前方ヲ處ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、三
右注射ス

十二月二十五日　熱傷部ノ經過益々佳良ナリ　各前方ヲ處ス

昨夜寒氣アリテ發熱シ今夕亦寒氣シテ發熱シ頭痛アリテ依テ脾部ヲ診スルニ濁音存ス患者云フ往時二回間歇熱ニ罹リシコトアリト依テ瘧ノ發作ナリト信ジ左方ヲ處ス

處方

鹽酸キニーネ　〇、五
右一包トナシ二包ヲ與フ　朝夕一包頓服但シ今夜一包ヲ服

セシム

十二月二十六日

壞死セル表皮ハ剝離シ易シ依テ表皮ノ保存セル部ハ上記ノ濕布ヲ持續シテ行ハシメ其剝離セル部ニハ左方ヲ處セリ

處方

酸化亞鉛　一、〇
硼酸末　一、〇
單軟膏　四、〇
右一包トナシ表皮ノ剝離部ニ貼セシム

佐氏煎劑　結丸　各前方
特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四五
右注射ス

此日誤リテ規尼涅ヲ投與スルヲ忘失ス

十二月二十七日　熱傷部ノ處置前ノ如シ　佐氏煎劑、結丸、鹽規各前ノ如シ

十二月二十八日　各前方ヲ處ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス

十二月三十日　熱傷部ノ經過益々佳良ニシテ殆ド滲出液ナシ　胸部ニ異常ナシ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス
各前方ヲ處ス

第六病例　鈴木某男　二十一才

五年前僂麻質斯樣ノ疾病ノ爲ニ醫ニ診ヲ乞ヒ始メテ肋膜炎ノ存在スルヲ發見セラレタリ大正元年四月上顎竇蓄膿症ノ手術ヲナシ五月頃ヨリ咳嗽喀痰アリ六月頃始メテ喀血セリ爾來殆ド毎月喀血シ喀血量ノ多キ時ハ二〇〇、〇cc位ナリシ而シテ病初ハ體溫三十八

度位アリシモ昨年頃ヨリ通常三十七度内外ナリ發病後郷里ノ醫師及ビ宮城病院等ノ治療ヲ受ケシモ荏苒治セザルニヨリ本年三月上京シ始メ杏雲堂病院ニ入院シ五月下旬轉ジテ北里氏養生園ニ入院セリ養生園ニテ檢セシびるけい反應ハ陽性ナリキ而シテ入園後つべるくりんノ注射ヲ受クルコト四回ニシテ喀血セルニヨリ該注射ヲ休止シ休止後三ヶ月ヲ經テ再ビつべるくりんノ注射ヲ行フコト三回ニシテ亦喀血セリ之ヲ以テ同園ニテハつべるくりんノ注射ニ適當セザルノ病症ナリト爲セリ之ニヨリ退園シ直チニ小石川病院ニ入院セリ然ルニ入院當日約十ぐらむ程ノ喀血アリテ三日間程喀痰中ニ血液ヲ混ゼリ而シテ該病院ニ在院中二十日程ノ間ニ十二三回ノ靜脈内注射ヲ行ヘリ次デ佃島海岸病院ニ入院シ同院ニ於テ復亦喀血セリ而シテ最終ノ喀血ハ三日前ニシテ三日間血痰持續セリ昨今ハ咳嗽少ナク朝及ビ午前中ニ多少ノ咳嗽アルニ過ギズ喀痰ハ亦午前ニ多クシテ午後ハ減ジ夜間ハ殆ドナシ又右鼻ツマリ且鼻汁多シ

大正四年十二月十日　診ス兩胸全背部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱ク殊ニ右肩胛上部ハ殆ド呼吸音ヲ聽取スルコトナシ左肩胛下隅附近ニ弱キ狹窄音ト水泡音トヲ聽取ス

診斷　間質性肺炎

處方

佐氏煎(七、〇)　一〇〇、〇　杏仁水　四、〇
苦味丁幾　二、〇　メンタ水　五、〇
右一日三回食前分服

結劑　四號膠囊三個
右一日三回食後分服
石神傳染病研究所製連鎖狀球菌ワクチン　〇、二cc
右肩胛回部ノ皮下ニ注射ス

十二月十四日　脾臟ノ所在部ニ濁音ヲ呈ス(脾臟腫大)

處方
鹽酸キニーネ　〇、五
右一包トナシ二包ヲ與フ朝夕一包頓服

佐氏煎劑、結劑　各前方

十二月十六日　昨夜少量ノ血痰ヲ三回喀出セリ、佐氏煎劑　結劑　鹽規各前方ヲ處ス

石神傳染病研究所製連鎖狀球菌ワクチン　〇、五
右注射ス

十二月十八日　昨夜少シク喀血セリト　内服藥ハ各前方ヲ與フ

十二月十九日　昨夜八時ト今曉三時頃トニ喀血アリシト

處方
實芰答利斯浸(〇、五)　一〇〇、〇　ストロフアンツス丁幾　一、〇

右一日三回分服

佐氏煎劑　結劑　鹽規　各前方

此日午前中ニ又一回喀血セリ

十二月二十日　昨夜喀血ナシ今朝一回喀血セリト咳嗽ナシ

處方
佐氏煎(一二、〇)　乙切草煎(五、〇)　一〇〇、〇
杏仁水　四、〇　苦味丁幾　二、〇
メンタ水　五、〇
右一日三回分服

參角丸　〇、八
右二包トナシ朝夕一包頓服

實芰答利斯浸劑　結劑　各前方

十二月二十一日　尚ホ喀血アリ嘔氣アリ

處方
千倍アドレナリン液　〇、五
右上膊ノ皮下二注射ス
佐氏煎(一〇、〇)　乙切草煎(五、〇)　一〇〇、〇
鹽酸モルヒネ　〇、〇一　杏仁水　四、〇
苦味丁幾　二、〇　メンタ水　五、〇
右一日三回分服

結劑　三號膠囊三個
右一日三回食後分服

十二月二十二日　昨夜喀血ナシ今朝少シク喀血ス嘔氣尚ホ止マズ

處方
セルテル水　三〇〇、〇　阿片丁幾　一、〇
右飲料　嘔時ニ服セシム

佐氏煎劑　結劑　各前方
終日少量ヅヽノ喀血アリ

處方
千倍アドレナリン　〇、九
右上膊ノ皮下ニ注射ス

十二月二十三日　尚ホ少量ヅヽノ血痰アリ而シテ今回喀血セシ以後ハ膿痰ノ排出ナカリシモ今朝來膿痰ト血痰ト相半バシテ出ヅト

處方
佐氏煎(一二、〇)　一〇〇、〇　ストロフアンツス丁幾　一、〇
鹽酸モルヒネ　〇、〇一　杏仁水　四、〇
メンタ水　五、〇
右一日三回分服

參角丸　一、〇
右三包トナシ一日三回分服

結劑

前方ヲ與フ

十二月二十六日　内服藥ハ各前方ヲ處ス

混合連鎖狀球菌ワクチン　〇、四

右注射ス

十二月二十八日　略

痰ハ全ク血點ヲ帶ビズ

處方

佐氏煎（八、〇）　一〇〇、〇

ストロフアンツス　一、〇

丁幾

杏仁水　四、〇

メンタ水

右一包三回分服

結劑

前方

混合連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

大正九年一月五日　朝少シク血痰アリシト　内服藥各前方ヲ處ス

一月七日　肺部ノ變常ハ大ニ狹小シ右肩胛上部及ビ左肩胛下隅以下ハ尚ホ打音濁ニシテ呼吸音微弱ナリ然レドモ從來存セシ左肩胛下隅附近ノ水泡音ヲ聽取セス

處方

結劑　二號膠囊三個

右一日三回分服

佐氏煎劑　前方

混合連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

七日　〇、六cc　九日　〇、七cc　十一日　〇、八cc　十三日　〇、九cc　十五日　一、〇cc

一月十日　佐氏煎劑中ヨリすとろふぁんつす丁幾ヲ除キ苦味丁幾二、〇ヲ加フ

一月十七日　體重ノ增加スルコト二、五「キログラム」ナリ　内服藥各前方

大阪血清藥院製わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

十七日　一、〇cc　十九日　一、〇cc

一月二十日　今朝血痰アリシト

處方

結劑　一號膠囊三個

右一日三回分服

佐氏煎劑　前方

一月二十一日　内服藥ハ各前方

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

二十一日　〇、五cc　二十三日　〇、六cc　二十五日　〇、八cc　二十七日　〇、九cc　二十九日　一、〇cc　三十一日　一、〇cc

一月二十四日　脾臟部ニ濁音ヲ生ズ　體重ノ增加スルコト一「ぎろぐらむ」ナリ

處方

鹽酸キニーネ　〇、五

右一包トナシ二包ヲ與フ　朝夕一包頓服

一月三十一日　脾臟部ノ濁音亡失ス依テ鹽酸ノ服用ヲ休止ス　佐氏煎劑及結劑各前方

二月三日　内服藥ハ各前方ヲ與フ

大阪血清藥院製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

三日　一、〇cc　五日　一、〇cc

二月八日　佐氏煎劑　結劑　各前方ヲ處ス

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

八日　〇、四cc　十日　〇、五cc　十二日　〇、六cc　十四日　〇、六cc　十六日　〇、七cc　十八日　〇、七cc　二十日　〇、七cc　二十二日　〇、七cc　二十四日　〇、七cc　二十七日　〇、八cc　二十九日　〇、八cc

三月二日　〇、八cc　四日　〇、八cc

二月九日　喘息ヲ發ス

處方

佐氏煎（五、〇）　一〇〇、〇　臭素加里　一、五

右一日三回食前分服

結　劑　前方

二月十一日　體重一きろぐらむヲ增ス

二月十七日　兩三日來復タ血痰アリ昨日下痢樣ノ便通三回アリシト云フ之ヲ診スルニ左腸骨窩部ハ輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ（腹膜炎）喘鳥症狀ハ既ニ亡散ス

處　方

佐氏煎（五、〇）一〇〇、〇　苦味丁幾　二、〇
右一日三回食前分服

結　劑　〇號膠囊三個
右一日三回食後分服

佐氏塗布劑ヲ塗腹スルコト前ノ如シ

三月二日　午前十時頃ヨリ惡寒アリ次デ發熱ス依テ直チニ左方ヲ與フ

處　方

甘　汞　〇、七　フエナセチン　〇、五
乳　糖　〇、五
右一包トナシ頓服

佐氏煎（五、〇）一、〇〇〇　沃度加里　〇、五
苦味丁幾　二、〇
右一日三回食前分服

結　劑　前方ヲ與フ

佐氏塗布劑　朝夕下腹部ニ塗布ス

三月一日　右肩胛上部及ビ左肩胛下隅ノ內側ハ輕濁ニシテ呼吸音弱シ　左腸骨窩部ハ尙ホ輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ體重ノ增加スルコト〇、七五きろぐらむナリ

處　方

佐氏煎（五、〇）一〇〇、〇　苦味丁幾　二、〇
右一日三回食前分服

結　劑　〇號膠囊三個
右一日三回食後分服

佐氏塗布劑ヲ塗腹スルコト前ノ如シ

三月三日　甘汞ノ頓服ハ無效ニ歸セリ而シテ脾部ニ濁音現出ス（麻拉里亞併發）

處　方

鹽酸キニーネ　〇、五
右一包トナシ二包ヲ與フ　朝夕一包頓服

佐氏煎劑　結劑　塗腹劑　各前方

三月六日　昨日來解熱ス此日退院ス

患者ノ義兄ニ伊勢ニ住シ醫ヲ業トスルモノアリ二月下旬來院シ患者ヲ診シ其肺部ニ何等病狀ノ認ムベキ無キヲ以テ既ニ全治セルモノナリト認定セシガ伊勢ノ海濱ニ轉地療養スベキヲ勸告セリト患者ハ之ヲ信ジ幸ニ發熱ノ亡散セシヲ以テ本日伊勢ニ行クコトヲ告グ故ニ予ハ彼ニ答フルニ其病症ノ全治セル後ニ海濱ニ靜養スルハ病後ノ體力ヲ增加シ健康ヲ增進スルノ方法ナルヲ以テ伊勢ノ海濱ニ行クハ至極佳良ナルモ汝ノ病症未ダ全治セズ假リニ胸部ニ認ムベキノ症狀ナシトスルモ慢性ノ炎症ハ短時日ノ間ニ全癒スベキニ非ズシテ唯藥力ノ爲ニ其部ノ充血ノ消退セシノミニ過ギズ加之ナラズ其慢性炎症ノ存在セシ組織ハ殊ニ抵抗力ノ減退スルヲ以テ其藥力ノ亡失スルカ又ハ感冒若クハ他ノ傳炎機轉ニ遭遇スルアレバ再ビ充血ヲ來シ炎症ヲ來シ病症ノ再發シ易キ傾向ノ大ナルヤ知ルベシ況ヤ一旦亡失セシ肺ノ變狀ノ頃日再燃ノ兆アルニ於テオヤ若カズ猶一二月加療シ而シテ後ニ伊勢ニ赴クノ安全ナルニト彼聽カズ予ノ不在ニ際シ退院セリ果然一二ケ月ノ後ニ處方ノ間合セアリタリ斯ノ如キハ其未熟ナル醫ノ技倆ハ病者ヲ賊スル者ナリト謂ツベシ

第七病例　星井某女　二十七才

昨日來發熱シ頭痛、咽頭痛及兩肩胛上部ニ疼痛アリ

大正六年一月二十日　診ス兩肩胛下隅以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ右扁桃腺ハ少シク發赤腫脹セリ

處　方

五%硝酸銀水
右扁桃腺ニ塗布ス

二%鹽素酸加里液　三〇〇、〇
右含嗽料

甘　汞　〇、七　フエナセチン　〇、五
乳　糖　〇、五

其五。病初ヨリ麻拉里亞ノ其體內ニ潛在スル爲カ特殊療法ヲ行フテ其解熱ノ不正ナルモノアリ

右一包トナス頓服

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　苦味丁幾　四、〇

右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　十二粒

右一日三回食後二日分服

五月二十一日　本日再ヒ硝酸銀水ヲ扁桃腺ニ塗布ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一五

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

一月二十二日　熱候却テ上昇シ一昨日投與セシ甘汞劑ノ效力少ナシ依テ再ビ甘汞劑ヲ與ヘ佐氏煎劑及ビ佐氏結丸ハ前方ニ處ス

處方

甘汞　〇、七　フエナセチン　〇、五

乳糖　〇、五

右一包トナシ頓服

一月二十三日　脾ノ腫大ヲ診知ス　佐氏煎劑　結丸　各前方

處方

鹽酸キニーネ　〇、五

右一包トナシ四包ヲ與フ　朝夕一包頓服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、三

右注射ス

一月二十五日　佐氏煎劑　結丸　鹽規　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四五

右注射ス

一月二十七日　兩肩胛上部輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ　佐氏煎劑　結丸　鹽規　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

一月二十九日　病室ヲ去ル二月二日マデ服藥シ次デ就業ス

第八病例　宇津木某女　二十二才

昨夜八時頃ヨリ俄然發熱頭痛腹痛ヲ發シ次デ下痢嘔吐ヲ來シ今朝マデニ下痢三回嘔吐數回アリシト

大正六年四月十三日朝　診ス兩肩胛間部中央以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ脾腫大シ左腸骨窩部ハ打音輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ他ニ異常ヲ認メズ

診斷　間質性肺炎　腹膜炎　癌

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇

苦味丁幾　四、〇

右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　十二粒

右一日三回食後二日分服

鹽酸キニーネ　〇、五

右一包トナシ四包ヲ與フ　朝夕一包頓服

佐氏塗布劑

續間質性肺炎之特殊療法

右下腹部ニ塗布ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、二

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

四月十六日　左肩胛間部中央以上及ビ右肩胛下隅以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ右肩胛下隅以上濕水アリ脾ノ腫大及ビ左腹膜炎依然タリ、昨日投藥ノ際ニ鹽規ヲ與ヘザリシ

處方

鹽酸キニーネ　〇、五

右一包トナシ四包ヲ與フ　朝夕一包頓服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四

左注射ス

四月十八日　腹膜炎ノ症狀亡失ス　佐氏煎劑　結丸　鹽規　各前方ヲ與ヘ塗腹劑ヲ廢ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

四月二十日　脾腫消失シ背部ニ異常ヲ認メズ　佐氏煎劑　結丸　鹽規　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

本患者ニ於テ十六日及十七日ノ午前其體溫ノ少シク高カリシハ鹽規ヲ與ヘザリシ爲ナルヲ思ハザルヲ得ズ

四月二十一日　佐氏煎劑　結丸　前方ヲ與フ

其六。間質性肺炎患者ニ對シ特殊療法ヲ行フ時ハ往々瘧ノ潜在スルガ爲ニ或ハ發熱ヲ來シ或ハ其熱ノ下行ヲ不正ナラシムルコトアルヲ以テ吾人ハ間質性肺炎患者ヲ診スルニ當リテハ常ニ脾臓ノ狀態如何ニ留意シ而シテ若シ脾臓部ニ濁音ノ存在スルヲ診知スルニ於テハ特殊療法ヲ行フト同時ニ規尼涅ヲ投與スルヲ以テ最モ安全ナル治療法ト爲サヾル可カラズ

第九病例　齋藤某男　三十一才　醫師

明治四十二年頃ナリシガ患者ノ某醫學專門學校ニ入學セシ後ニ間質性肺炎ノ存在スルヲ診知セリ其後病狀ノ增惡セシガ爲メ北里博士ノ治ヲ受ケ明治四十四年十月ヨリ大正元年七月マデニつべるくりん注射ヲ受クルコト前後五十三回而シテ最後ニハ原液二、〇cc ヲ注射スルコト五回其後ニ原液〇、一cc ヲ注射スルコト數回ナリシト云フ然レドモ病症全治セザルヲ以テ常ニ佐氏煎劑及ビ結劑ヲ服用セシメタリ昨年二月急性間質性肺炎ニ罹リ其後ニ特殊療法ヲ行ヘリ昨年秋一診セシニ尙ホ右肩胛上部ニ打診上抵抗ノ增加ト呼吸音ノ微弱トヲ殘セリ這般ノ病變ハ恐ラクつべるくりんノ爲ニ增惡セシ炎症ノ遺殘的治癒變化ニ基クモノナルベシ然ルニ數日來少シク違和ヲ覺ユルヲ以テ要心シツヽ業務ニ從事セシニ突然高熱ヲ發セシヲ以テ診ヲ乞フト云フ　體溫午後九時三十九度三分、十二時四十度二分

大正六年三月十五日夜十二時　診ス左右兩鎖骨下部ハ打音少シク抵抗アリ呼吸音粗雜ナリ兩胸背部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ殊ニ兩肩胛上部ニ於テ其病變著明ナリ脾部ノ濁音存ス他ニ異常ナシ患者云フ既ニ鹽規〇、五ヲ服用セリト

診斷　急性間質性肺炎　瘧

處方

鹽酸キニーネ　〇、五

右一包トナシ二包ヲ與フ　朝夕一包頓服　其夜尙ホ一包ヲ服セシム

鹽酸リモナーデ　一〇〇、〇

右鹽規服後ノ飲料トス

三月十六日　午後往診ス肺部ノ變狀依然タルモ脾部ノ濁音消失ス

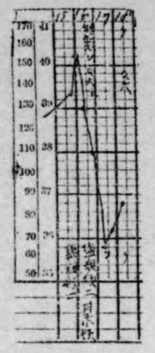
此日體溫午前三十九度午後三十八度　家人ニ告ゲルニ明朝解熱スベキヲ以テス

處方

甘汞　〇、七　フエナセチン　〇、五

乳糖　〇、五

右一包トナシ頓服



撒里矢爾酸曹達　二、〇

苦味丁幾　二、〇

メンタ水　五、〇

右一日三回分服

結劑　〇魏膠囊三個

右一日三回分服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右肩胛部ノ皮下ニ注射ス

三月十七日　此日體溫朝三十五度八分、夕三十六度二分

三月十八日　午後往診ス兩鎖骨下部ハ打音異常ナキモ呼吸音尙ホ粗雜ナリ兩肩胛上部輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ　此日體溫三十六度八分　患者云フ昨日來業務ニ從事スト

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

目下加療中ナリ而シテ本患者ノ其病初ニ三十九度三分ヨリ四十度二分ニ上達セシ高溫ノ翌日夕三十八度ニ下降セシハ之ヲ規尼涅ノ效ニ歸セザルヲ得ズ

纖間質性肺炎之特殊療法

第十病例　富田某女　三十五才

八九日前ヨリ發熱、胸痛、咳嗽、咯痰、不眠等アリ咳嗽ハ頻發シ殊ニ夜間ニ多シ發病以來醫療ヲ受クルモ更ニ緩解スルノ徵ナシ依テ診ヲ乞フト

大正六年四月二十四日　正午診ス左胸第三肋骨以上ハ濁音ヲ呈シ呼吸音粗烈ニシテ饒多ノ水泡音ト銳利ノ氣管枝音トヲ聽取ス右肩胛下隅以上及ビ左背全部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ脾ノ所在部ニ濁音ヲ呈ス

診斷　急性間質性肺炎發作　脾腫大

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　杏仁水　八、〇

苦味丁幾　四、〇

右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　十二粒

右一日三回食後二日分服

鹽酸キニーネ　〇、五

右一包トナシ二包ヲ與フ　毎日一包頓服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一五

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

四月二十六日　一昨日注射後二三時間ヲ經テ胸痛亡失セリ前胸部ニ異常ナク一昨日存セシ左鎖骨下部ノ水泡音ハ全ク亡失シ打音呼吸音共ニ佳良ナリ然レドモ左右兩背部ノ病變ハ依然タリ脾腫大ス正午體溫三十八度四分　內服藥各前方ヲ與フ

以上叙述スル所ノ數例ニ據リテ觀レバ間質性肺炎患者ニ對シ其特殊療法ヲ持續シテ行フ時ハ或ハ一旦下降セシ體溫ノ突如トシテ昂騰スルコアリ或ハ微熱又ハ無熱ニ經過セシモノニ發熱スルアリ或ハ熱ノ經過ノ不正ナルコトアルハ敢テ稀有ニ屬セザルモノナルヲ知ル之ヲ以テ其診療時ニ際シ脾腫ノ有無ニ留意セザル可カラザルモノナルハ略ボ之ヲ了解スルニ足ルモノナル可シ然リ而シテ其發熱ノ本態ノ何ナルヤハ素ヨリ輕々ニ之ヲ論斷シ得ベキニ非ズト雖モ其發熱ト共ニ脾臟ノ腫大ニ因ル濁音ノ現出ヲ來シ而シテ其規尼涅ヲ服用セシムレバ其熱候ノ容易ニ下降スルト共ニ脾部ノ濁音ノ消失シ又初診時ニ脾部ノ濁音ヲ徵知シ特殊療法ヲ行フト共ニ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、三

右注射ス

四月二十八日　熱候ナク脾腫亦ナシ左右肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ患者云フ昨夜安眠スルヲ得食慾進ミ咳嗽殆ドナク氣分入ニヨロシ然レドモ發汗多シト

處方

硫酸アトロピネ丸　〇、〇〇〇五

右一包トナシ二包ヲ與フ　毎夜一包頓服

佐氏煎劑　結丸　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四五

右注射ス

四月三十日　胸背部ニ全ク異常ヲ認メズ發汗亦殆ドナシ

規尼涅ヲ與フレバ發熱セザルモ若シ規尼涅ノ投與ヲ忘却スル時ハ發熱スルニ由リテ觀レバ其脾腫ヲ以テ麻拉里亞原蟲ニ因シ其發熱ヲ以テ瘧ナリト推定シテ敢テ不可ナキモノナルヲ信ズ蓋シ規尼涅ハ瘧ノ特效藥タレバナリ加之ナラズ鈴木某男ノ一例ノ如ク數々脾部ニ濁音ノ現出ヲ來シ規尼涅ノ服用ニヨリテ消失シ最後ニ高熱ヲ頻發セシモ之レ亦規尼涅ノ服用ニヨリテ直チニ解熱セシヲ以テ見レバ蓋シ間質性肺炎患者ハ其發病前若クハ其發病後ノ經過中ニ麻拉里亞病原體ノ寄生ヲ蒙ムルモ或不明ナル理由ノ爲ニ其發育ハ抑制セラレ縱令脾臟ノ腫大ヲ致スアルモ尙ホ未ダ發熱スル底ニ達セザルニ偶々連鎖狀球菌わくちんヲ皮下ニ注射セラル、ニ會スルアレバ其菌體蛋白質若クハ菌體蛋白質ノ分解產物ハ麻拉里亞病原體ノ發育ヲ催進セシムルノ作用アリテ這般ノ關係ハ斯ク本病患者ニ發熱セシムルモノト想像セザルヲ得ザルナリ

第三章　窒扶斯樣疾病

茲ニ窒扶斯樣疾病ト題スル所ノ病症ハ予ノ所謂窒扶斯的療法ヲ以テ容易ニ瘳了シ得ル所ノ急性熱性病ノ謂ニシテ敢テ其病症ノ經過ヲ觀察シ且之ヲ細菌學的ニ證明セルモノニ非ザルガ故ニ其病症ノ果シテ腸窒扶斯ナルカ將タぱらちふすナルカ又ハ他ノ疾病ナルカハ之ヲ識別シテ而シテ斯ク命名セルモノニ非ザルナリ蓋シ予ノ療病ノ方針タルヤ夫ノ長時ノ間ニ亙リテ疾病ノ經過ヲ觀察シ或ハ細菌學的診斷法ヲ行ヒ漸クニシテ其病症ノ腸窒扶斯又ハぱらちふすナルカ又ハ似テ而テ非ナル他ノ疾病ナルカヲ知得スルニ至レバ更ニ用ユベキノ藥劑

ナキノ理由ノ下ニ之ヲ自然ノ療病的作用ニ一任シテ醫ハ唯之ヲ監視スルニ止マリテ敢テ病ヲ治スルノ方策ヲ講ゼズ或ハ時ニ患者ノ死ニ歸スルコトアルモ尚ホ恬トシテ顧ミズ以テ現代醫學ヲ遂行スルモノナリト誇唱スルニ比スレバ縱令其診案ハ粗漫ニシテ其病症ヲ明確ニ知得セザルモノナリト雖モ患者ノ主タル病徵ヲ用藥的ニ亡失シ短日內ニ其健康ヲ恢復セシムレバ寧ロ其醫タルノ術ヲ盡セルモノニシテ夫ノ世人ノ科學的知識ヲ盡シテ疾病ノ本態ヲ究メント欲スルバ畢竟其疾病ノ何ナルヤヲ知リテ而シテ後ニ其治病ノ確實ナルヲ期スルニアルモノナルガ故ニ縱令科學的ニ其病症ヲ確診セザルモ病症ヲ亡散シテ之ヲ健體ニ復セシムレバ卽チ其病症ヲ知得セルモノニシテ所謂醫ノ病ニ從フニ比スレバ病ヲ治スルヲ以テ優レルモノナリト信ズルモノナレバナリ然リ而シテ其窒扶斯療法ナルモノハ最初ニ甘汞下劑ヲ與ヘ一回ノ通痢後ニ沃度丁幾及ビざろーるヲ與フルニアルナリ卽チ次ノ如シ

處方

甘汞　〇、七　乳糖　〇、五

右一包トナシ頓服

沃度丁幾　十滴　稀鹽酸　二、〇

苦味丁幾　四、〇　蓋根丁幾　一、〇

橙皮含利別　一〇、〇　メンタ水　一五、〇

水　二〇〇、〇

右一日三回食前二日分服

ザロール　四〇　乳糖　二、〇

右散六包トナス一日三回食後二日分服

從來ノ所見ニ據リテ概算スレバ慢性ニ經過スル所ノ間質性肺炎ハ全國民ノ大約七十ぱろせんと以上ヲ占ムルモノナルガ如シ此故ニ此推算ニシテ大ナル違算ナカランカ慢性間質性患者ノ腸窒扶斯若クハぱらちふすニ罹患スルモノ少ナカラザル可ク又急性間質性肺炎ト腸窒扶斯若クハぱらちふすト同時ニ發病スルモノ亦稀有ニアラザルハ蓋シ之ヲ推知スルニ難カラザル可シ加之ナラズ窒扶斯樣疾病ノ發病後一週以內ニ胸部ニ打音ノ輕濁ト呼吸音ノ減弱トヲ來スモノ多キハ予ノ常ニ實驗スル所ナリ而シテ從來一般ニ說ク所ニ據レバ所謂窒扶斯ノ標準的病徵トシテハ其熱候ハ階段狀ニ高昇シ遲脈、頭痛、盲腸部ノぐる音、盲腸部ノ壓痛及ビ脾腫等ヲ呈スルモノナルモ之ヲ其病初ニ診定スルハ頗ル困難ナルモノナリト蓋シ吾人治療醫ハ每常其發病ノ當初ヨリ之ヲ診療スルモノニ非ズシテ多クハ既ニ其病症ノ或度ニ增惡セルニ至リテ始メテ其治療ヲ托セル、モノナルヲ以テ熱ノ經過ノ不明ナルアリ且頭痛、盲腸部ノ壓痛及ビぐる音等ハ其意義多ク又脾腫ハ之ヲ其病初ニ診知スルニハ多少ノ熟練ヲ要スル等其診案ニ供スベキ病徵ノ極メテ漠然タルハ其診斷ヲシテ困難ナラシムルモノナリトス然ルニ急性間質性肺炎ハ多クハ急劇ニ高熱ヲ呈スルモノナリト雖モ時トシテハ多少階段狀ニ熱ノ上昇スルモノアリ多クハ弛張熱ヲ呈スルモノナリト雖モ時トシテハ其弛張ノ差ノ少ナクシテ恰モ稽留熱型ニ類スルアリ脈ハ多數ノ症ニ於テ速數ナルヲ常トスト雖モ稀ニ其熱度ニ比シテ脈數ノ少ナキモノアリ劇甚ナル頭痛ヲ訴フルモノアリ若シ左腸骨窩部ニ潛在性腹膜炎ノ存スル時ハ壓痛ヲ呈スルアリ此故ニ間質性肺炎ノ存在ヲ知得セザルモノハ單ニ之レノミヨリテ其窒扶斯ニ非ザルヤヲ疑フモノアリ況ヤ間質性肺炎患者ノ窒扶斯ニ感染スルカ又ハ急性間質性肺炎ト窒扶斯ト併發スルノ際ニ於テハ其熱候ハ階段狀ニ上昇セズ其脈搏ハ遲徐ナラザルモノアルニ於テヲヤ之ヲ以テ之ヲ其病初ニ認識スルノ困難ナル知ル可キナリ殊ニ急性間質性肺炎ニ窒扶

斯及ビ瘧ノ併發スルカ又ハ窒扶斯ニ急性間質性肺炎ト瘧ト併發スル症ニ於テハ其診斷ハ殆ド不可能ニシテ加療シテ後ニ漸ク之ヲ推知シ得ルニ過ギザルコトアルナリ

其一　急性間質性肺炎ニ窒扶斯樣疾病ノ併發セルヤヲ思ハシムル者

第十一病例　瀨畑某女　五十六才

約十日程以前ニ郷里ニ歸リシニ此日ハ甚シク寒キ日ナリシト小山驛ニテ乘替ノ際ニハ殊ニ寒氣ヲ感ジ爾來熱感及頭痛アリ依テ感冒ニ罹リシ者ト思惟シ二三回へぶりん散ヲ用ヒシモ解熱セザリシト云フ而シテ現時ノ主訴ハ熱感及頭痛ナリ

大正五年十月二十日　診ス盲腸部ニ壓痛アルノ外ニ異常ヲ認メズ體溫三十八度二分脈ハ遲ニシテ其性少シク不良且時々結滯ス病症不明ナルモ取敢ヘズ左方ヲ與フ

處方

鹽酸リモナーデ　二〇〇、〇　沃度丁幾　十滴
メンタ水　一〇、〇
右一日三回二日分服
ザロール　三、〇　乳糖　一、五
右散四包トナス　朝夕一包頓服

十月二十一日　請症依然タリ

處方

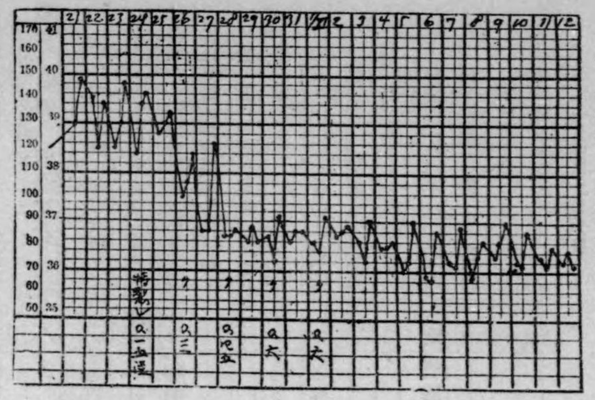
甘汞　〇、七　サントニン　〇、〇五
乳糖　〇、五
右一包トナス頓服

十月二十二日　諸症依然タリ且面面少シク浮腫狀ノ看ヲ呈ス　甘汞服後便通ナシ

處方

蓖麻子油　二五、〇
右頓服
寶芝客利斯浸（一、〇）　ストロフアンツス丁幾
二〇〇、〇　二、〇
赤酒　三〇、〇　單舍利別　一〇、〇
右一日三回二日分服
一%斯篤里規尼溶液　〇、二五
右注射ス
沃度丁幾劑　ザロール劑　各前方

十月二十四日　諸症依然タリ兩肩胛間部中央以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ（間質性肺炎）



處方

寶芝浸劑　沃度丁幾劑　各前方
ザロール　四、〇
乳糖　二、〇
右散六包トナス
一日三回二日分服
特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一五
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

十月二十六日　三日程便通ナシ體溫少シク下行シ脈性恢復ス

處方

沃度丁幾劑　ザロール劑　各前方

續間質性肺炎之特殊療法

佐氏結列阿曹篤丸　十二粒
右一日三回分服
蓖麻子油　二五、〇
右頓服
特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、三
右注射ス

十月二十八日　體溫下行ス尙ホ沃丁劑ヲ與ヘ結列阿曹篤丸前方ヲ處ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四五
右注射ス

十月三十日　患者ハ只疲勞ヲ訴フルノミ　結列阿曹篤丸ヲ與フルコト前ノ如シ

處方

佐氏煎（八、〇）　二〇〇、〇　苦味丁幾　四、〇
メンタ水　一〇、〇
右一日三回二日分服
特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス

十一月一日　肺部ニ異常ナシ　佐氏煎劑　結丸　各前方
特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

叙上ノ病歴ニヨリ見レバ本患者ハ窒扶斯様疾病ノ經過中ニ間質性

第十二病例　相澤某女　二十八才

一昨日ヨリ頭痛シ食慾缺損シ下腹部ニ疼痛アリ依テ治ヲ乞フト

大正五年十一月十四日　診ス兩肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ左鎖骨下窩ハ打音ニ異常ナキモ呼吸音粗雜ナリ下腹部ニ異常ヲ認メズ脾腫大ス皮溫高シ

診斷　間質性肺炎　癌ノ併發？

處方

甘　汞　〇、七　フェナセチン　〇、五

乳　糖　〇、五

右一包トナシ頓服

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　重炭酸曹達　四、〇

苦味丁幾　四、〇

右一日三回二日服

佐氏結列阿曹篤丸　十二粒

右一日三回二日分服

十一月十五日　通痢後ニ體溫下行セシモ頭痛依然タリ

處方

肺炎ヲ併發セルモノニアラザルカ

鹽酸キニーネ　〇、五

右一包トナシ四包ヲ與フ　朝夕一包頓服

十一月十七日　頭痛依然タリ右左ノ脚部ニしびれノ感アリト

處方

佐氏煎劑　結丸　鹽規　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一五

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

十一月十九日　頭痛脾腫依然タリ盲腸部ニ壓痛アリ患者云フ脚部ノしびれノ感ヲ增スト

處方

鹽酸リモナーデ　二〇〇、〇　沃度丁幾　十滴

メンタ水　一〇、〇

右一日三回二日分服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、三

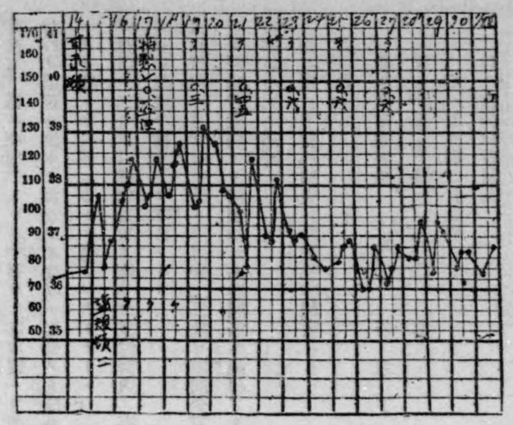
右注射ス

佐氏結列阿曹篤丸　十二粒　斯篤里規尼涅丸　〇、〇〇六

右六包トナス一日二回二日分服

佐氏煎劑　沃丁劑　佐氏煎劑　結斯丸　各前方

十一月二十一日



特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四

右注射ス

十一月二十三日

右肩胛上部輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ、脾臓ノ腫大亡失ス、盲腸部ハ尙ホ壓痛アリ、盜汗多シ沃丁劑　佐氏煎劑　結斯丸

右一包トナシ二包ヲ與フ　臨臥時一包頓服

特製造鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

十一月二十五日　右肩胛上部ノ濁性依然タリ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

十一月二十六日　盲腸部ノ壓痛ナク盜汗ナク患者爽快ヲ感ズルモ下腿ノ內側ニ尙ホしびれアリ

處方

佐氏煎劑　結斯丸　各前方

特製連鎖狀球菌「ワクチン」ヲ注射スルコト次ノ如シ

十一月二十七日〇、六cc　二十九日〇、六cc　十二月一日〇、六cc

十二月一日　右肩胛上部ハ尙ホ少シク輕濁ニシテ呼吸音弱シ

本患者ノ熱候ニ對シ規尼涅ノ無效ナリシニ據リテ見レバ脾腫ノ麻拉里亞ニ因由スルモノニ非ズシテ沃度劑ニ由リテ解熱シ且脾腫ノ縮小セルモノタルヤ知ルベシ

各前方ヲ與フ

處方

アトロピン丸　〇、〇〇〇五

其二　急性間質性肺炎ニ窒扶斯樣疾病及ビ癌ノ併發セルヲ思ハシムルモノ

第十三病例　西村某女　十四才

昨夜右下腿ニ疼痛アリシニ今朝ヨリ左大腿ニモ亦疼痛ヲ來シ爲ニ歩行ノ困難ヲ致セリ而シテ其疼痛ハ起坐スル際ニ甚シク按壓スレバ只上腿ノ中央部ニ少シク痛アルノミナリト

本患者ハ去ル九月健康診査ノ際ニ間質性肺炎ノ存在セシニヨリびるけい反應ヲ檢セシニ陰性ナリキ

大正五年十月十日　診ス左肩胛上部及ビ右胸全背部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ兩側殊ニ右腓腸筋ニ握痛アリ膝蓋腱反射ハ左右共ニ少シク亢進ス

診斷　間質性肺炎　多發性神經炎

處方

撒里矢爾酸曹達　三、〇　苦味丁幾　四、〇
重炭酸曹達　二、〇　水　二〇〇、〇
右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　十二粒
右一日三回二日分服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一五
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

一%硝酸斯篤里規尼涅液　〇、二
右臀筋内ニ注射ス

十月十二日　脚部ノ疼痛亡散ス、昨日ヨリ高熱ヲ發スヲ診スルニ肺ノ變常ハ右肩胛間部上三分一以上ノミニ存シ左背部ニハ毫モ異常ヲ認メズ脾部ニ濁音現出ス

處方

鹽酸キニーネ　〇、五
右一包トナシ四包ヲ與フ　朝夕一包頓服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、三
右注射ス

撒曹劑　結丸　各前方

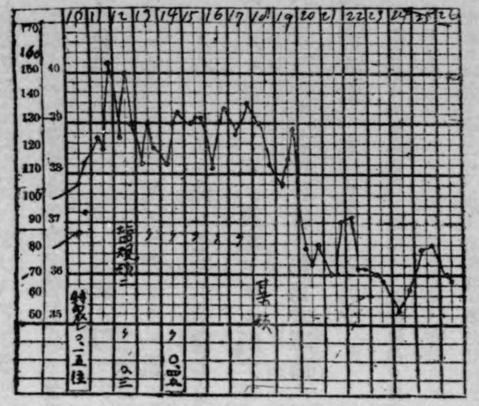
十月十四日　右肩胛上部ノ濁性減シ一二ノ無響水泡音アリ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四五
右注射ス

撒曹劑　結丸　鹽規　各前方

十月十六日　右胸背部ニ異常ナシ然レドモ熱候依然ヨリ

撒曹劑　結丸　鹽規　各前方ヲ與ノ



十月十八日　兩胸背部ニ異常ナク熱候脾腫依然タリ盲腸部ヲ診スルニ打音ニ異常ナク壓痛アリ

處方

甘汞　〇、五
フエナセチン　〇、四
サントニーネ　〇、〇四
乳糖　適宜
右一包トナシ頓服

鹽酸リモナーデ　二〇〇、〇　沃度丁幾　十滴
メノヘ水　一〇、〇
右一日三回二日分服

佐氏結丸　前方

十月二十二日　諸症亡失シ只疲勞アリ

處方

鹽酸リモナーデ　二〇〇、〇
右一日三回二日分服

佐氏結丸　前方

十月二十七日　全治就業ス

本患者ノ發病後二日ニ急劇ニ體溫昇騰シ而シテ規尼涅ニヨリテ一程度ニ下行セシハ蓋シ麻拉里亞ノ併發セルモノト爲スヲ得ベシ

第四章　葡萄狀球菌

從來結核性肺痨ノ混合傳染ニ對シテ葡萄狀球菌ハ餘リ世人ニ注意セラレザルモノニシテ甚シキニ至リテハ全ク關係ヲ有セザルモノト說クモノアルナリ然ルニ間質性肺炎ハ全ク其趣ヲ異ニシ有熱症タルト否ラザルトヲ

問ハズ葡萄狀球菌ノ混合傳染ノ爲ニ其病症ヲ增惡ナラシメ其治癒ヲ困難ナラシムルコト極メテ多シ卽チ葡萄狀球菌ノ混合傳染ハ

有熱性間質性肺炎ノ發熱ノ因ヲナシ其熱度ヲ下行セシメズ甚シキハ夫ノ大弛張熱ノ因ヲナスコトアリ又濁性ヲ減退セシメザルコトアリ

無熱性間質性肺炎ニ於テモ亦其濁音ノ發生ニ至大ノ關係ヲ有スルコトアリ

然ル如キハ連鎖狀菌性間質性肺炎ニ葡萄狀菌性炎症ノ混在スルガ爲ニ連鎖狀球菌わくちんノ作用ニ拮抗シテ或ハ發熱ノ因ヲナシ或ハ浸潤ノ原ヲナシ而シテ其治效ヲ妨害スルモノナルヲ思ハザルヲ得ズ之ヲ以テ間質性肺炎ニ特殊療法ヲ施スニ當リテハ常ニ全身及ビ局所ノ症狀ニ注意シ其熱度ノ下降セザルカ又ハ濁音ノ消失セザルノ時ニハ常ニ先ヅ葡萄狀球菌わくちんノ併用ヲ試ミザル可カラズ然レドモ單純ナル葡萄狀菌性肺炎ノ存在スルヤ否ヤハ未ダ實驗セザル所ナリ

其一。急性間質性肺炎ニ葡萄狀球菌ノ混合傳染セルヲ思ハシムルモノ

第十四病例　大澤某女　十九才

三四日前ヨリ惡寒發熱シ頭痛アリ食慾缺損シ胃部ニ疼痛アリ嘔吐アリシト

大正六年三月十二日　診ス右前胸ハ第三肋間以上、右背全部及ビ左肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ右肩胛下部ニ濕水アリ他ニ異常ヲ認メズ

診斷　間性性肺炎

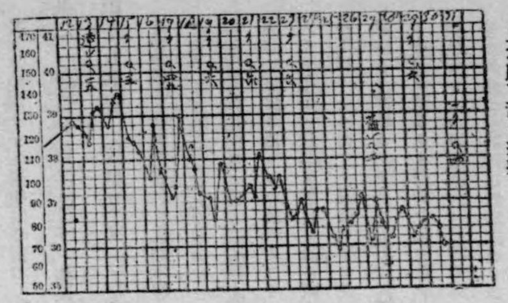
處方

甘汞　〇、七　フェナセチン　〇、五

乳糖　〇、五

右一包トナス頓服

三月十三日　昨夕投與セシ甘汞劑ハ無效ナリキ依然トシテ頭痛シ且右胸下部ニ疼痛アリト



處方

佐氏煎（八、〇）　二〇〇、〇

苦味丁幾　四、〇

右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　十二粒

右一日三回食後二日分服

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

十三日　〇、一cc　十五日　〇、三cc　十七日〇、四五cc　十九日　〇、六cc　二十一日　〇、六cc　二十三日〇、六cc

三月二十七日　右肩胛上部ハ輕濁ニシテ呼吸音粗雜ナリ一二ノ無響水泡音アリ右肩胛下部ニ僅ホ濕水アリ而シテ本患者ノ高熱ハ幸ニ低降セシモ其解熱狀態ノ甚ダ不正ニシテ且右肩胛上部ノ病變ノ頑强ナルカ故ニ葡萄狀球菌わくちんノ注射ヲ試ム

處方

佐氏煎劑　佐氏結丸　各前方

葡萄狀球菌ワクチン　〇、二

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

三月二十九日　今朝五時頃熱感アリテ次デ發汗セリト體溫順潮ナリ　內服藥前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

三月三十一日　右肩胛上部ノ病變依然タリ此日病室ヲ退ク　內服藥前方ヲ與フ

葡萄狀球菌ワクチン　〇四

右注射ス

四月一日　右肩胛上部ハ打音ニ異常ナキモ呼吸音粗雜ナリ　內服藥前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇六

右注射ス

四月六日　兩肩胛上部輕濁ニシテ呼吸音弱シ兩肺ノ下界ハ肩胛下隅下二橫指ニアリ蓋シ濕水ノ存スルモノナルベシ故アリテ治療ヲ休止ス

本病患者ノ治驗ヲ茲ニ記スルハ甚ダ不確實ノ看アリト雖モ其連鎖狀球菌わくちんノ右肩胛上部ノ病變ニ對スル治效ノ他ノ同一ナル病症ニ比シテ頑強ナルト熱候ノ下行スルニ係ハラズ其解熱狀態ノ甚ダ不規則ナルト葡萄狀球菌わくちん一同ノ注射ニヨリテ體溫ノ低候ヲ呈シ二回ノ注射ニヨリテ右肩胛上部ノ濁性ノ亡失セルトハ葡萄狀球菌ノ混合傳染セルヲ想像スルコトヲ得ルニ足ルモノナルベシ

其二　急性間質性肺炎ニ葡萄狀球菌及ビ瘧ノ混合傳染セルヲ思ハシムルモノ

第十五病例　辰見某女　二十一才

今朝惡寒ニ次デ熱發アリ食慾不進ニシテ發汗シ易シ依テ診ヲ乞フト云フ

本年九月健康診査ノ際ニ右肩胛上部ニ間質性肺炎アリシヲ以テ びるけい反應ヲ檢セシニ陽性ナリキ

大正五年十一月二十六日　診ス兩胸全背部ハ濁音ヲ呈シ且其濁音ハ下行スルニ從フテ濁性ヲ增シ殊ニ肩胛下部ニ於テハ重濁ナリ聽診スルニ呼吸音ハ肩胛上部肩胛間部ニ於テ微弱ヲ呈シ且肩胛上部ニ呼息ノ延長アリ肩胛下部ニ於テハ殆ド呼吸音ヲ聽取セズ然ルニ側臥セシムレバ兩胸共ニ肩胛間部中央以下ハ打音ニ異常ナク呼吸音亦異常ナシ其滲出性肋膜炎ニ非ザルヲ知ルベシ

診斷　間質性肺炎　兩肋膜下腔ノ滯水

處方

佐氏煎（八〇）二〇〇〇　苦味丁幾　四〇

メンタ水　一〇〇

右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　十二粒

右一日三回二日分服

十一月二十七日　諸症依然タリ傍人云フ夜間譫語アリト

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一五

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

十一月二十九日　諸症依然タリ昨日來腹痛アリト依テ診スルニ左腸骨窩部ハ輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ（腹膜炎）脾部ニ濁音ヲ生ズ（麻拉里亞併發？）昨夜尙ホ譫語アリシト

處方

鹽酸キニーネ　〇、五

右一包トナシ四包ヲ與フ　朝夕一包頓服

佐氏塗布劑

右下腹部ニ塗布ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、三

右注射ス

佐氏煎劑　結丸　各前方

十二月一日　去ル二十九日一旦下降セシ體溫ハ翌三十日午後再ビ上昇シ此日尙ホ微熱アリ　佐氏煎劑　結丸　鹽規　塗腹劑　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四五

右注射ス

十二月三日　腹痛依然タリ患者云フ手足しびれ且痛ミアリト之ヲ診スルニ前膊筋掻指球筋腓腸筋ニ提痛〜リ膝蓋腱反射亢進ス（多發性神經炎）

處方

佐氏煎劑　結丸　鹽規　塗腹劑　各前ノ如シ

一％硝酸斯篤里規尼涅液　〇、三

右臀筋內ニ注射ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

十二月五日　發熱腹痛依然タリ右肩胛上部ハ輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ左胸背上部ニ異常ヲ認メズ然レドモ兩肩胛下部ニ滯水アリ脾ノ濁音亡失シ手足ノ異常ヲ訴ヘメ

處方

サントニン　〇、〇五　乳糖　〇、五

右頓服

結丸　四號膠囊六個

右一日三回二日分服

佐氏煎劑　鹽規　塗腹劑　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

葡萄狀球菌ワクチン　〇、一

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

十二月七日　一昨夜昨夜共ニ多量ノ盜汗アリシト

處方

硫酸アトロピネ丸　〇、〇〇〇五

右一包トナシ二包ヲ與フ　毎夜臨臥時一包頓服

佐氏煎劑　結劑　塗腹劑　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

葡萄狀球菌ワクチン　〇、四

右注射ス

十二月九日　熱候少シク下行ス　佐氏煎劑　結劑　アトロ丸　塗腹劑　各前ノ如シ

葡萄狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

十二月十四日　九日以降事故アリテ往診セズ爲ニわくちんノ注射ヲ休止セシニ俄然トシテ大弛張熱ヲ呈セリ依テ診スルニ左右肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ兩肩胛下部ニ濕水アリ左腸骨窩部ニ尙ホ腹膜炎潛在ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

十二月十五日　患者ハ比較的元氣ナリ

處方

佐氏煎劑（八、〇）二〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　四、〇
沃度加里　一、〇　苦味丁幾　四、〇
メンタ水　一〇、〇

右一日三回　日分服

結劑　アトロピネ丸　塗腹劑　各前方

十二月十六日

葡萄狀球菌ワクチン　〇、八

右注射ス

十二月十八日　內服藥塗腹藥各前方

葡萄狀球菌ワクチン　〇、九

右注射ス

十二月二十日　左肩胛上部ニハ異常ナキモ右肩胛上部ハ尙ホ輕濁ニシテ呼吸音弱シ兩肩胛下部ニ濕水アリ右腹膜炎依然タリ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

十二月二十一日　熱候全ク亡散ス依テ左方ヲ與フ

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　苦味丁幾　四、〇
メンタ水　一〇、〇

右一日三回二日分服

結劑　四號膠囊六個

右一日三回二日分服

十二月二十三日　內服藥　塗腹劑　各前方

葡萄狀球菌ワクチン　一、〇

右注射ス

十二月二十五日　胸腹部ニ異常ヲ認メズ

本患者ニ於テ其病初ノ熱候ハ二十九日ニ下降セシヲ以テ見レバ之ヲ連鎖狀球菌ニ因スル者ト斷定スルヲ得ベク次デ脾腫ヲ來シ規尼涅ノ服用ニヨリテ消失セシハ其脾腫ノ癌ノ爲ナリシヲ想像シ得ルモ規尼涅ノ作用ノ熱候ニ及ボサヾリシニ據リテヲ見レバ蓋シ其發熱ハ脾腫ニ關係ヲ有スル者ニ非ズ而シテ規尼涅ノ服用ニヨリテ廓拉里亞發作ヲ免カレシメシモノナルヲ想像スルニ足ルモノナルベシ然リ而シテ十一月三十日以降ノ熱候ノ連鎖狀球菌わくちんニ由リテ下降セズ葡萄狀球菌わくちんヲ兼用スルニ至リテ漸ク熱候低減シ縱令一時ハ大弛張熱ヲ發セシト雖モ終ニ葡萄狀球菌わくちんニヨリテ解熱セシニ據リテ見レバ其發熱ヲシテ之ヲ葡萄狀球菌ニ歸セシメザルヲ得ズ然レドモ其大弛張熱ノ連鎖狀球わくちんノ注射ニヨリテ頓ニ下行セシヲ見レバ發熱ハ單ニ葡萄狀球菌ニ由リテノミ起リシモノニ非ズシテ連鎖狀球菌モ亦其發熱原タリシヲ知ルニ足ルベシ而シテ本患者ノ治療ニ對シ殊ニ遺憾ナリシハ十二月九日ニ尙ホ一回連鎖狀球菌わくちんヲ併用セバ這般ノ大弛張熱ハ之ヲ發起セシメズシテ解熱セシメ得タリシモノニ非ザルヤヲ思ハシムルニアルナリ

上膊ニ二十回注射ヲ行ヒ次デ本年二月下旬ニ北里養生園ノ診療ヲ受ケ爾來十回注射ヲ行ヒシモ漸次身體ノ衰弱ヲ增シ遠路養生園ニ通フコト能ハザルニ至リシガ故ニ五月三日ヨリ野阪和亮ノ治療ヲ受ケ以テ今日ニ至リシト云フ

第十六病例　深川某女　四十才

六年前ニ亭主肺病ニテ死去セリ其頃ヨリ少シノ咳嗽アリシモ喫烟ノ爲ナルベシト思ヒ留意セザリシモ時々服藥ハナシタリキ然ルニ昨年八月ニ至リ甚シク疲勞ヲ覺エシヲ以テ漸ク熱心ニ加療スルノ念ヲ生ジ醫藥ニ親ムニ至レリ十一月頃ヨリ本所ノ某醫ノ治ヲ受ケ

目下主ナル病苦ハ咳嗽殊ニ仰臥及ビ夜間ニ頻發スル咳嗽、腹痛、下痢、發熱、盜汗等ニシテ食慾ハ存スルモ食後ニ胃部ニ停滯セルノ感アルガ爲ニ食量ヲ減ズルノ傾キアリ但シ昨日ヨリ便通ナシ渴甚シ

五月中旬一回少量ノ血痰アリテ五日程ニシテ止血セリ今朝亦血痰アリテ午後ニ至ルモ尙ホ桃紅色ノ喀痰アリト

大正五年六月十七日　診ス右前胸第四肋間以下輕濁ニシテ呼吸音弱シ兩肩胛間部中央以上亦輕濁ニシテ呼吸音弱シ、心窩部ヲ按壓スルニ抵抗アリ疼痛アリ依テ肝臟ノ腫大ヲ想像スルモ咳嗽ノ爲ニ精査スルコトヲ得ズ左腸骨窩部ハ輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ臍ノ左側ヲ按壓スルニ亦疼痛アリ患者ハ甚シク疲憊ス

診斷　間質性肺炎　喘息　腹膜炎　肝臟腫大

處方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一五
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

千倍アドレナリン　〇、五
右ト膊ノ皮下ニ注射ス

佐氏煎（四、〇）一〇〇、〇　臭劑　一、五
ストロフアンツス丁幾　一、〇　杏仁水　四、〇

單舍利別　七、〇
右一日三回分服

炭酸ゲアヤコール　〇、五　ドーフル氏散　〇、五
乳糖　一、〇
右散三包トナス一日三回食後分服

鹽酸リモナーデ　二〇〇、〇　赤酒　二五、〇
右飲料　口渴時服用セシム

佐氏塗布劑
右朝夕下腹部ニ塗ラシム

六月十八日　昨夜咳嗽減ジ且右側臥ナスコトヲ得タリ從來常ニ左側臥ノミナナセシニ一年餘以來始メテ仰臥セリト今朝尙ホ咳嗽少ナシ腹痛ナシ便通ナシ

處方

炭酸ゲアヤコール　〇、五　乳糖　一、〇
右分三包一日三回分服

佐氏煎劑　塗腹劑　各前方

六月十九日　昨夜來咳嗽多シ然シ今朝ハ右側ニ臥スルコトヲ得タリト盜汗多シ
右第三肋間以上及ビ右肩胛上部ニ小水泡音アリ脈力弱シ

處方

炭酸ゲアヤコール　〇、五　鹽酸モルヒネ　〇、〇一
乳糖　一、〇
右三包トナス一日三回分服

佐氏煎劑　塗腹劑　各前方

硫酸アトロピネ丸　〇、〇〇〇五
右一包トナシ臨臥時頓服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、三
右注射ス

一%硝酸斯篤里規尼涅液　〇、二五
右注射ス

六月二十日　昨夜咳嗽少ナクシテ仰臥セルモ尙ホ咳嗽ナカリシ腹痛ナシ然レドモ下痢ス

處方

炭酸ゲアヤコール　〇、五　ドーフル氏散　〇、五
メンタ油糖　一、〇
右三包トナシ一日分服

佐氏煎劑アトロ丸　塗腹劑　斯篤里規尼涅注射　各前ノ如シ

六月二十一日　肺ノ病變部ハ只兩肩胛上部ニ存スルノミ然レドモ熱候依然タリ

處方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四五
葡萄狀球菌ワクチン　〇、二
右注射ス

佐氏煎（五、〇）一〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　一、五
ピラミドシ　〇、三　臭素加里　一、五
ストロフアンツル丁幾　一、〇　杏仁水　四、〇
メンタ水　五、〇
右一日三回分服

散劑アトロ丸　塗腹劑　各前方

午後寒氣アリ昨日來シク〳〵腹痛スト

處方

サントニーネ　〇、〇五　乳糖　〇、五
右一包トナシ頓服

六月二十三日　朝食後ニ吐アリ吐後ニ尙ホ嘔氣アリ水藥服後ニ嘔氣ヲ催ス傾キアリト右肩胛上部ニ濁音ナシ右肩胛上部ノ濁性減ズ呼吸音ハ兩側共ニ弱シ

處方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

葡萄狀球菌ワクチン
右注射ス　　〇、四

メンタ油糖
右三包トチシ一日分服

佐氏煎（五、〇）　一〇〇、〇
ピラミドン　〇、三
ストロフアンツス丁幾　一、〇
杏仁水　四、〇
單舍利別　五、〇
右一日三回分服

炭酸ゲアヤコール　〇、五
阿片末　〇、一
一、〇

アトロヒネ丸　塗腹劑　各前方

六月二十四日　嘔氣尚ホ止マズ兩肩胛上部ニ濁性ナシ

處方

セルテル水　二〇〇、〇　阿片丁幾　一、〇
右催嘔時數回ニ服用

佐煎（四、〇）　一〇〇、〇　重炭酸曹達　二、〇
杏仁水　四、〇　生薑丁幾　一、〇
苦味丁幾　二、〇　單舍利別　五、〇
右一日三回分服

炭酸ゲアヤコール　〇、五　ゲンチアナ末　〇、二
重炭酸曹達　二、〇　牛胆　〇、二
ピラミドン　〇、三
右三包トナシ一日分服

アトロヒネ丸　塗腹劑　各前方

六月二十五日　今日ハ嘔氣ナシ兩胸背部ハ打音ニ異常ナキモ呼吸音ハ弱シ

處方

葡萄狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス

佐氏煎劑　散劑　アトロ丸　塗腹劑　各前方

六月二十六日　昨日ハ殆ド咳嗽ナカリシモ少許ノ咯痰アリ肺部ハ甚ダ佳良ナルニ係ハラズ熱候尚ホ持續ス　各前方

六月二十七日　少シク咳嗽アリ兩肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音少シク粗ナリ臍ノ左側ニ尚ホ壓痛アリ　二十二日以降泥狀軟便一日一行ナリ　脈力弱シ盜汗ナシ

處方

佐氏煎（四、〇）　一〇〇、〇　重炭酸曹達　二、〇
撒里矢爾酸曹達　一、五　ストロフアンツス丁幾　一、〇
杏仁水　四、〇　生薑丁幾　二、〇
單舍利別　五、〇
右一日三回分服

散藥　塗腹劑　各前方
特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス

六月二十九日　熱候依然タリ　內服藥　塗腹劑　各前方
葡萄狀球菌ワクチン　〇、八
右注射ス

月一日　昨日咯血シ昨夕高熱ヲ發セリ而シテ右第三四肋間部ニ痛アリトヲ診スルニ兩肩胛上部ハ輕濁ニシテ呼吸音弱ク小水

泡音アリ左右肩胛間部ハ打音ニ異常ナクシテ小水泡音アリ右前胸モ亦打音ニ異常ナクシテ小水泡音アリ脾部ニ濁音ナズ　時々咯痰ニ血液ヲ混ズ

處方

佐氏煎（四、〇）　一〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　一、五
ピラミドン　〇、三　鹽酸モルヒネ　〇、〇一
生薑丁幾　二、〇　杏仁水　四、〇
ストロフアンツス丁幾　一、〇
右一日三回分服

結劑　三號膠囊三個
右一日三回分服
千倍アドレナリン　〇、五
右注射ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス

七月二日　右胸ノ疼痛ナシ胸部ノ水泡音ナシ兩肩胛上部ノ濁性少シク減ズ然レドモ時々咯痰ニ血液ヲ混ズ　前日來大勢張熱ヲ發シ脾腫アリ依テ左方ヲ與フ　佐氏煎劑　結劑　塗腹劑　各前方

處方

鹽酸キニーネ　〇、五

右一包トナシ二包ヲ與フ　朝夕一包頓服

七月三日　腹痛大ニ減ズ從來泥狀軟便一日一行ナリシニ此日一回多量ノ下痢便アリタリト　佐氏煎劑　結劑　鹽規　塗腹劑　各前方

七月四日　昨日來少シク嘔氣アリ昨夜來咳嗽減ズ　此日泥狀便一行

處方

佐氏煎（四、〇）　〇〇、〇　重炭酸曹達　二、〇
杏仁水　四、〇　蓋根丁幾　二、〇
苦味丁幾　二、〇

右一日三回分服

結劑　鹽規　塗腹劑　各前方

セルテル水　二〇〇、〇

右催嘔時ニ數回ニ服用

七月五日　嘔氣ナシ此日泥狀軟便二行　佐氏煎劑　結劑　鹽規　塗腹劑　各前方

葡萄狀球菌ワクチン　一、〇

右注射ス

七月六日　昨夕亦少シク發熱シ昨夜少シク咳嗽アリ食慾少シク減ズ　此日便通ナシ

處方

佐氏煎（五、〇）　一〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　一、五
ピラミドン　〇、三　重炭酸曹達　二、〇
鹽酸モルヒネ　〇、〇一　杏仁水　四、〇
苦味丁幾　二、〇　生姜丁幾　二、〇
メンタ水　五、〇

右一日三回分服

結劑　鹽規　塗腹劑　各前方

寢方規那酒　一五、〇　水　一五、〇

右一日三回食前ニ服用

七月七日　今朝ハ食慾振フ此日小量ノ硬便一行　佐氏煎劑　結劑　鹽規　規那酒　塗腹劑　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

七月八日　右前胸第四肋間以上輕濁ニシテ小水泡音アリ右肩胛上部ハ打音濁ニシテ呼吸音弱シ此日軟便一回　佐氏煎劑　結劑　鹽規　規那酒　塗腹劑　各前方

七月九日　事故アリ退院ス

本患者ノ入院當時ノ熱候一旦下行シ殆ド常溫ニ復シ其後再發セシ熱候ノ頑固ナリシハ或ハ廓拉里亞ノ潛在セシ爲ナリシヤモ知ルベカラズ而シテ體力稍恢復シ諸症殆ド亡失シ熱候亦下行セシニ係ハラズ事故ノ爲ニ退院シ本療法ヲ續行スルコト能ハザリシハ遺憾ナリシ

其三　微熱若クハ無熱ヲ以テ經過スル間質性肺炎ニ葡萄狀球菌ノ混合傳染セルヲ思ハシムルモノ

第十七病例　池田某男　二十四才

本病例ノ前半ハ既ニ間質性肺炎之特殊療法及其原因ナル舊著中ニアリ

昨年七月初メテ喀血シ本年八月再ビ喀血セリ親籍某醫ノ勸メニ由リ九月中旬上京シ北里氏養生園ニ入院セリ而シテ同所ニテ施行セシぴろけい反應ハ只最弱液ニ少シク赤色ヲ呈セシノミナリキ爾後つべるくりん注射療法ヲ行フコト十回次デ十月八日古賀氏液ノ注射ヲ受ケタリシニ從來發熱セシコトナカリシニ此日體溫三十七度四分アリタリ而シテ注射後ニ三十七度一分ニ昇リシハ最高度ナリシ又注射後ヨリ咳嗽ヲ發セリ十月二十二日古賀氏液第二回ノ注射ヲ受ケ在園スルノ要ナシトノ話ニヨリ予ガ許ニ來レリ

大正四年十月三十日　診ス左肩胛間部中央以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱ク右胸背部ハ肩胛下隅以上輕濁ニシテ肩胛上部ハ濁音ヲ呈シ呼吸音ハ其變濁部ニ於テ弱キモ殊ニ右肩胛上部ニ於テ著シ右肩胛下部ハ純濁ニシテ呼吸音ナシ然レドモ移動性ニ富ミ側臥セシムレバ濁音亡失シ呼吸音健常ナリ之レ卽チ滲出性肋膜炎ニ非ズシテ肋膜腔內ノ滿水タル知ルベキナリ左前胸ニ異常ナク右胸前部ハ打音異常ナキモ呼吸音ハ一般ニ弱シ

診斷　間質性肺炎

十一月三日　咳嗽ハ依然トシテ多シ右前胸ハ第三肋間以上右背ハ全部又左前胸ハ鎖骨下窩以上左背ハ肩胛間部中央以上ハ共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ右肋膜下腔ニ滿水アリ右乳房ノ外下方ニ摩擦音アリ同部ニ疼痛ヲ自覺スト此日養生園ニ行キ第三回古賀氏液ノ注射ヲ受ケ越エテ七日歸來ス

十一月十四日　此日養生園ニ行キ第四回古賀氏液ノ注射ヲ受ケ越エテ二十五日歸來ス

十一月二十五日　右胸ハ全背部左背ハ肩胛下隅以上輕濁ニシテ呼吸音弱ク右肩胛上部ニ無響水泡音アリ左肩胛下部ハ打音異常ナキモ呼吸音弱シ右前胸下部ニ幽微ナル摩擦音アリ

患者云フ親籍某醫ノ其治效ノ如何ニ拘ハラズ四回古賀氏液ノ注射ヲ受クヘシトノ勸告ニ從ヒ既ニ之ヲ終了セリ然ルニ東京ノ氣候ハ

漸次寒氣ノ酷烈ヲ加フルノ時季ニ際會セルヲ以テ比較的氣候ノ溫暖ナル鄉里ニ歸リ冬期ヲ經過シ來春再ビ上京加療スベシト予曰ク

十二月中東都ノ氣候ハ尙ホ左程ニ寒氣ノ甚シカラザルガ故ニ汝ノ健康ヲ害スルコトナシ且療病ノ爲ニ折角上京シ其加療ノ結果多少タリトモ病症ノ輕快セルアレバ上京セシ甲斐アリト雖モ汝ノ現時ノ病狀ハ來京時ニ比シ却テ增惡シ毫モ加療セシ效果ノ存スルナシ故ニ尙ホ一ケ月間在京シ病症ヲ輕快若クハ治癒セシメテ而シテ後ニ歸國スルモ敢テ遲キニ非ザルベシト彼之ニ從フテ予ニ其治療ヲ託ス

十二月二日　治療ヲ施行ス蓋シ古賀氏液ノ體內ニ存在スル期間ハ不明ナルモ彼等ハ每二週日ニ一回其注射ヲ行フニヨリ最終ノ注射ヨリ二週日ヲ經過スレバ他ノ治法ヲ加フルモ支障ナキモノナル可シト思惟セシニヨルナリ

此日診スルニ兩肩胛間部中央以上ノ濁音ヲ呈シ呼吸音ハ微弱ナリ兩肩胛部中央以下ハ抵抗強クシテ呼吸音亦弱シ兩鎖骨下窩輕濁ニシテ前胸ハ一般ニ呼吸音弱シ

處方

佐氏煎（四、〇）一〇〇、〇　苦味丁幾　二、〇

單舍利別　五、〇

右一日三回分服

結劑　四號膠囊三個

右一日三回食後分服

大阪血清藥院製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

二日〇、二五cc　四日〇、五cc　六日〇、七五cc　八日一、〇cc

十二月十一日　內服藥ハ各前方ヲ與フ

石神傳染病研究所製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

十一日〇、五cc　十五日〇、七五cc　十八日〇、八cc　二十一日〇、八cc　廿三日〇、九cc　二十四日一〇cc　廿六日一、〇cc

十二月十三日　佐氏煎劑ハ前方ヲ與ヘ結劑ヲ增量ス

處方

結劑　三號膠囊三個

右一日三回分服

十二月十日　佐氏煎劑ハ前方ヲ與ヘ結劑ヲ增量ス

處方

結劑　二號膠囊三個

右一日三回分服

十二月二十六日　胸部ノ變狀全ク亡散スルニヨリ歸國ヲ許シ明春再來シテ更ニ加療スベキヲ告ゲ蓋シ胸部ノ病狀ハ現時ニ於テ全ク之ヲ診知シ能ハザルニ治癒セリト雖モ一度發炎シ既ニ抵抗力ノ減損セル患部ハ再ビ發炎シ易キノ傾向大ナルヲ以テ更ニ加療シテ一ハ以テ潛在セル炎機ヲ攻治シ一ハ以テ其低減セル抵抗力ヲ增進セシメザル可カラザルモノナレバナリ

大正五年四月十八日　約ニヨリテ再ビ上京セリ患者云フ歸鄉後ハ全ク健康ヲ自覺セシニ三月下旬全家族流行性感冒ニ罹リ其際ニ體溫ハ三十七度八分以上ニハ昇ルコトナカリシモ長ク平溫ニ復セザリシト

診スルニ背部ニ少數ノあくれアリ而シテ右肩胛間部下三分一以上及ビ左肩胛間部中央以上ハ共ニ打音輕濁ニシテ其濁音ハ上行スルニ從ツテ濁性ヲ增シ而シテ變濁部ハ呼吸音微弱ナリ加之ナラズ右胸ハ打音ニ異常ヲ呈セザルモ前胸部背部共ニ呼吸音減弱セリ

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　苦味丁幾　四、〇

右一日三回三日分服

結劑　四號膠囊六個

右一日三回二日分服

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

十八日〇、一cc　二十一日〇、二cc　二十三日〇、三cc

二十五日〇、四cc　二十七日〇、五cc　二十九日〇、五cc

五月一日〇、六cc　五日〇、六cc　八日〇、七cc　十日〇、七cc　十二日〇、七cc　十五日〇、七cc　十九日〇、七cc

四月二十七日　胸部ニ異常ヲ認メズ　內服藥ハ各前方ヲ與フ

五月一日　昨夜來惡冒セルガ如シト診スルニ兩肩胛上部輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ

處方

結劑　三號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

佐氏煎劑　前方

五月三日　一昨日夕ト昨日朝トニ咳嗽アリタリ　內服藥各前方

五月十五日　胸部ニ異常ナシ佐氏煎劑ハ前方ヲ與ヘ結劑ヲ增量ス

處方

結劑　二號膠囊六個

右一日三回二日分服

五月二十一日　昨日來少シク惡冒ノ氣味ナリシガ本日來院ノ途中ニ於テ輕咳ト共ニ血痰ヲ咯出セリ但シ血量ハ甚ダ少ナカシ昨夜寒氣セリ　依テ入院スト

之ヲ診スルニ左右肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ右前胸第三肋間以下ハ打音ニ異常アキモ呼吸音弱シ　慢質性肺炎ノ出

沒常ナシ依テ葡萄狀球菌ワクチンノ注射ヲ併用ス

處方

佐氏膏(七、五)　一〇〇、〇
苦味丁幾　二、〇
杏仁水　四、〇
メンタ水　五、〇
右一日三回分服

結劑　二號膠囊三個
右一日三回分服

葡萄狀球菌ワクチン　〇、二
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

五月二十二日　兩肩胛上部ニ異常ナシ右前胸下部ハ打音ニ異常ナキモ呼吸音少シク微弱ナリ　內服藥各前方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
葡萄狀球菌ワクチン　〇、四〇

右注射ス

五月二十五日　內服藥ハ各前方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
葡萄狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス

五月一十六日　昨日午後凝リタル咯血アリ午後咯痰中ニ點狀ニ血液ヲ混ジ今朝尙ホ止マズト　內服藥ハ各前方ヲ與フ

五月二十七日　血痰ナシ　內服藥ハ各前方ヲ與フ

葡萄狀球菌ワクチン　〇、八
右注射ス

五月二十九日　內服藥ハ各前方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、七
右注射ス

五月三十日　今朝一回血痰アリト之ヲ診スルニ胸部ニ異常ヲ認メズ　內服藥前方

五月三十一日　內服藥前方

葡萄狀球菌ワクチン　一、〇
右注射ス

六月一日　佐氏煎劑ハ前方ヲ與ヘ結劑ヲ增量ス

處方

結劑　一號膠囊三個
右一日三回分服

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

二日〇、七cc　五日〇、七cc　七日〇、八cc

六月九日　胸部ニ殆ド異常ヲ認メズ　內服藥前方

葡萄狀球菌ワクチン　一、〇
右注射ス

六月十一日　內服藥　各前方
特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、八

第十八病例　生田目某女　四十三才　(第一病例再出)

本年九月健康診査ノ際ニ間質性肺炎ノ存在スルヲ以テびるけい反應ヲ試ミシニ陽性ノ反應ヲ呈セリ

四五日前ヨリ不快ナリシガ勉メテ就業セリ然ルニ昨日來發熱頭痛アリ依テ診ヲ乞フト

大正五年十二月九日　診ス兩胸全背部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ他ニ異常ヲ認メズ

診斷　間質性肺炎

處方

甘汞　〇、七
乳糖　〇、五
フェナセチン　〇、五

續間質性肺炎之特殊療法

右注射ス

此日退院スルモ尙ホ引續キ佐氏煎劑結劑ヲ與ヘ且わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

特製連鎖狀球菌ワクチン　十三日〇、八cc　十七日一、〇cc
二十四日一、〇cc　七月六日一、〇cc

葡萄狀球菌ワクチン　十五日一、〇cc　十九日一、〇cc　二十二日一、〇cc　二十九日一、〇cc

退院後七月七日マデ加療シ他覺的及自覺的ニ異常ナキヲ以テ歸國セリ

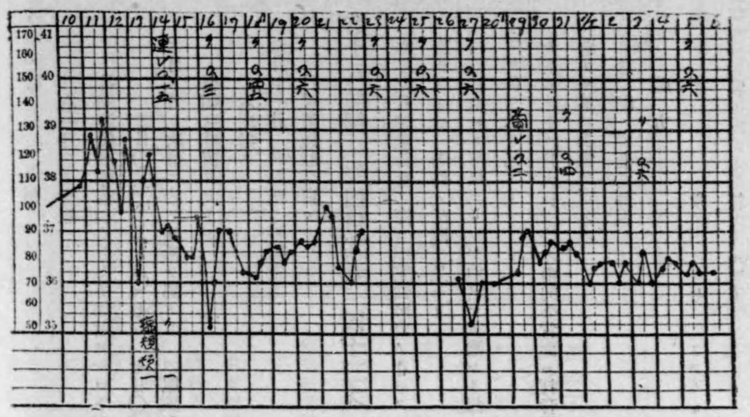
右一包トナシ頓服
佐氏煎(八、〇)二〇〇、〇
苦味丁幾　四、〇
右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　十二粒
右一日三回食後二日分服

十二月十三日　今朝下降セシ熱候ノ正午ニ上昇セルヲ以テ左方ヲ與フ

處方

鹽酸キニーネ　〇、五
右一包トナシ二包ヲ與フ　每夕一包頓服



佐氏煎劑　結丸
各前方

十二月十四日　解熱セルニ係ハラズ胸部ノ病變依然タリ依テ左方ヲ處ス

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

十四日〇、二cc
十六日〇、三cc
十八日〇、四cc
二十日〇、六cc
二十三日〇、六cc
二十五日〇、六cc
二十七日〇、六cc

十二月十八日　眩暈アリ盜汗アリト

處方

硫酸アトロピネ丸　〇、〇〇〇五

右一包トナシ二包ヲ與フ　臨臥時一包頓服

佐氏煎劑　結丸　各前方

十二月二十日　右肩胛間部中央以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ他ハ異常ヲ認メズ

十二月二十一日　尚ホ眩暈治マラズ且食後ニ嘔氣アリト

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　重炭酸曹達　四、〇
臭素加里　四、〇　苦味丁幾　四、〇

右一日三回食前二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　前方

十二月二十三日　食後ニ嘔氣アリ眩暈アリ　附添人檢溫器ヲ破損ス

處方

稀鹽酸　二、〇　苦味丁幾　四、〇
薑根舍利別　一〇、〇　水　二〇〇、〇

右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　前方

十二月二十五日　嘔氣治ス眩暈尚ホ存ス兩肺ニ異常ヲ認メズ　內服藥各前方

十二月二十九日　兩肩胛上部輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ依テ左方ヲ處ス

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　苦味丁幾　四、〇
單舍利別　一〇、〇

右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　前方
葡萄狀球菌ワクチン　〇、二

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

十二月三十一日　內服藥ハ各前方ヲ與フ
葡萄狀球菌ワクチン　〇、四

第十九病例　辻村某女　四十才

約十年前ニ卵巢囊腫ノ爲ニ開腹術ヲ行ヒ爾後健康ナリシモ約三年後ニ何處トナク違和ヲ覺エ肩ヨリ首筋ニ凝リヲ來シ且毎日午前九時頃若クハ三時頃又ハ夜分ニ寒慄アリシ而シテ三年前ヨリ神經衰弱症ナリト診定セラルル然ルニ本年四月三日寒氣シ次デ發熱シ三十八度九分ヲ呈セリ依テ某醫ニ治ヲ乞ヒシニ肋膜炎ナリト云ヘリ爾

右注射ス

大正六年一月三日　兩肩胛上部ニ異常ヲ認メズ　內服藥各前方ヲ與フ

葡萄狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

二日〇、六cc　九日〇、八cc　十三日一、〇cc
特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ
五日〇、六cc　十一日〇、六cc　十五日〇、七cc

二月二日　復タ兩肩胛上部輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ　內服藥ハ各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス

二月四日　兩肩胛上部ニ異常ヲ認メズ爾來佐氏煎劑結丸ヲ內服セシメ十五日ニ至ルモ肺部ニ異常ナキヲ以テ休藥セシム

來盜汗咳嗽アリ昨今ハ盜汗ハ大ニ減ジ咳嗽ハ尚ホ少シク存スルモ主ナル苦腦ハ肩ヨリ頸部ニカケテノ凝リナリト云フ

大正五年五月十日　診ス右胸全背部及ビ左肩胛間部中央ハ上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ニ且左肩胛上部ト右肩胛間部棘以上トニ無響水泡音アリ左腸骨窩部ハ輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ體溫ニ

十八度五分

診　斷　間質性肺炎　腹膜炎

處　方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　四、〇

苦　味　丁　幾　四、〇　メンタ水　一〇、〇

右一日三回食前二日分服

結　劑　四號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

佐氏塗布劑

右下腹部ニ塗布ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一五

右注射ス

五月十二日　昨夕六時過ギ體溫三十七度五分今朝三十六度四分肩カルシ結劑ハ服用シ惡ッヽシト

處　方

ファゴール　一、〇　乳　糖　二、〇

右散六包トナス一日三回食後二日分服

佐氏煎劑　塗腹劑　各前方

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

十二日〇、三cc　十四日〇、四五cc　十六日〇、六cc　十八日〇、六cc　二十日〇、六cc　二十二日〇、六cc

五月十六日　近來平溫ナリト　內服藥　塗腹藥　各前ノ如シ

五月二十四日　左右肩胛上部ハ依然トシテ打音輕濁ニ而シテ左側ハ呼吸音弱ク右側ハ呼吸音粗烈ニシテ無響水泡音アリ右肩胛下隅以下輕濁ニシテ呼吸音弱シ依テ葡萄狀球菌「ワクチン」ノ注射ヲ試ム　內服藥　塗腹劑　各前方

葡萄狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

二十四日〇、一五cc　二十六日〇、三cc　二十八日〇、四五cc　三十日〇、六cc

六月三日〇、八cc　十九日一、〇cc　二十九日一、〇cc

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

二十四日〇、七cc　二十六日〇、七cc　二十八日〇、七cc

六月一日〇、七cc　六日〇、七cc　十日〇、七cc　十五日〇、七cc　二十四日〇、七cc

七月四日〇、七cc　十日〇、七cc

五月二十六日　睡眠後咽頭乾燥シテ痛ミアリト

處　方

佐氏煎劑　塗腹劑　各前方

ファゴール　一、五　乳　糖　二、〇

右散六包トナス一日三回食後二日分服

五月二十八日　昨夜體溫一二分高カリシ頭重アリ盜汗アリ左肩胛上部ノ濁性減ズ　內服藥　塗布藥　各前方ヲ與フ

五月三十日　頭痛ナシ咽頭ノ右側疼痛アリ從來朝咽頭乾燥シテ痛ミアリシト　兩肩胛上部ノ濁性減ズ又右肩胛上部ノ水泡音減ズ

六月一日　氣分大ニ宜シト咽頭ノ乾燥及疼痛ナシ　右肩胛上部輕濁ニシテ呼吸音弱ク無響水泡音アリ他胸部ニ異常ヲ認メズ

處　方

右散六包トナス一日三回食後二日分服

第二十病例　杉谷某男　四十六才

約十年程前ヨリ盲腸炎ニ罹リ今ニ盲腸ノ肥厚ヲ殘シ且其頃ヨリ神經衰弱ヲ來シ加療スルモ治セズ昨今ハ記憶力思考力共ニ減退シ夜間就眠ノ不充分ナルガ爲ニ日中精神爽カナラズ執務又ハ談話中ニ瞬時ノ就眠ヲナスコトアルニヨリ往々事務ニ支障ヲ來サヾルヤヲ恐ルヽコトアリト云フ加之胃部ニ膨滿ヲ感ジ食慾少シク缺損スト

大正五年十一月二十五日　診ス兩肩胛間部中央以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ肝臟腫大シ右季肋下一指腐ニ二指ニ其緣ヲ觸ルル右腸骨窩部ハ輕濁ニシテ抵抗アリ肥厚セル盲腸ヲ腫瘍狀ニ觸ル按壓スルニ右腸骨窩部一般ニ微痛アリ

診　斷　間質性肺炎　肝臟腫大　右腸骨窩部腹膜炎　神經衰弱

處　方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　沃度加里　一、〇

硫酸苦土　二五、〇　苦味丁幾　四、〇

右一日三回食前半時二日分服

結　劑　四號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

硝酸斯篤里規尼涅丸　〇、〇〇六

右一日三回二日分服

佐氏塗布劑　三〇、〇

右朝夕下腹部ニ塗布セシム

ファゴール　二、〇　乳　糖　二、〇

右散六包トナス一日三回食後二日分服

佐氏煎劑　塗腹劑　各前方

六月六日　右肩胛上部ノ濁音消失スサレド呼吸音弱クシテ尙一二ノ水泡音アリ左腸骨窩部ニ異常ヲ認メズ　內服藥　塗腹藥　各前方

六月二十四日　右肩胛上部ニ水泡音ヲ聽取セズ

七月十日　胸腹部ニ異常ヲ認メズ依テ學生ヲ伴フテ安房ニ避暑シ再ビ來ラズ

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

二十五日〇、一五cc　二十七日〇、三cc　二十九日〇、四五cc　十二月三日〇、六cc

十二月五日　兩肩胛上部ハ輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ肝臟ノ腫大ハ既ニ亡失シ右腸骨窩部ノ濁性及ビ壓痛亦消失シ盲腸ノ肥厚ハ大ニ減退ス患者云フ昨今夜間充分ニ睡眠シ得ルニ至リシガ爲ニ日中精神爽快ニシテ且業務ノ爲ニ疲勞ヲ感ズルコト少ナシト　佐氏煎劑　結劑　斯丸　塗腹　各前方

葡萄狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

五日〇、二cc　七日〇、四cc　十四日〇、六cc　十六日〇、六cc　二十日〇、八cc

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

五日〇、六cc　十一日〇、六cc　十八日〇、六cc　二十三日〇、六cc

十二月二十一日　右肩胛上部ハ依然トシテ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ腹膜炎ノ症狀ハ亡失スルモ盲腸ハ尙ホ少シク肥厚ヲ殘ス

佐氏煎劑　結劑　斯丸　塗腹　各前方

十二月二十六日　畿末ニ際シ休藥ス

大正六年一月十七日　右肩胛上部ノ病變依然タリ患者云フ昨今夜間頭部冷ヘ寢ヲキ惡シキガ爲ニ布片ニテ頭部ヲ包ミ就臥スト依テ左方ヲ與フ但シ肝臟ノ腫大ハ既ニ治スルモ患者ハ便通アル方氣分宜シト故ニ硫苦ヲ配伍セリ

處方

佐氏煎(八、〇)　藥用人參煎(八、〇)　二〇〇、〇
沃度加里　一、〇　硫苦　二〇、〇
右一日三回二日分服

結劑　四號膠囊六個
右一日三回二日分服

斯篤里規尼涅丸　〇、〇〇六
右一日三回二日分服

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

十七日　〇、四cc　十九日　〇、六cc　二十三日　〇、六cc
二十七日　〇、六cc　三十一日　〇、七cc

二月九日　頭部ノ冷ユルハ大ニヨロシト右肩胛上ノ病變依然タリ

內服藥塗腹各前方

葡萄狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

九日　〇、六cc　十四日　〇、八cc　十六日　一、〇cc
二十日　一、〇cc

二月二十三日　右肩胛上部ニ異常ナク頭部ノ冷ユルコト亦ナシ盲腸ノ肥厚僅カニ殘ス

處方

佐氏煎(八、〇)　二〇〇、〇　沃度加里　一、〇
硫酸苦土　二〇、〇　苦味丁幾　四、〇
右一日三回二日分服

結劑　三號膠囊六個

第二十一病例　鈴木某女　二十七才

十日程前ヨリ少シク咳嗽アリ肩ハリ頭痛ス殊ニ發熱スル時ハ頭痛强シ昨日來上腹部ニ疼痛ヲ發セシト

大正五年九月三十日　診ス兩背全部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ肝臟ノ腫大ヲ推知スルモ壓痛ノ存スルガ爲ニ其緣ヲ觸ルヽコト能ハズ、サレド右季肋下一横指及臍位マデハ異常ノ抵抗アリ且脾臟腫大ス診時皮溫少シク高シ

診斷　間質性肺炎　肝臟腫大　脾腫大

處方

佐氏煎(八、〇)　二〇〇、〇　沃度加里　一、〇
撒里矢爾鏻曹達　四、〇　硫酸苦土　三〇、〇
杏仁水　八、〇　苦味丁幾　四、〇
右一日三回二日分服

佐氏塗布劑　三〇〇
右塗腹料

特製連鎖狀球菌アクチン　〇、六
右注射ス

故アリテ休藥ス

メンタ水　一〇、〇
右一日三回食前半時二日分服

炭酸ゲアヤコール　一、〇　乳糖　二、〇
右散六包トナス一日三回食後二日分服

鹽酸キニーネ　〇、五
右一包トナシ四包ヲ與フ　朝夕一包頓服

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

九月三十日　〇、一五cc　十月三日　〇、三cc　五日　〇、四五cc　八日　〇、六cc　十日　〇、六cc　十六日　〇、六cc

十月一日　腹痛劇甚ノ故ヲ以テ往診ヲ求メラル依テ左ノ注射ヲナス

處方

鹽酸モルヒネ　〇、〇一　硫酸アトロヒネ　〇、〇〇〇三

右注射ス

十月十八日　右肩胛間部中央以上ト左肩胛上部トハ共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ患者云フ上腹部ノ自發痛ハ昨今ナシト然レドモ肝臟ハ尙ホ腫大シ按壓スルニ疼痛アリ脾臟ノ腫大依然タリ熱候ナシ

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　沃度加里　一、〇
硫　苦　三、〇　苦味丁幾　四、〇
メンタ水　一〇、〇

右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　十二粒

右一日三回食後二日分服

第五章　不明熱

間質性肺炎ノ病初若クハ其ノ經過中ニ發スル所ノ熱候ニ對シ上章既ニ麻拉里亞、窒扶斯及ビ葡萄狀球菌ノ混合傳染ニ因スルモノアルヲ叙說セリト雖モ其發熱タルヤ單ニ這般ノ混合傳染ニ因スルノミニ非ズシテ或症ニ葡萄狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

十八日　〇、二cc　二十日　〇、四cc　二十四日　〇、八cc
二十六日　一、〇cc　二十八日　一、〇cc

十月二十六日　左右兩背部ニ異常ナシ肝臟ノ腫大ハ既ニ亡失シ脾腫亦ナシ因テ思フ本患者ニ於ケル脾腫ハ規尼涅ノ服用ニヨリテ消失セズ肝臟ノ腫大ノ亡失スルト共ニ消失セルハ肝臟腫大ノ爲ニ血行異常ヲ來シ而シテ脾臟ノ腫大ヲ續發セルモノナリ

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　苦味丁幾　四、〇
メンタ水　一〇、〇

右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　十二粒　規那鐵　六粒

右六包トナシ一日三回食後二日分服

於テハ極メテ頑固ナル熱症ニ遭遇スルコトアルナリ左ニ一二ノ病例ヲ揭ゲ

第二十二病例　木間某男　四十一才

從來健全ナリシモ約十五年前ヨリ時々喘息ヲ患ヒシコトアリ本年二月感冒ニ罹リ其際ニ咳嗽アリ越ヘテ四月ヨリ發熱咳嗽アリ而シテ咳嗽ハ殊ニ夜間ニ多シトス之ニ據リ濟生會ノ治療ヲ受クルコト約三ケ月其間ニよでをーるヲ五回注射セリ而シテ昨今夕刻ノ體溫ハ大約三十七度乃至三十八度位ナリト

大正五年八月二十日　診ス兩肩胛上部ハ輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ左腸骨窩部ハ輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ脈力弱シ

診斷　間質性肺炎　喘息　潛在性腹膜炎

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　四、〇
臭素加里　三、〇　ストロフアンツス丁幾　二、〇
鹽酸モルヒネ　〇、〇二　メンタ水　一〇、〇

右一日三回食前二日分服

結劑　四號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一五

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

漿間質性肺炎之特殊療法

佐氏塗布劑

右下腹部ニ塗布ス

八月二十一日　此日入院ス咳嗽多シ脈性惡シ

處方

鹽酸モルヒネ　〇、〇〇五

右頓服

一%硝酸ストリキニーネ液　〇、三

右注射ス

塗腹劑　前方

八月二十二日　右肩胛下隅以上及左肩胛間部中央以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ左腹膜炎症狀亡失シ右腸骨窩部ニ壓痛アリ輕濁ニシテ抵抗アリ

佐氏煎劑　結劑　塗腹劑　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、三

一%硝酸斯篤里規尼涅液　〇、三

右注射ス

八月二十三日　佐氏煎劑　結劑　塗腹藥　各前方

一%硝酸斯篤里規尼涅液　〇、三

右注射ス

八月二十四日　脈力稍恢復ス脾臓腫大スルガ如シ　佐氏煎劑　結劑　塗腹劑　各前方

處方

鹽酸規尼涅　〇、五

右一包トナシ二包ヲ與フ　朝夕一包頓服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四五

葡萄狀球菌ワクチン　〇、二

一%硝酸斯篤里規尼涅液　〇、三

右注射ス

八月二十五日　右鎖骨下窩及左第二肋間以上ハ輕濁ニシテ呼吸音粗雜ニ左側ニ少許ノ水泡音アリ背部ハ前日ニ於クルト同ジ　佐氏煎劑　結劑　鹽規　塗腹劑　各前方

一%硝酸斯篤里規尼涅液　〇、三

右注射ス

八月二十六日　殆ド脾腫ナシ　佐氏煎劑　結劑　鹽規　塗腹劑　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

葡萄狀球菌ワクチン　〇、四

右注射ス

八月二十八日　嚥下時ニ咽頭痛アリト依テ檢スルニ喉頭ニ潰瘍アリ腹部ニ異常ナシ　熱候依然タルニヨリ左方ヲ與フ　塗腹劑休止

處方

佐氏煎（四、〇）一〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　一、五

ヒラミドン　〇、三　ストロフアンツス丁幾

杏仁水　四、〇　鹽酸モルヒネ　〇、〇一

メンタ水　五、〇

右一日三回食前分服

結劑　三號膠囊三個

鹽酸規尼涅頓服　前方

乳酸メントール、アルコール

右塗咽料

葡萄狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

八月二十九日　熱候頑強ナリ咳嗽依然トシテ多シ患者結劑ノ嚥下惡シキヲ訴フ依テ左方ヲ與フ

處方

結劑　三號膠囊三個　ザロール　二、〇

右三包トナシ一日三回食後ニ分服

佐氏煎（四、〇）二〇〇、〇　ストロフアンツス丁幾　一、〇

鹽酸モルヒネ　〇、〇一　杏仁水　四、〇

單舍利別　五、〇

メンタ水　五、〇

右一日三回食前分服

佐氏解熱丸　各〇、五

右一包トナシ二包ヲ與フ

朝夕一包頓服

稀鹽酸　一、〇

沃度丁幾　五滴

苦味丁幾　二、〇　單舍利別　五、〇

メンタ水　五、〇

右一日三回分服

八月三十日　昨夜咳嗽ナカリシト　內服藥各前方

葡萄狀球菌ワクチン　〇、八

右注射ス

九月一日　咳嗽多シ兩肩胛間部中央以上ハ共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音ハ左肩胛間部下三分一以上ハ粗烈ニシテ且少許ノ水泡音アリ右側ハ肩胛上部ニ弱クシテ其下部ノ變濁部ハ粗烈ナリ左前胸變濁部モ亦呼吸音粗烈ナリ

處方

佐氏煎（四、〇）一〇〇、〇　沃度加里　〇、五

ヒラミドン　〇、三　鹽酸モルヒネ　〇、〇一

杏仁水　四、〇　苦味丁幾　二、〇

單舍利別　五、〇

右一日三回分服

結劑　佐氏解熱丸　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

九月三日　內服藥ハ各前方ヲ與フ

葡萄狀球菌ワクチン　〇、八

右注射ス

九月五日　脈力弱シ脾部ニ濁音ヲ生ズ一昨夜大腹加答兒ノ症狀ヲ呈ス

處方

佐氏煎(四、〇)　一〇〇、〇　沃度加里　〇、五
ピラミドン　〇、三　ストロフアンツス丁幾　一、〇
阿片丁幾　一、〇　杏仁水　四、〇
單舍利別　五、〇

右一日三回分服

結劑　前方
鹽酸キニーネ　〇、五

右一包トナシ二包ヲ與フ　朝夕一包頓服

撒里矢爾酸曹達　二、五　水　三〇〇、〇

右洗腸料

佐氏塗布劑

右下腹部ニ塗布ス

カンフル油　一、〇

右注射ス

特製連鎖連狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

九月七日　佐氏煎劑　結劑　鹽規　塗腹劑　各前方ヲ與フ

葡萄狀球菌ワクチン　〇、九

右注射ス

九月九日　熱候低減スルニ係ハラズ胸部ノ病狀依然タリ咳嗽亦減少セズ

處方

結劑　二號膠囊三個

右一日三回食後分服

佐氏煎劑　鹽規　塗腹劑　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

九月十日　家事ノ都合ヲ以テ退院ス

本患者ノ頑強ナリシ所ノ熱候ハ辛フシテ低減セ、ニ際シ事故ヲ以テ退院シ其後ノ病狀ヲ視察スルヲ得ザリシハ遺憾ナリ而シテ其頑強ナリシ熱候ハ幸ニ下降スト雖モ其發熱原ノ何ナルヤハ使用セシ藥劑ニ據リテ之ヲ判知スルヲ得ザレ、リ

第二十三病例　飯塚某男　三十八才

昨年舊正月頃發熱セリ感冒ナリト思ヒ居タルニ十日程ヲ經テ二回喀血セリ依テ醫療ヲ加ヘシモ藥效ナク漸次衰弱ヲ加ヘタリ而シテ最初ハ咳嗽多カリシモ昨今ハ大ニ減ゼリ目下時々惡寒アリ盜汗アリ便秘シ食慾不振ナリ

昨年發病後二ヶ月ヲ經テ北里養生園ニ入院シ今日ニ及ベリ其間つべるくりんノ注射療法ヲ受クルコト數十回ニシテ極量ニ達セリト云フ在園中二回喀血セリ而シテ先々月三日間喀血セル後ニ發熱シ爾來解熱セズト

大正五年五月一日　診ス而色帶黃蒼白色ヲ呈シ兩肩胛間部中央以上濁音ニシテ呼吸音微弱ニ左肩胛上部ニ有響水泡音アリ右鎖骨下窩及ビ第二肋間ハ打音ニ異常ナキモ呼吸音微弱ニ左鎖骨下窩及ビ第二肋間ハ濁音ニシテ有響水泡音アリ左腸骨窩部ハ輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ

診斷　間質性肺炎　腹膜炎

處方

佐氏煎(四、〇)　小連翹煎(四、〇)　一〇〇、〇
杏仁水　四、〇　苦味丁幾　二、〇

右一日三回分服

結劑　四號膠囊三個

右一日三回食後分服

佐氏塗布劑

右下腹部ニ塗布ス

五月二日　昨夜盜汗アリ又咳嗽多シ　結劑　塗腹　各前方

處方

硫酸アトロピネ丸　〇、〇〇〇五

右臨臥時頓服

佐氏煎(四、〇)　小連翹煎(四、〇)　一〇〇、〇
鹽酸モルヒネ　〇、〇一　杏仁水　四、〇
苦味丁幾　二、〇

右一日三回分服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

五月四日　左肩胛間部以上ノ濁性減ジ又左胸及ビ右前胸ノ水泡音ハ大ニ其數ヲ減ジ且無響トナル咳嗽減ズ　內服藥各前方ヲ與ヘ且塗腹藥前ノ如シ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、二

右注射ス

五月六日　諸症依然タリ　内服藥　塗腹　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、三

右注射ス

午後裏急後重アリテ數回排便ス

處方

瓶麻子油　二五、〇

右頓服

五月七日　盜汗ナシ　結劑　塗腹劑　各前方

處方

佐氏煎(四、〇)　小連翹煎(四、〇)　一〇〇、〇

阿片丁幾　一、〇　苦味丁幾　二、〇

メンタ水　五、〇　杏仁水　四、〇

右一日三回分服

五月八日　昨日來便通ナシ、熱候依然タリ　結劑　塗腹劑　各前方

處方

佐氏煎(四、〇)　小連翹煎(四、〇)　一〇〇、〇

撒里矢爾酸曹達　二、〇　杏仁水　四、〇

鹽酸モルヒネ　〇、〇一　苦味丁幾　二、〇

メンタ水　五、〇

右一日三回分服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四

右注射ス

五月九日　左前胸部ノ濁性少シク減ズ水泡音消失ス　各前方ヲ與フ

五月十日　熱候依然タリ　佐氏煎劑　結劑　塗腹　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、五

右注射ス

葡萄狀球菌ワクチン　〇、二五

右注射ス

五月十二日　食慾少シク進ミ且氣分ヨロシ腹部ニ異常ナシ　内服藥前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

葡萄狀球菌ワクチン　〇、四

右注射ス

五月十四日　熱候依然タリ　佐氏煎劑　結劑　各前方

葡萄狀球菌ワクチン　〇、五五

右注射ス

五月十六日　兩背部ニ濁音ナシ前後共ニ水泡音ナシ又咳嗽大ニ減ズ然レドモ熱候依然タリ依テ試ミニひなりんヲ用ユ

處方

佐氏煎(四、〇)　一〇、〇〇　撒里矢爾酸曹達　二、〇

鹽酸モルヒネ　〇、〇一　杏仁水　四、〇

苦味丁幾　二、〇　メンタ水　五、〇

右一日三回分服

結劑　三黴膠囊三個

右一日三回食後分服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

二%ヒナリン液　〇、七五

右注射ス

五月十七日　兩肩胛上部ニ再ビ輕濁音ヲ生ズ　内服藥各前方

二%ヒナリン液　一、〇

右注射ス

五月十八日　熱候少シク低シ　内服藥各前方

葡萄狀球菌ワクチン　〇、七

右注射ス

二%ヒナリン液　一、〇

右注射ス

五月十九日　昨日熱候低カリシ　内服藥各前方

二%ヒナリン液　一、〇

右注射ス

五月二十日　内服藥各前方

葡萄狀球菌ワクチン　〇、八五

右注射ス

五月二十一日　佐氏煎劑　結劑　各前方

二%ヒナリン液　一、〇

右注射ス

五月二十二日　ひなりんハ多少熱候ヲ下低セシムルノ效アルガ如キモ脈性ヲ不良ナラシムルヤノ疑アルニヨリ其使用ヲ休止ス　結劑前方ヲ投ズ

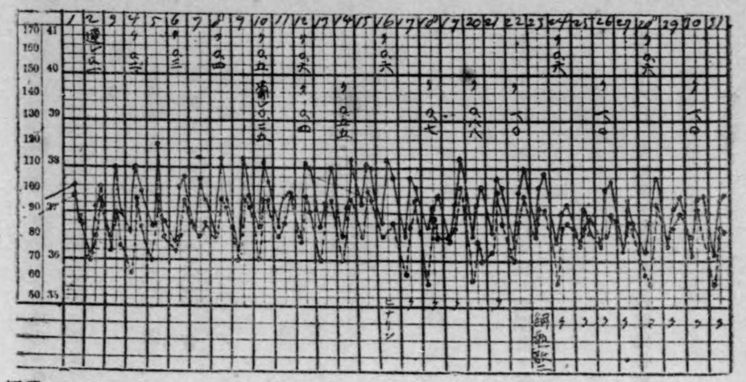
處方

佐氏煎(四、〇)　一〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　二、〇

ピラミドン　〇、二　鹽酸モルヒネ　〇、〇一

杏仁水　四、〇　苦味丁幾　二、〇

メンタ水　五、〇



右一日三回分服
葡萄狀球菌ワクチン　一、〇
右注射ス
五月二十三日　熱候依然タリ　佐氏煎劑　結劑　各前方
處方
フエナセチン　〇、五
エルボン　一、〇
カンフル酸　〇、六
乳糖　〇、五
右散二包トナス
朝夕一包頓服
五月二十四日　盜汗多シ　佐氏煎劑　結劑　解熱散　各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス
五月二十六日　左前胸部及ビ背部ノ水泡音增多ス但シ無響性ナリ
處方
佐氏煎(四、〇)　小連翹煎(四、〇)　一〇〇、〇
撒里矢爾酸曹達　二、〇　鹽酸モルヒネ　〇、〇一
杏仁水　四、〇　苦味丁幾　二、〇
メンタ水　五、〇
右一日三回分服
結劑　解熱散　各前方
葡萄狀球菌ワクチン　一、〇
右注射ス
五月二十七日　二十四日二十五日低降セシ熱候ハ昨日少シク上昇ス依テ佐氏煎劑中ニぴらみどんヲ加フ　結劑　解熱散　各前方
處方
佐氏煎(四、〇)　小連翹煎(四、〇)　一〇〇、〇
撒里矢爾酸曹達　二、〇　ピラミドン　〇、二
鹽酸モルヒネ　〇、〇一　杏仁水　四、〇
メンタ水　五、〇

右一日三回分服
五月二十八日　盜汗大ニ減ズ從來ハ爲ニ更衣スル程ナリキ　佐氏煎劑　結劑　解熱散　各前方
特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス
五月三十日　佐氏煎劑ヲ左方ニ轉ズ　結劑　解熱散　各前方
處方
佐氏煎(四、〇)　小連翹煎(四、〇)　一〇〇、〇
撒里矢爾酸曹達　一、五　ピラミドン　〇、三
鹽酸モルヒネ　〇、〇一　杏仁水　四、〇
メンタ水　五、〇
右一日三回分服
葡萄狀球菌ワクチン　一、〇
右注射ス

本患者ノ如キ頑固ナル熱候ハ其原因ヲ解スルコト能ハズ

叙上二例ニ示ス如ク肺癆患者ノ經過中ニ來ス所ノ頑强ナル熱候ハ之ヲ結核菌ノ混合傳染スルニヨリテ發スルモノト解スベキカ或ハ他ノ未知ノ病症ノ併存スルニヨリテ發スルモノト解スベキカ其研鑽タルヤ尙ホ多大ノ餘地アルモノニシテ畢竟他日ノ研究ヲ俟テ之ヲ解決セザル可カラズ然リト雖モ夫ノ醫人ノ其技術ノ拙劣ナルガ爲ニ肺癆患者ヲ其早期ニ診知シテ之ヲ治癒セシムルコト能ハズ縱令之ヲ診知スルモ或ハ無效ノ藥材ヲ弄シテ其病症ヲ增惡セシメ或ハ轉地療養ヲ勸メ之ヲ敬遠シテ其病症ヲ增進セシメ而シテ後ニ之ヲ研鑽シ或ハ高熱ヲ呈スルニ至リテ而シテ後ニ其解熱療法ヲ加ヘントスルガ如キハ痴愚ノ至リニシテ患者ハ必ズ其病初ニ適當ナル治療ヲ施シテ之ヲ痊了シ病症ヲシテ重惡ナラシメザルヲ望ムヤ切ナルモノナリト言フヲ得ベシ古言ニ曰ク上醫ハ其未ダ病マザルヲ治ムト故ニ肺癆ヲ豫防シ又ハ肺癆ヲ痊了セシメント欲セバ間質性肺炎ヲ其病初ニ診知シ而シテ之ニ特殊療法ヲ行フテ其病症ヲ亡失セシムレバ敢テ頑固ナル熱候ヲ研鑽スルノ勞ヲ要セザルノ

理ナリ醫人ノ努ムベキハ間質性肺炎ノ早期治療ナリトス。

第六章　結核菌

肺癆患者ノ死屍ヲ剖檢スル時ハ殆ド每ニ其病竈部ニ結核性結節ノ存在スルモノナルハ既知ノ事實ナルヲ以テ從來肺癆ノ病理ヲ說述スルモノハ其剖檢上ノ所見ニ基キ肺癆ハ結核性氣管枝肺炎ニシテ結核菌ニヨリテ發起スル所ノ病症ナリト爲ス之レ實ニ死後ノ結果ニヨリテ其病症ヲ斷ズルモノニシテ現時ノ所謂科學的智識ニ於テハ爾ク之ヲ解セザルヲ得ザル所ノモノナル可シ由來因ヨリ果ヲ生ズ故ニ其結果ニ據リテ其原因ヲ推究スルニ之ヲ知得シ得ラレザルニ非ザル可シト雖モ其知得スル所ノモノタルヤ皆悉ク是ナルニ非ズ之ヲ以テ單ニ其結果ノミヲ以テ其原因ヲ斷ズルニ於テハ往々ニシテ大ナル誤謬ニ陷ルノ危險アルヲ知ラザル可カラズ例之バ齲齒腔內ニ存スル幾種ノ生酸菌ハ齲齒ヲ來スノ原因タルモノナリト爲スモ口腔粘膜ニ微弱ナル炎症ノ存シ口內液ノ酸性ヲ呈スルニ於テハ嫌酸菌ハ其發育ヲ阻害セラレ好酸菌ハ其發育ノ成長セラルルノ理ナルヲ以テ齲齒ノ生ズルト同時ニ其腔內ニ生酸菌ノ發育スルハ敢テ異シム可キニ非ズシテ却テ其生酸菌ヲ以テ齲齒ノ原因ナリト爲スヲ恠マザルヲ得ザルガ如シ肺癆ニ於テモ亦然リ蓋シ結核性結節ハ結核菌ニヨリテ發生スルモノナルハ眞理ニシテ夫ノ粟粒結核ハ卽チ結核菌ノ爲ニ發起スル所ノ病症ナリト爲スコトヲ得ベシト雖モ肺癆患者ノ肺ノ病變部ニ於テハ每ニ結核性結節ト非結核性氣管枝肺炎ト混在スルニ拘ハラズ彼等ハ非結核性氣管枝肺

炎ノ存在ヲ忘却シ其發生ノ因ト其斯病ニ對スル關係トヲ究メズシテ單ニ屍體ノ病變部ニ結核性結節ノ存在スルノ故ノミヲ以テ慢性肺炎ヲ目シテ一概ニ之ヲ結核菌ニ據リテ發起スル所ノ病症ナリトナシ診療共ニ一途ニ結核菌ニ執着シテ其非ナルヲ自覺スルコト能ハザルモノナレバナリ。

予ハ非結核性間質性肺炎ノ國民ノ極メテ多數ヲ侵害スルモノナルヲ發見シ次デ其特殊療法ノ殆ド絕對的ニ確實ナル治效アルヲ極ムルヤ之ニ據リテ非結核性間質性肺炎ノ原因ヲ知リ亦之ニ賴リテ慢性肺炎ハ其病初ハ結核菌ニ由リテ發生スル所ノ疾病ニ非ザルモノナルヲ覺知スルヲ得タリ然レドモ其慢性肺炎ノ發生ノ初メニ於テハ患者ハ必ズシモ多大ナル病苦ヲ自覺スルモノニ非ザルヲ以テ斯病ノ潛在的ニ慢性ニ經過スル間ニハ或ハ他種細菌ノ混合傳染ヲ致シ或ハ其發炎部ハ組織細胞ノ抵抗力ノ減退スルガ爲ニ結核菌ノ發育ヲ容易ナラシメ而シテ結核菌ノ混合傳染ヲ招來シ終ニハ此等混合傳染ハ其原病ヲ不明ナラシメテ遂ニ結核性肺癆ニ移行スルモノナルモ吾人ハ之ニ對シ未ダ其結核菌ノ混合傳染セルノ時期ニ之ヲ診知スルノ學術的知識ヲ有セズ唯單ニ從來ノ經驗ノミニ基キ其病狀ニヨリテ漫然之ヲ肺結核症ナリト推定スルニ過ギザルナリ亦殆カラズヤ

左ノ一篇ハ多少此間ノ消息ヲ窺知スルニ足ルベキモノナルヲ信ズ故ニ之ヲ錄ス。

職工ノ體格檢査ニ基キ其保健上ノ卑見

緒　言

今回貴社ノ依囑ニヨリ本月六日ヨリ貴社職工ノ體格檢査ヲ施行シ二十一日終了セルヲ以テ其檢査成績ノ一

覽表ヲ作製シ之ヲ報告スルニ當リ聊カ職工保健上ノ卑見ヲ開陳シテ以テ參考ノ資ニ供セントス。

其一　體格檢査ノ成績

今回施行セル職工ノ體格檢査ノ成績ハ別紙ノ人別表及ビ統計表ヲ一覽スレバ則チ明カナリト雖モ尙ホ茲ニ其概要ヲ摘記スルニ

體格檢査ヲ施セシ總人員　一千三百十四人

內譯

健全ナル者　二百六十人

肺癆患者　一千〇五十四人＝＝約八〇、二%

但シ上記健全ナルモノハ敢テ絕對的ニ無病ナルモノヽ謂ニ非ズシテ唯工場法ニ列記スル使用禁止ノ疾病ヲ有セザルモノヲ云フノミ。

茲ニ肺癆患者ト命名スル所ノ疾病ハ肺ノ慢性炎症ニシテ卽チ予ノ所謂間質性肺炎ナリ而シテ間質性肺炎トハ前人未說ノ肺ノ炎症ニ予ノ自ラ名ツケシモノニシテ未ダ世上一般ニ知得セラルヽモノニアラザルモ要ハ從來世人ノ信ズル所ノ肺癆ハ結核菌ニ據リテ發起スル肺ノ慢性炎症ナリトノ通說ニ反シ肺癆ハ其病初ハ結核菌ニ非ザル他ノ細菌ノ爲ニ氣管枝及ビ肺胞周圍ノ間質結締織ノ慢性炎症卽チ間質性肺炎ヲ發シ其病症ノ經過スル或期間ニ於テ結核菌ノ傳染スルアレバ乃チ茲ニ結核性肺癆卽チ肺結核ニ轉症スルモノナリト爲スナリ然ラバ乃チ間質性肺炎ハ肺結核ノ先發病ナリト雖モ其肺結核症ニ轉症スルノ時期ハ之ヲ明知スルノ診斷法ヲ有セザルヲ以テ試ミニ現時ニ行ハルヽ所ノ肺結核早期診斷法タルぴるけい反應ノ有無ヲ檢査セシニ其成績ハ左ノ如クナリシ。

肺癆患者總人員　一千〇五十四人

右肋膜下腔ニ滯水アル者＝＝一〇八人（一〇、二四%）
　ぴるけい反應陽性ノ者＝＝七〇人
　ぴるけい反應陰性ノ者＝＝三八人
左肋膜下腔ニ滯水アル者＝＝七人
　ぴるけい反應陽性ノ者＝＝五人
　ぴるけい反應陰性ノ者＝＝二人
兩肋膜下腔ニ滯水アル者＝＝六五八人（六二、四二%）
　ぴるけい反應陽性ノ者＝＝四四六人
　ぴるけい反應陰性ノ者＝＝二一三人
肋膜ノ下腔ニ滯水ナキ者＝＝二七四人（二五、九九%）
　ぴるけい反應陽性ノ者＝＝一八八人
　ぴるけい反應陰性ノ者＝＝八六人
既ニ左鎖骨下部ニ及ブ者＝＝三六人（三、四%）
　ぴるけい反應陽性ノ者＝＝二〇人
　ぴるけい反應陰性ノ者＝＝一六人
既ニ右鎖骨下部ニ及ブ者＝＝二人
　ぴるけい反應陽性ノ者＝＝〇人
　ぴるけい反應陰性ノ者＝＝二人
既ニ胸部ノ前後ニ及ブ者＝＝五三人（五%）
　ぴるけい反應陽性ノ者＝＝二三人
　ぴるけい反應陰性ノ者＝＝三〇人

上記ノ肋膜腔ノ滯水ハ從來誤テ溫性肋膜炎トナセシモノナリ

更ニ之ヲ括約スレバ

肺癆患者ノぴるけい反應ノ陽性ナリシ者　七〇九人――六七、六五%
肺癆患者ノぴるけい反應ノ陰性ナリシ者　三三九人――三二、三四%
肺癆患者ノぴるけい反應ヲ檢セザリシ者　六人

即チ就業セル職工百人ニツキ肺癆者八十人ニシテ其肺癆者ノ約三分二ハぴるけい反應ヲ呈シ他ノ三分一ハぴるけい反應ヲ呈セザルノ割合ナリ。

吾邦ニ於ケル結核患者殊ニ肺結核患者ノ年々ニ增加スルハ既ニ周知ノ事實ナリト雖モ吾人ハ之レニ據リテ叙上ノぴるけい反應ノ陽性ナル職工ノ肺癆者ヲ皆悉ク肺結核ナリト斷定シ得ベキニ非ズ蓋シ結核性病竈ノ身體ノ何レノ部ニカ存在スルアレバ則チ該反應ハ陽性ニ發現スルモノナレバナリ然ルニ現時ノ醫學ニ於テ肺結核ノ早期診斷法トシテぴるけい反應ニ重キヲ置キ而シテ肺ニ慢性炎症ノ存在スルヲ徵知シぴるけい反應ノ陽性ヲ呈スルアレバ直チニ之ヲ肺結核ナリト速了スル所以ノモノハ夫ノ屍體ニ於ケル病理解剖上ノ所見ヲ過信シ結核性肺癆患者ノ患部ニハ毎ニ結核性病變ノ存在スルモノナリトノ先入爲主ハ肺癆患者ノ死屍ハ常ニ結核性ナルヲ以テ肺癆ハ其病初ヨリ結核菌ニ據リテ發起スル所ノ病症ナリト妄斷スルガ故ニ茲ニぴるけい反應ニ至大ナル意義ヲ有セシメテ而シテ之ヲ肺結核ノ早期診斷法ニ應用シ其誤謬ナルヲ覺悟シ得ザル者ナリト斷言スルニ憚カラザルナリ吾人ハ既ニ彼ノ窒扶斯ニ於ケルうぃだーる反應又ハ梅毒ニ於ケルわっせるまん反應ノ縱令陽性ナル場合ニ際シテモ尙ホ其病症ノ窒扶斯タリ又ハ梅毒タルニアラザレバ之ヲ窒扶斯又ハ梅毒ト診定スベキモノニ非ザルヲ知ル然ラバ乃チ肺癆患者ニシテ縱令ぴるけい反應ノ陽性ヲ呈スルアルモ其慢性肺炎ニシテ結核症ニアラザル限リハ之ヲ肺結核ト診定スベキモノニ非ザルヤ亦瞭カナリ之ヲ以テ叙上ノぴるけい反應ノ陽性ナル肺癆職工ノ其肺ニ於ケル慢性炎症ノ果シテ結核症ナルヤ否ヤハ更ニ之ヲ確定スルノ法ヲ講ゼザル可カラザルノ要アルナリ。

其二　肺癆職工ノ救治策

抑肺ノ慢性炎症タル間質性肺炎ハ全國民ノ最モ多數ヲ侵害シ單ニ肺ノ病症ノミナラズ諸種ノ續發症狀ヲ惹起スル所ノ疾病ナリト雖モ現時ニ於テ一般醫師ニ知得セラレザル所以ノ者ハ一ハ既刊ノ成書中ニハ這般ノ病症ノ記載ナクシテ曾テ之ヲ習得セザルガ爲ニ縱令肺ニ或病變ノ存在スルヲ診知スルモ之ヲ不問ニ付スルモノアリ之ヲ他病ト誤認スルモノアリ一ハ本病ハ其病初ニ於テハ肺ノ病變ノ輕微ニシテ之ヲ診知スルニハ熟練ヲ要スルガ爲ニ發見スルコト能ハザルガ故ナリ之ヲ以テ某講習所ノ全國ヨリ講習生ヲ募集シ其應募時ニ醫師ノ健康ナルコトヲ證明セシ學生ニシテ入所直後ニ健康診査ヲ行ヒシニ左ノ間質性肺炎患者アリタリ。

某所講習生健康檢査成績

明治四十二年度入所生――六六、六%ノ間質性肺炎患者アリ
明治四十三年度入所生――四五、六%ノ間質性肺炎患者アリ
大正三年度入所生――九〇、〇%ノ間質性肺炎患者アリ

此故ニ今回貴社職工ノ體格檢査ニ於テ多數ノ間質性肺炎患者ノ存在スルヲ報告スルモ敢テ貴社業務ノ斯病ノ發生ニ何等ノ關係ヲ有スルアリテ而シテ斯ク多數ノ患者ノ存在スルモノナルニ非ズシテ全國民ノ斯病ニ罹患スルコト多キ結果タルヲ茲ニ斷言スルノ要アルナリ。

多數國民ノ間質性肺炎ニ罹患シ漸次ニ其健康ヲ損害シテ種々ノ病症ヲ將來シ而シテ或ハ續發病症ノ爲ニ死ニ陷ルアリ或ハ肺ノ慢性炎症ハ結核菌ノ傳染ヲ容易ナラシメテ肺結核患者ヲ增加セシムルアルナリ蓋シ然ル所以ノモノハ一ハ斯病ノ爲ニ發スル所ノ病苦ハ多クハ輕微ナルヲ以テ多數ノ患者ハ之ヲ意ニ介セズシテ業務ニ從事シ逐日其病症ヲ增惡セシムルモノナルハ勿論ナリト雖モ尙ホ他ニ一般醫師ノ斯病ノ診斷及ビ治療法ヲ解セザルガ爲ニ斯病ヲ其發生ノ早期ニ知得シテ之ヲ全治セシムルコト能ハズ微弱ナル炎症ヲシテ肺ノ間質組織ニ潛在セシムレバ之ガ最大原因タルモノナルヲ以テ醫師モ亦之ニ對シ責任アルモノナルヲ思ハザル可カラズ。

間質性肺炎ノ發生ハ貴社ノ業務ニ關係ヲ有スルモノニ非ズト雖モ一ド之ニ罹患スル所ノ職工ハ縱令其病苦ヲ自覺スルアルモ彼等ノ常態トシテ一ハ工銀ノ喪失ハ日常生活ノ逼迫ヲ來スガ爲ニ彼等ヲ驅リテ强ヒテ就業スルヲ餘儀ナクセシメ二ハ工場內ノ規定ハ或期日ニ休業スレバ其有利ナル操業ヲ他者ニ奪ハルヽガ爲ニ多少ノ病苦ハ之ヲ忍ビテ就業セザル可カラザルノ弊習アルヲ常ナリトス斯ノ如クニシテ其病ヲ强ヒテ勞役スルニ於テハ多少ノ病苦例之バ輕微ノ發熱ノ如キハ次第ニ之ニ馴致シテ終ニハ習ヒ其性トナリ復タ熱候アルヲ感知セザルニ至ルモノナルガ故ニ知ラズ識ラズ日ニ月ニ其病症ヲ助長セシメテ遂ニ其病勢ヲシテ重惡ニ陷ラシムル弊害ノ極メテ大ナルモノアルナリ況ヤ工場內ノ空氣ハ換氣及ビ除塵法ノ不備ナルガ爲ニ常ニ汚濁スルヲ以テ之ヲ呼吸シ就業スルモノヲシテ其ノ體組織ノ抵抗力ヲ減退シ諸般ノ疾病就中呼吸器系ノ疾病ニ罹患シ易カラシムルハ勿論既存ノ疾病ヲ增惡シ易カラシムル傾向ノ甚シキモノナルニ於テヲヤ之ヲ以テ其生活ノ上ニ困難ヲ感ゼズ且新鮮ニシテ汚塵ノ少ナキ大氣中ニ自在ニ活動スル所ノ人ヲトリテ之ヲ貴社ノ職工ニ比スレバ貴社職工ノ斯病ニ罹患スルモノ多クシテ且其病症ノ稍重惡ナルモノ多キノ理ハ自カラ明カナルベシ然ラバ乃チ一般工業ナルモノヽ其使用職工ノ身體ヲ漸次ニ增惡セシムルモノナルハ掩フベカラザルノ事實ナルヲ以テ假令職工自己ニ多少ノ衞生上ノ欲陷アルモ工業主ハ職工ノ罹病ニ對シ其責任ヲ免カルヽコト能ハザルモノタルヤ亦瞭カナリ是レ工場衞生ノ一日モ之ヲ忽諸ニ付ス可カラザル所以ナリトス

工場法ヲ設定セシ當局者ノ意志ノ工場主保護ニアルヤ將タ職工保護ニアルヤハ醫師タル予ノ之ヲ論ズベキ限リニ非ズ然レドモ其業務ニ聯關スルノ點ニ就テ之ヲ評論スレバ該法ニ於テハ工場內ニ雇用スベカラザル有病者ヲ制限ス故ニ此條例ヲ嚴正ニ履行スルニ於テハ職工ヲシテ傳染性疾病ヲ有スルモノヲ無カラシメ從ツテ職工ヲシテ健康ナラシメ工場ヲシテ健全ナラシムルヲ期シ得テ現時ニ於ケル低下セル職工ノ健康ヲ救濟シ得ルモノナルガ如シ斯ノ如キハ時宜ニ適セルノ施法ニシテ國家ノ爲ニ寔ニ賀スベキノ至リナリト雖モ吾人ハ却テ或ハ之ガ爲ニ角ヲ矯メテ其牛ヲ殺スノ弊ニ陷ルナキヤノ虞レナキ能ハズ何ヲ以テ然ルカ蓋シ該法ニ基キ傳染

性疾病ヲ有スル所ノ職工ニ對シ其使用ヲ嚴格ニ禁止スルニ於テハ殊ニ職工中ノ多數ヲ占ムル所ノ夫ノ現時ノ所謂肺結核病者ハ忽チニ其業務ニ離レ直チニ其糊口ニ窮スルハ自明ノ理ナリ然ルニ政府ハ未ダ嘗テ此憐ムベキ多數ノ職工ヲ救濟スルノ方法ヲ講ゼシコトヲ聞カズ制法ノ前後顚倒何ゾ其不備ノ甚シキヤ今次ノ工場法ハ果シテ職工ヲ保護スルノ道ナルヤ否ヤ吾人ハ多大ノ疑ナキ能ハズ。

更ニ工場主ニシテ工場法ヲ嚴ニ履行スル者ナリトセンカ工場ハ傳染性疾病殊ニ肺結核ノ爲ニ其職工ノ或數ヲ解雇セザルヲ得ズ然ルニ國民ノ多數ハ間質性肺炎ニ罹患スルモノナルヲ以テ全ク健康ナル男女ヲ募集シ其解雇セル職工ヲ補充セントスルモ大工場ニ於テ一時ニ多數ノ職工ヲ解傭センカ之ヲ補給スルノ困難ナルハ推知スルニ難カラズ今新ニ就業セントスル職工ノ健康診査ノ結果ヲ示サンカ蓋シ思ヒ半ニ過ギザルベシ

大正五年九月職工志望者健康診査表

姓名	年齢	健否	及病症	ぴるけい反應（＋陽性 －陰性）
高橋 某女	二四	健		
星野 某女	一四	健		
小林 某女	二〇		兩背部間質性肺炎、兩肋膜腔瀦水	＋
大野 某男	二三	健		
大谷 某男	二二		兩背部間質性肺炎	－
大平 某男	三二		兩背部間質性肺炎、兩肋膜腔瀦水	＋
伊藤 某男	二九	健		
菅原 某女	二五	健		
岩瀬 某男	二三		兩背部間質性肺炎、右肋膜腔瀦水	－
小杉 某女	一九		兩背部及左第二肋間以上間質性肺炎、兩肋膜腔瀦水	－
岡本 某男	二六		兩背部及前胸部間質性肺炎、右肋膜腔瀦水	＋
池田 某女	二五		兩背部間質性肺炎、右肋膜腔瀦水	＋
岸 某女	一七	健		
白根 某女	二一		兩背部間質性肺炎、兩肋膜腔瀦水	＋
黑瀨 某男	二八	健		
安藤 某男	一九	健		
中山 某男	一九	健		
神林 某女	一六	健		
岩田 某女	一九	健		
岡田 某女	二四	健		

小宮	某女	二九	兩背部間質性肺炎、兩肋膜腔潴水	+
河井	某女	一六	健	
沼尻	某女	一三	兩背部間質性肺炎、兩肋膜腔潴水	−
指田	某女	一五	健	
鵜飼	某女	一七	兩背部間質性肺炎、兩肋膜腔潴水	+
仲丸	某男	二一	健	
一川	某女	二五	兩背部間質性肺炎、兩肋膜腔潴水	+
志田	某女	一六	兩背部及左第二肋間以上間質性肺炎、兩肋膜腔潴水	−
阿部	某男	二四	健	
植木	某男	二〇	健	
阿部	某男	二八	健	
大原	某男	二一	健	
金井	某男	二八	健	
神尾	某男	二七	健	
齋藤	某女	二二	健	
岡田	某男	一六	兩背部間質性肺炎、兩肋膜腔潴水	+
橋本	某男	二二	健	
酒井	某女	二〇	健	
櫻井	某女	一五	健	
羽生	某女	一五	健	
伴內	某女	二二	右背部間質性肺炎、右肋膜腔潴水	+
石渡	某男	二八	兩背部間質性肺炎、兩肋膜腔潴水	+
小樽	某男	二二	健	
古川	某男	二六	健	
佐瀨	某女	二三	兩背部左鎖骨下窩以上間質性肺炎	+
箱嶋	某男	一五	健	
宮林	某男	二〇	健	
矢作	ハツ	一七	健	
小林	某男	五〇	健	
櫻井	某女	二四	兩背部間質性肺炎、兩肋膜腔潴水	+

坪田　某女　一八　健
小松　某女　三〇　健
渡邊　某男　二六　兩背部間質性肺炎、兩肋膜腔滯水

計　五十三人（健康者　三十三人／有病者　二十人）（陽性ナル者　十五人／陰性ナル者　五人）

假リニ迅速ニ其所要ノ職工ヲ募集シ得タリト爲スモ其業務ニ經驗ナキノ職工ハ之ヲ習得セシムルニ少ナカラザル日子ヲ要シ其間作業上ニ於ケル損害ハ決シテ寡少ナルニ非ザルベシ然ラバ乃チ不備ナル工場法ノ施行ハ毫モ工場主ヲ保護スル所以ノモノニ非ザルガ如シ聞ク獨逸國ニアリテハ肺痨職工ニ對シ官立及ビ私立ノ施療病院アリテ懇ロニ之ヲ療養セシメ而シテ其病狀ノ或程度ニ恢復スルアレバ一定期間再ビ就業セシムト吾人ハ斯ノ如クシテ始メテ國家及ビ工場ハ其職工ヲ經濟的有利ニ使用スルモノト謂フヲ得ベシト信ズ。

工場法ハ既ニ實施セラレ其規定ハ縱令不備ナリト雖モ國家及ビ工場主ハ之ヲ遵守セザル可カラズ然リト雖モ營利ヲ以テ其目的トナス所ノ工場主ハ其不利ヲ甘受スベキニ非ズシテ自ラ進デ之ニ對スル方策ヲ講ジ而シテ其雇傭ノ職工ヲ保護スルト同時ニ其自家ノ利益ヲ增進スルニ努メザル可カラザルモノナルヲ信ズ殊ニ貴會社ノ如キ多大ノ資本ト多數ノ職工トヲ有スルモノニ於テハ其利害ノ關係スル所ハ重且大ナルヲ以テ這般ノ方法ヲ策立スルハ現時ニ處シテ最モ痛切ニ感ズル所ノモノナルベシ之ヲ以テ予ハ現時ニ應ズル救濟策ト將來ニ於ケル設備トニ就テ一言スベシ

現時ノ救濟法

今回施行セシ貴社職工ノ健康檢査成績ノ良好ナル結果ヲ得ルコト能ハザリシハ寔ニ悲ムベキノ現象ナリト雖モ之レ國民健康ノ低落セル結果ニシテ單ニ貴社ノミニ於テ然ルニアラズ故ニ全國民ノ健康ノ向上スルニ非ザレバ之ヲ救濟スルコト能ハズト雖モシカモ尙ホ工業其者ノ職工ノ體質ヲ不良ナラシメテ疾病ニ罹リ易キノ素因ヲ來シ且既存ノ疾病ヲ增惡セシムルニ甚大ナル關係アルモノナルハ既ニ說ク所ノ如シ然リ而シテ夫ノ工場法ニ其雇使ヲ禁ズル所ノ肺結核タルヤ其病初ニ之ヲ診定スルノ困難ナルハ醫學上既定ノ件タルヲ以テ予ハ其健康檢査ニ際シ肺ニ慢性炎症ヲ有スルモノニハぴるけい反應ヲ試ミ以テ結核症ノ有無ヲ識別スルノ用ニ供セリ蓋シぴるけい反應タルヤ現時ノ細菌學的學說上ニ最モ確實ナル結核ノ早期診斷法ト認定セラルヽモノナレバ也。

肺ニ慢性炎症卽チ肺痨ノ病徵ヲ存シぴるけい反應ノ陽性ナルモノハ近キ或ハ遠キ未來ニ於テ其死ニ歸スルニ際シテハ完全ナル肺結核ノ病狀ヲ呈スルニ至リ且其死後ニ之ヲ剖檢スレバ肺ニ結核性病竈ノ存在スルヲ證明シ得ルモノナルヲ以テ其肺痨症狀ノ輕微ナル際ニぴるけい反應ヲ呈スルアレバ現時ノ學說ニ從ヘバ直チニ之ヲ肺結核症ナリト確定スルヲ得ルモノナリ然レドモ予ノ臨床上ノ實驗ニ徵スレバ肺痨症狀ヲ有シ而シテ陽性ナルぴるけい反應ヲ呈スルアルモ之ヲ以テ直チニ肺結核症ナリト診定スルハ大ナル早計ニシテ其陽性ナルぴ

るけい反應ノ如キハ身體ノ他部ニ結核性病竈ノ存在スルアルモ亦每ニ發現シ而シテ其反應ノ陽性ナルハ敢テ肺炎症部ヲ結核症ナリト指示スルモノニ非ズシテ只僅カニ向來結核性肺痨ニ轉症シ易キヲ豫告スルニ過ギザルノミ今次ノ健康檢査ニ於テ肺痨症狀ヲ有シ而シテぴるけい反應ノ陽性ナリシ二三患者ノ加療日數ノ極メテ短キニ拘ハラズ既ニ其病狀ノ喪失セルハ叙上ノ論述ヲ立證スルニ足ルナリ。

猪野瀨某女　三十才

健康診査時所見　兩肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ニ呼息少シク延長ス而シテぴるけい反應ハ陽性ナリ

大正五年九月十三日　昨日來發熱ノ感アリテ頭重倦怠アリ殊ニ左肩ニこりヲ覺ユ然レドモ休業スル程ニハアラズト

之ヲ診スルニ右肩胛間部上三分一以上及ビ左肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ他ニ異常ヲ認メズ

診斷　間質性肺炎

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　四、〇
苦味丁幾　四、〇　メンタ水　一〇、〇
右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　十二粒
右一日三回食後二日分服

九月二十一日　尚ホ熱感アリ頭重アリト背部ノ變常依然タリ

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　苦味丁幾　四、〇
右一日三回二日分服

佐氏結丸　前方
特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一五
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

爾來內服藥ハ前方ヲ處シ而シテ特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

九月二十四日　〇、三cc　二十八日　〇、四五cc
十月二日　〇、六cc　五日　〇、六cc　八日　〇、六cc　十日　〇、六cc　十二日　〇、六cc　十四日　〇、六cc

十月五日　昨今熱感ナク頭重及ビ肩ノこり亦ナク氣分ヨロシト右肩胛上部ハ尚ホ輕濁ニシテ呼吸音弱シ

葡萄狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

十月五日　〇、二cc　八日　〇、四cc　十日　〇、六cc

十月十日　右肩胛上部ニ異常ヲ認メズ然レドモ引續キ內服藥ヲ飲用セシム

茂野某女　三十四才

健康診査時所見　兩肩胛間部中央以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ而シテぴるけい反應ハ陽性ナリ

大正五年九月十二日　昨夜來發熱スト診時體溫三十八度四分ナリ之ヲ診スルニ兩肩胛間部中央以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ肝左葉ハ腫大シ臍上約一指ニ其緣ヲ觸ル他ニ異常ナシ

診斷　間質性肺炎　肝腫大

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　四、〇
苦味丁幾　四、〇　メンタ水　一〇、〇
右一日三回二日分服

結劑　四號膠囊六個
右一日三回食後二日分服

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

十二日　〇、一五cc　十四日　〇、三cc　十六日　〇、四五cc
十八日　〇、六cc　二十日　〇、六cc　二十二日　〇、六cc
二十四日　〇、六cc　二十六日　〇、六cc

九月二十四日　背部ニ異常ヲ認メズ然レドモ內服藥ハ尚ホ引續キ服用セシム

沼田ツメ　二十才

健康診査時所見　兩肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ而シテ「ぴるけい」反應ハ陽性ナリ

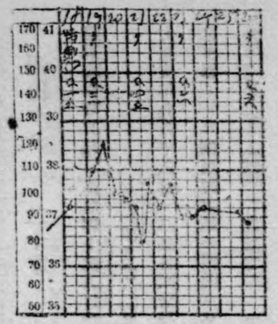
大正五年九月十八日　二三日來全身倦怠ヲ覺ヘ且咳嗽アリト

之ヲ診スルニ兩肩胛上部ハ輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ右肩胛上部ニらっせるアリ脾腫シ且貧血ス

診斷　間質性肺炎　脾腫

處方

鹽酸リモナーデ　二〇〇、〇　鹽酸モルヒネ　〇、〇二
杏仁水　八、〇
右一日三回二日分服



佐氏結核阿曹篤丸　十二粒　十八日〇、一五cc　十九日〇、三cc　二十一日〇、四
右一日三回食後二日分服　五cc　二十三日〇、六cc　二十六日〇、六cc
鹽酸キニーネ　〇、五
右一包トナシ四包ヲ與フ
朝夕一包頓服
特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

九月二十六日　體溫下降シ左肩胛上部ハ異常ナク右肩胛上部ハ尙ホ輕濁ニシテ呼吸音微弱ナルもらっぜるナシ　此日歸省ス

叙上ノ治療法タルヤ予ノ積年研鑽セシ結果ニ成ルモノニシテ今夏之ヲ記述シ間質性肺炎之特殊療法及其原因ト題スル一書ヲ各帝國醫科大學、四五ノ醫學專門學校其他二三ノ知人ニ寄贈公示セルモノナリ而シテ予ノ該治療法ニ期待スル所ハ現代醫家ノ肺癆ニ對スルヤ其病初ノ尙ホ非結核性慢性肺炎タルノ時期ヲ等閑ニ付シ或ハ無要ノ藥治ヲ弄シテ一時ヲ糊塗シ或ハ轉地療養ヲ勸告シ漸次ニ其炎症ヲ增惡シ遂ニ結核症ニ陷ラシメテ然ル後ニ結核性肺癆ノ治療ノ困難ナルヲ歎ズルノ常弊ヲ矯正シ其未ダ結核症ヲ續發セザル所ノ間質性肺炎ノ時期ニ早ク之ヲ攻治スレバ啻ニ其治療ノ容易ナルノミナラズ短日時ノ間ニ其病症ヲ痊癒セシムルコトヲ得ルモノナルヲ以テ吾人ハ之ニ據リテ結核性肺癆ニ轉症スル所ノ慢性炎症ヲ亡失シ身體ヲ强健ナラシメ且之ニ從リテ國民ノ健康ヲ恢復セシメ得ベシト信ズルニアルナリ蓋シ斯ノ若キハ或ハ夫ノ古書ニ良相ハ其未ダ亂レザルヲ道メ良醫ハ其未ダ病マザルヲ治ムト言フニ庶幾スルモノナランカ然レドモ敢テ誇凌スルニ非ザルナリ。

間質性肺炎ニ對スル特殊療法ハ細菌學的新智識ニシテ非結核性肺癆ニハ顯著ナル治效アルモ結核菌ニ因スル肺癆ニハ何等ノ治效ヲ奏スルモノニ非ズ爾ク其療病的作用ノ特殊ナルガ故ニ之ヲ肺癆患者ニ應用スレバ其非結核性肺癆症狀ハ容易ニ亡散スルモ結核性病竈ハ依然トシテ遺殘スルヲ以テ之ニ據リテ夫ノぴるけい反應ノ不確實ナルヲ補ヒ得テ而シテ的確ニ非結核性肺癆ト結核性肺癆トヲ辨識シ得ルモノナリ。

間質性肺炎ニ對スル特殊療法ハ確實ニ肺結核症ヲ區別シ得ルモノナリト雖モ夫ノぴるけい反應ノ簡易ニ行フコトヲ得ルニ反シ疾病ヲ治了シテ而シテ後ニ之ヲ識別セザル可カラザルモノナルヲ以テ多少ノ日子ト之ニ伴フ費用トヲ要スルノ不便アリ然レドモ其支障ニシテ打破スルコトヲ得ンカ身體ヲ健全ナラシムルト同時ニ其結核症ニ非ザリシヲ知得スルノ利アルナリ加之ナラズ肺結核症ト雖モ其輕症ナルニ於テハ併存スル所ノ非結核性炎症ノ亡失シ非結核性症狀ノ喪失シ單ニ結核性病竈ヨリ發スル所ノ病狀ノミ殘留スルヲ以テ從來自覺セシ病苦ノ大半若クハ全般ハ之ガ爲ニ亡失センカ患者ノ榮養其他一般狀態ヲ佳良ナラシムルヲ期シ得ルモノナリ蓋シ肺ニ於ケル孤立結核ナルモノハ終生其健康ヲ害セザルコトアルモノナレバナリ。

間質性肺炎ニ對スル特殊療法ノ治效タルヤ夫レ洵ニ斯ノ如シ之ヲ以テ今回施行セシ貴社職工ノ健康診査ニ於テ檢出セシ所ノ肺癆患者ニ該療法ヲ施用スルヲ得レバ之ニ據リテ其結核症ニアラザル肺癆者ハ短日內ニ容易ニ其病症ヲ治癒シ身神ヲ爽快ナラシメ働作活潑ト爲リ身神ノ能力ヲ增進シ奮勵シテ業務ニ從事スルニ至ルヤ言ヲ俟タズ而シテ又結核性肺癆者ハ明カニ之ヲ認識スルヲ得ルヲ以テ更ニ持續シテ之ニ加療シ若シ

幸ニシテ其病狀ノ多少恢復シ傳染ノ危險ナキニ於テハ常ニ醫學的監視ノ下ニ其從業ヲ繼續セシメ其然ラザルモノハ徐ロニ之ヲ解雇シ而シテ健康者ヲ以テ次第ニ補充スルニ於テハ工場ハ其業務ノ遂行ニ損害ヲ蒙ムルコトナクシテ職工ヲ健全ナラシメ且之ヲ保護スルト共ニ工場ヲシテ改良健康ナラシムルヲ期スルヲ得ベシ而シテ然ル時ハ啻ニ工場法ヲ有利ニ履行シ其結果ヲ善美ナラシムルノミナラズ社會政策ノ上ニモ亦其利スル所蓋シ尠少ニアラザルベシ然リト雖モ叙上ノ療法ヲ施行スルニ際シテハ之ニ伴フ費用ヲ要スルモノナルヲ以テ輕々ニ論定スベキニ非ザルモ予ハ切ニ望ム貴會社ニシテ此際奮ツテ恩惠的ニ使用職工等ヲ加療シ其身體ヲ健全タラシメ之ニ由リテ前ニ述ブルガ如ク就業能力ヲ增益セシメ業務ヲ督勵シテ大ニ工場ノ面目ヲ新タニシ以テ他會社ニ其模範ヲ示サレンコトヲ之ガ方法ノ如何ニ依リテハ必ズシモ其實行ノ不可能ナル企圖タルニ非ザル可キモノナルヲ信ズ

將來ノ設備

一般肺癆ヲ治療スルノ要ハ其病初ニ之ヲ診知シ而シテ之ニ處スルニ適法ヲ以テスレバ啻ニ其治癒ノ容易ナルノミナラズ患ヲ後日ニ貽スコト無キヲ規トスルモ若シ其然ラズシテ肺癆ノ既ニ增惡セル後ニ之ヲ發見シ或ハ既ニ結核症ニ轉症セル後ニ之ニ加療スルニ於テハ或ハ治療ノ困難ナルモノアリ或ハ治癒ノ不可能ナルモノアルナリ此故ニ之ガ治ヲ托スルノ醫ハ其人ヲ得ルト否トニ由リテ其結果ニ多大ノ差異ヲ來スモノナルハ勿論ナリト雖モ然レドモ患者ノ生活ノ情況ノ如何ト賢愚トハ復タ其治病ニ至大ノ關係ヲ有スルモノナルヲ以テ其療病ノ結果ハ一概ニ醫ノ伎倆ノミヲ以テ輕々ニ之ヲ論斷スベキニ非ザルナリ殊ニ多數ノ職工ニ於テ特ニ其然ルアルヲ知ルナリ。

由來職工ハ其生活上勞銀ノ爲ニ驅ラシテ身體ノ衰弱ヲ顧慮スルノ遑ナク爲ニ其疾病ヲ增惡セシムルモノナルヲ以テ之ヲ救濟スルノ方法トシテハ其罹病スルニ當リテヤ之ニ應ズル治療費ヲ可成的低廉ナラシムルカ又ハ之ヲ無料トナスニアルナリ然ル時ハ患者ハ其療病ノ爲ニ失費スルコト少ナキガ故ニ啻ニ其病症ノ全然治癒スルニ至ルマデ加療スルコトヲ得ルノミナラズ當事者ハ又其使用職工ノ有病者ニ對シ命令的ニ加療セシムルコトヲ得ルノ道理ナリ之ヲ以テ貴會社ノ多ク多數職工ヲ使用スル所ノ工場ニ於テハ醫局及ビ藥局ヲ常設シ醫員及ビ藥劑師ヲ常住シ以テ其治療ニ任ゼシムレバ茲ニ叙上ノ目的ヲ遂行シ得ルモノナルベシ。

工場內ニ醫員ヲ常住セシムレバ此等醫員ニ對シテハ啻ニ既發ノ有病者ヲ治療スルノ任ニ當ラシムルノミナラズ其療病ノ傍ニハ工場內ノ衞生方法ヲ研究セシメテ之ニ據リテ業務ノ爲ニ或ハ職工ノ身體ヲ衰弱セシメ或ハ職工ニ罹病セシメ或ハ職工ノ疾病ヲ增惡セシムル所ノ或原由ヲ知リ而シテ之ヲ全然排除スルカ又ハ一低度ニ減少セシムルコトヲ得バ吾邦ニ於テ現時尙ホ幼稚ナル夫ノ工場衞生法ノ發達ニ利スル所蓋シ少ナカザルモノナルベシ。

工場ニ於ケル使用職工ニ對シテハ寄宿制度ヲ主トナスカ將タ通勤制度ヲ主タラシムルカハ會社ノ營業方針ニ屬スルモノナルヲ以テ素ヨリ其可否ヲ知得セズト雖モ若シ工場內ニ醫局ヲ常設シ醫員ヲシテ職工ノ健康

如何ヲ監視セシムルモノナルニ於テハ醫ハ其業務上ノ便宜ヨリ寄宿制度ヲ以テ最モ可良ナルモノナルヲ思惟ス然リ而シテ其寄宿職工タルト通勤職工タルトニ別ナク一定期日休業セル後ニ再ビ就業スルニ際シテハ縱令疾病ノ爲ニ休業セザルモノト雖モ皆悉ク健康診査ヲ行ハシメ殊ニ疾病休業ノモノニ對シテハ疾病ノ全然治癒スルカ又ハ其病症ハ今尚ホ遺殘スルモ就業ニヨリテ增惡スルコトナキカ又ハ疾病ノ恢復期ニ在リテ就業シツヽ加療スルモ其病症ノ全治スルカヲ査定セシメ醫局醫員ノ就業認可證ヲ交付スルモノニ非ザレバ就業セシメザルヲ規定スルヲ得レバ工場內ニ勞役スル所ノ職工ヲシテ或程度マデ其健康ヲ保持セシムルコトヲ得ルモノナルヲ信ズ。

然リト雖モ或疾病ハ隱裡ニ發生シ其病症ノ伏在シテ漸次ニ增惡スルニヨリ患者ハ其發病ノ時期ヲ知ラザルアリ又發病後一二日ニシテ其病狀ハ全ク亡失シ罹病者ハ其疾病ノ治癒セシヲ自覺スルモ尚ホ其病症ノ隱匿シテ存在アルモノアリ然ル如キハ殊ニ肺癆ノ病初ニ於テ目擊スル所ナリトス之ヲ以テ職工ノ保護策トシテハ少ナクモ春秋二季ニ其工場內ノ作業ニ大ナル支障ヲ來サザルノ程度ヲ以テ全職工ノ健康檢査ヲ施行シ而シテ其際ニ發見スル所ノ有病者ニ對シテハ命令的ニ之ヲ加療セシムルコトヲ規定スレバ職工ヲシテ其健康ヲ向上セシムルコトヲ期待シ得ベシ。以下省畧

以上論ズルガ如ク肺ニ慢性炎症ノ他覺的症狀ヲ呈シ而シテ肺癆ノ一般症狀タル羸瘦、日晡潮熱、盜汗等アリテ且ぴるけい反應ノ陽性ヲ呈スルアルモ之ヲ以テ直チニ其肺ノ炎症ヲ結核性ナリト速了シテ之ヲ結核性肺癆ト診斷スルハ大ナル誤謬ニ陷ルモノナルヲ以テ此際ニハ先ヅ連鎖狀球菌性間質性肺炎ノ特殊療法ヲ行ヒ或ハ葡萄狀球菌わくちんノ治療ヲ加ヘ而シテ之ニ據リテ非結核性炎症ヲ亡失セシムルモ尚ホ肺ニ於ケル濁音及ビ呼吸音ノ常態ニ恢復セズ此等變常ヲ以テ肺若クハ肋膜ノ非結核性炎症ノ治癒的瘢痕ニ因スルモノト理解スルコト能ハズシテ或ハ常溫ナルカ或ハ發熱其他一般肺癆ノ病狀ヲ呈スルカ又ハ胸部ニ於ケル理學的變常ハ全ク健常ニ復スルモ尚ホ發熱其他一般肺癆症狀ヲ呈スルアレバ茲ニ始メテ其病症ノ結核性ナルヲ推定セザルヲ得ズ蓋慢性肺炎ヲ以テ結核性肺癆ナリト誤認セシ過去ニ於テハ肺結核ノ診斷ハ比較的ニ容易ナリシト雖モ慢性肺炎ノ最大多數ニ於テ其發病ノ元始ハ連鎖狀球菌性間質性肺炎ニシテ其慢性ニ經過スル間ニ結核菌ノ混合傳染ヲ致スニ由リテ病症ノ或時期ニハ結核性肺癆ヲ併發スルモノナルヲ知得スルニ至リテハ他日的確ナル肺結核診斷法ノ發見セラレザル限リハ止ヲ得ズ敍上ノ治療的識別法ヲ用ヒテ之ヲ判識セザルヲ得ズ。

連鎖狀球菌性間質性肺炎ノ存在ノ普ネク知得セラレ其特殊療法ノ巧ニ應用セラレテ其病症ヲ早期ニ痊癒セシムルニ於テハ國民ノ慢性肺炎ヲ或少數ニ減退シ之ニ從フテ結核性肺癆モ亦減少シ且斯病ニ後發スル神經衰弱症、肝臟腫大、腹膜炎、多發性神經炎、胃腸障碍等モ復タ之ヲ免カレシムルコトヲ得ベシト雖モ現時ノ醫界ニ於テハ未ダ斯病ノ存在ダモ尚ホ知ラザルアリ況ヤ其治療ヲヤ早期ニ之ガ診療ヲ望ミ得ベキニ非ズ加之ナラズ斯病ハ潛在性ニ發生シ多大ノ病苦ヲ呈セズシテ慢性ニ經過スルモノナルヲ以テ縱今當ニ其自己ノ健康ニ注意スルノ士人モ尚ホ斯病ニ罹患スルヲ知ラザルアリ況ヤ其自己ノ健康ニ注意セザルモノヲヤ多少ノ違和ヲ覺

ユルアルモ其療養ヲ怠リ而シテ其病症ヲ漸次ニ增惡シ而シテ結核菌ノ沈着ヲ致サシメ比較的早期ニ結核性肺痨ニ陷ルモノ敢テ稀少ナルニ非ザルベシ況ヤ吾人ノ日常診療スル所ノ患者ハ既ニ其病症ノ或度ニ增進セルモノ比較的多數ヲ占ムルモノナルニ於テヲヤ故ヲ以テ從令慢性肺炎ニ對スル特殊療法ハ發見セラルヽアルモ亦結核性肺痨ニ對スル治法ヲ研鑽セザルヲ得ズ。

予ハ近來重惡ナル肺痨患者ヲ診療スルノ幸期ニ接スルコト極メテ少ナシ故ヲ以テ結核性肺痨ノ治法ヲ研究スルノ日ハ尙ホ淺シト雖モ多少ノ實驗ナキニ非ズ而シテ結核菌製劑タルヤ數種ノ別アリテ從來世人ノ研究ニ據レバ殆ド皆ナ治病ノ效績ナキモノナルガ如シ然シテ予ハ往年眼結膜ノ結核ニ對シ舊つべるくりんノ偉大ナル治效アルヲ知レリ今之ガ概略ヲ摘記スルコト次ノ如シ

第二十四病例　庭野某女　二十七才

大正二年一月中旬ヨリ右肩胛上部ノ間質性肺炎及ビ顆粒性結膜炎ニテ時々加療セリ同年五月々初ニ右眼球結膜ノ外背ニ相當スル部ニ於テ角膜緣ニ近接シテ灰白色水泡狀ノ結節ヲ生ジ外背ノ方向ニ向テ星尾狀に血管ノ擴張アリ角膜ニモ亦水泡狀ノ結節アリテ角膜周圍充血アリ依テとらほーむニ續發セシ水泡性炎ナルベシト思惟セリ

六月二十四日　右眼ノ周圍充血ハ消失スルモ角膜緣ニ近接セル結節及ビ血管擴張ハ依然トシテ存シ且其部ノ組織ニ肥厚ヲ來シ且角膜ノ水泡ハ消失スルモ淡キ濁濁ヲ殘セリ

兩肩胛上部及ビ左肩胛下部ハ共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ニ呼息少シク延長セリ下腹部ハ輕濁ニシテ按壓スルニ抵抗增加シ且壓痛アリ患者云フ時々自發痛アリト

診斷　間質性肺炎　腹膜炎　とらほーむ漿水泡性結膜炎

處方

狼把草煎　八、〇　二〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　四、〇
苦味丁幾　四、〇　メンタ水　一〇、〇
右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　二十四粒
右一日三回食後二日分服

佐氏塗布劑
右塗腹料
一〇%硫酸銅水
右洗眼料
一%硼酸水　三〇〇、〇
右微溫罨法料

七月十三日　腹部ノ異常ハ亡散スルモ肺部ノ異常ハ依然トシテ存シ且眼ノ病變ハ其病初ヨリ洗眼、微溫罨法ヲ行フモ啻ニ消退セザルノミナラズ更ニ右眼結膜ノ內背部ニ相當スル角膜緣ニ近接シテ灰白色ノ結節アリ又虹彩ノ外背部ニ相當スル部ニ少シク黃色ヲ帶ベル結節ヲ生ズ是ニ於テ始メテ其眼ノ結核ナランヲ疑フ

處方

狼把草煎　前方
結劑　四號膠囊六個
右一日三回食後二日分服

千倍アクトール　五、〇　一%コカイン水　五、〇
右自宅點眼料

八月四日　肺部ニ異常ナシ然レドモ眼ノ病變ハ依然タリ患者云フ前日東京醫科大學眼科部ニ診ヲ乞ロシニとらほーむナリト云ヘリト此日始メテつべるくりんノ注射ヲ試ム

處方

舊ツベルクリン　〇、〇〇一
右上膊ノ皮下ニ注射ス

八月七日　前回つべるくりん注射後ハ體溫三十七度ニ昇リシコトアリシト該注射部ハ少シク硬結シ腫脹シ壓痛アリ

處方

舊ツベルクリン　〇、〇〇二
左上膊ノ皮下ニ注射ス

八月八日　昨夜體溫三十六度五分ナリシモ少シク倦怠ヲ感セリ、注射部ハ五厘錢大ニ發赤セリ眼球結膜ハ殊ニ結節部ノ周圍ニ於テ少シク發赤ス、肺ニ異常ヲ呈セズ

八月九日　結膜ニ存セシ結節ノ充血ハ大ニ消褪シ角膜ノ濁濁ハ大ニ吸收セラル然レドモ虹彩ニ於ケル結節ハ依然タリ

八月十三日

處方

舊ツベルクリン　〇、〇〇四

左上膊ノ皮下ニ注射ス

八月十五日　注射後ニ發熱ナシ而シテ注射後ニ發赤ノ增加セシ結膜結節周圍ノ充血ハ消褪シ眼ノ症狀大ニ佳良ニシテ其自覺的症狀モ亦ヨロシ肺ニ異常ヲ認メズ

八月十九日

處方

舊ツベルクリン　〇、〇〇五

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

八月二十日　昨夜體溫ノ增加ヲ來サザリシモ倦怠甚ダシカリシト右眼結膜ノ發赤ハ顯著ニシテ且角膜ノ上緣ニ近接セル結膜ニ三四個ノ結節ヲ新生セルガ如キ看アリ然レドモ肺部ニ異常ヲ認メズ

第二十五病側　新井某女　十六才

大正二年八月三十一日以降顆粒性結膜炎及ビ右眼結膜ノ外背部ニ相當セル角膜緣ニ近接シテ水泡性結膜炎？加療セシニ毫モ輕快スルノ微ナシ九月十一日胸部ヲ檢セシニ右肩胛間部中央以上ト左肩胛間部棘以上トハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ニ呼息少シク延長セリ依リテつべるくりんノ注射ヲ試ム

處方

狐把草煎(八、〇)二〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　四、〇

苦味丁幾　四、〇　メンタ水　一〇、〇

右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　十二粒

右一日三回食後二日分服

舊ツベルクリン　〇、〇〇〇五

左上膊ノ皮下ニ注射ス

九月十二日　兩肩胛上部ハ打診聽診共ニ異常ヲ認メズ右眼結膜ノ充血ハ依然トシテ存シ毫モ消褪セシ樣ナシ依テ試ミニつべるくりんヲ減量シテ注射ス

處方

舊ツベルクリン　〇、〇〇三

左上膊ノ皮下ニ注射ス

八月三十日　注射部少シク發赤ス

八月三十一日　眼球及ビ眼瞼結膜ハ共ニ發赤甚シ肺部ニ異常ヲ認メズ

九月三日　結膜ノ充血ハ大ニ消褪スサレド虹彩ノ結節ハ何等變化スルコトナシ

結節ハ其周圍ニ少シク充血ヲ增ス注射部ハ疼痛アルモ發赤セズ

九月十四日　兩肩胛下隅以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音ハ粗雜ニ呼息少シク延長ス

處方

斯ノ如ク舊つべるくりんヲ注射スルニ其〇、〇〇一乃至〇、〇〇〇五ハ用量多キニ失シ更ニ用量ヲ增加スレバ從來健全ノ看ヲナセシ結膜ニ結節ヲ新生スルコトアルヲ知レリ是ニ於テカ尙ホ其微量ヲ注射センコトヲ思ヘリ然レドモ予ハ眼科醫ニ非ザルヲ以テ適當ナル患者ニ遭遇スルコト極メテ稀ナリ。

第二十六病側　加藤某女

會社員某氏ノ妻ナリ一日偶然其會社ニテ遭遇シ其眼結膜ノ結核ヲ患フルヲ知リ洗眼療法ノ效力少ナクシテ注射治療ノ偉效アルヲ告ゲ時ニ大正三年秋日ナリシ其翌日つべるくりんヲ注射ス

處方

舊ツベルクリン　〇、〇〇〇五

右上膊ニ注射ス

其翌日檢スルニ注射部ニ異常ナク永ラク加療シ毫モ充血ノ消褪セザリシ患部ハ全ク褪色シ只其部ニ肥厚ヲ殘ス而シテ患者ノ自覺症狀ハ一掃セリ然ルニ約一ヶ月ヲ經テ再ビ同部ニ發赤セルノ故ニ亦注射センコトヲ乞フ

處方

舊ツベルクリン　〇、〇〇〇一

右注射ス

翌日檢スルニ結膜ハ却テ其發赤ヲ增セリ

處方

舊ツベルクリン　〇、〇〇〇五

右注射ス

翌日檢スルニ其頑固ナル發赤ハ全ク亡失シ組織ハ少シク肥厚ス其後月餘ヲ經テ再ビ水泡樣結膜炎ハ同一部位ニ發生ス一日知人某醫ノ來リ宿スルアリ談偶々頑固ナル水泡性結膜炎ニ及ブ依テ患者ヲ示シつべるくりんヲ注射ス

處方

舊ツベルクリン　〇、〇〇〇〇五

右注射ス

翌日知人ト共ニ檢スルニ全ク充血ナシ耳後約一年半有餘ヲ經ルノ今日ニ至ルモ再發セシコトナシ

叙上ノ二例ハ單ニ記憶ヲ記スルノミ而シテ斯ノ如キ治療例ハ尚ホ二三ヲ有スルヲ知ル茲ニ於テカ益々從來世人ノ使用セシつべるくりんノ用量ハ過多ニ失スルガ爲ニ啻ニ結核性病竈ノ炎症ヲ增加スルノミナラズ併存セル非結核性炎症ヲ增强シ而シテ其治療ノ結果ヲ不良ナラシムルモノナルヲ信ズ上記ノ新井某女ノつべるくりん注射後ニ其背部ノ變狀ハ一旦消失シ次デ增大セルニ徵スルモ亦之ヲ證スルニ足ルナリ。

つべるくりんノ眼ノ結核性病竈ニ治效ヲ奏スルニ係ハラズ其肺結核患者ニ治效ナキ所以ノモノハ一ハ從來其用量ノ多キニ失セシニ因由スト雖モ尚ホ他ニつべるくりんノ刺戟ノ爲ニ非結核性氣管枝肺炎ノ其炎症ノ增惡ヲ來スアルヲ思ハザル可カラズ此故ニ肺癆患者ヲ治療スルニ當リテハ先ヅ其原病タル非結核性間質性肺炎ハ特殊療法ヲ以テ之ヲ痊癒セシメ若シ結核菌ノ混合傳染ヲ致スアレバ之ニ由リテ結核性病竈ヲ孤立セシメテ而シテ後ニ結核菌製劑ヲ以テ加療スル時ハ必ズ其治效ノ見ルベキモノアルヲ信ズルヲ得ルナリ。

市場ニ於ケル結核菌製劑ニハ數種アリ予ノ這般ノ目的ヲ以テ肺ノ結核性病竈ニ加療セシ實驗ハ其數少ナクシテ未ダ何レノ結核菌製劑ノ其治效ノ最モ佳良ナルヤヲ斷言シ得ルニ非ズト雖モ一二ノ實驗例ヲ記述シ以テ予ノ叙上ノ想像ノ誤謬ニ非ザルヲ立證セントス

其一。　つべるくろときそいちん療法ヲ併用セシ治驗

第二十七病例　山本某女　二十八年　農

十三歲ノ時ニ右角膜炎ニ罹リ加療後翳ヲ殘シテ治セリ然ルニ昨年十二月右眼ニ微痛ヲ覺ヘ視力ノ障碍ヲ來セシヲ以テ眼科醫ノ治療ヲ受ケシモ視力ノ障碍恢復セズ且其治療中ニ漸次ニ身體ノ衰弱ヲ覺ヘ目下尚ホ肩こり、眩暈、頭痛、惡寒、呼吸促迫、脚部ノ冷感及ビ多少ノ咳嗽アルヲ以テ診ヲ乞フト云フ

大正六年四月十七日　診ス　胸前後一般ニ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ兩背胛下部ハ體位ノ變換ニヨリテ濁音ノ異動アルヲ以テ其滯水ナルヲ知レリ右眼ニハ角膜中層炎アリ少シク貧血ス診時體溫三十六度九分

診斷　間質性肺炎

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　苦味丁幾　四、〇

右一日三回二日分服

結劑　四號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

四月十七日　〇、一五cc　十九日　〇、三cc

四月二十一日　二三日來殊ニ寒氣スト便通ナシ

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　硫酸苦土　三〇、〇

苦味丁幾　四、〇

右一日三回食前午時二日分服

結劑　前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四五

右注射ス

四月二十三日　夜分發熱ス咳嗽アリト

處方

佐氏煎（八、〇）二〇〇、〇　硫酸苦土　三〇、〇

杏仁水　八、〇　苦味丁幾　四、〇

右一日三回食前午時二日分服

結劑　前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

四月二十五日　左右前腋ニ異常ナシ兩背部ノ病變ハ依然タリ然レ共肩ノこりハ大ニ宜シト云フ　内服藥ハ各前方ヲ與フ

葡萄狀球菌ワクチン　〇、二

右注射ス

四月二十七日　尚ホ寒氣スト然レド面色少シク宜シ　内服藥各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

四月二十九日　一昨日注射後ニ寒氣セリト雖時間後共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ　内服藥ハ各前方ヲ與フ

葡萄狀球菌ワクチン　〇、四

右注射ス

五月一日　患者ニフ本日ハ氣分大ニ良ク咳嗽ハ回数ヲ少ンジタスト雖兩肩胛下隅以上ハ殆ド異常ナキモ圓肩胛下隅以下ハ打音輕濁ニシテ呼吸音極メテ弱ク前胸部ニ異常ナシ

處方

佐氏煎劑　前方

結劑　三號膠囊六個

右一日三回食後二日分

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

五月三日　氣分宜シキモ尚ホ時々ふけさめアリト右背全部及ビ左肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ　内服藥各前方

葡萄狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

五月五日　背部ハ打音ニ異常ナキモ右背部ハ呼吸音弱シ　内服藥各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、七

右注射ス

五月七日　氣分大ニ回ロシ　内服藥各前方

葡萄狀球菌ワクチン　〇、八

五月九日　昨日ハ腰痛アリ今日ハ少シク熱感アリト右背部及ビ左肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ　内服藥各前方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、七

右注射ス

五月十一日　兩肩胛上部ハ打音異常ナキモ呼吸音弱シ患者云フ本年二月ヨリ月經ナク昨今下腹部ニつる感アリト始メテ增大セル子宮ヲ診知セルモ其發育稍小ナリ

處方

稀鹽酸　二〇〇　苦味丁幾　四〇〇

重機丁幾　一〇〇　單舍利別　一〇〇

水　二〇〇〇

右一日三回二日分服

結劑　前方

葡萄狀球菌ワクチン　一〇〇

右注射ス

五月十三日　下腹ノつるコトナシ　内服藥各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、七

右注射ス

五月十五日　兩肩胛間部中央以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ兩肩胛下部ニ濕水アリ尚ホ頭重アリト　内服藥各前方ヲ與フ

ツベルクロトキソイヂン　〇、一

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

五月十七日　兩肩胛間中央以上ノ濁性少シク減ズ　内服藥各前方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、七

右注射ス

五月二十一日　左肩胛上部ハ打音異常ナキモ呼吸音弱シ右肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音極メテ弱シ右肩胛上隅ヨリ肩胛間部中央部マデハ打音異常ナキモ呼吸音弱シ肩胛下部ニ異常ナシ角膜ノ濁濁少シク去ル患者云フ氣分宜シト

處方

結劑　二號膠囊六個

右一日三回食後二日分服

稀鹽酸劑　前方

ツベルクロトキソイヂン　〇、二

右注射ス

五月二十三日　兩背部ニ異常ナキモ兩肩胛上部ノ呼吸音ハ尚ホ微弱ナリ角膜ノ濁濁大ニ去ル　内服藥各前方ヲ與フ

つべるくろときそいぢんヲ注射スルコト次ノ如シ

二十三日　〇、三cc　二十五日　〇、四cc　二十七日　〇、五cc

二十九日　〇、五cc　三十一日　〇、六五cc

六月二日〇、八cc

六月四日　背部ニ異常ナシ患者ハ食欲振子宮ノ家行ニ支障ヲ來スコトアランヲ恐レ分娩後ノ加療ヲ約シテ歸國セリ

第二十八病例　小宮某男　十六才

兩肩胛間部中央以上ノ間實性肺炎、下腹腰炎、及ビ脾臟腫大ニ不明ノ高熱ヲ併發シ加療スルコト三十餘日ニシテ體溫三十八度以下ニ下降セリ其間ニわくちん注射療法ニヨリ背部ノ病變ハ一時亡失セシモ次デ再ビ發症スルニ至レリ今其治療ノ大要ヲ記スレバ

大正六年七月二十三日　兩肩胛間部中央以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ脾部ニ濁音ヲ呈ス下腹部ハ打音輕濁ニシテ抵抗アリ壓痛アリ體溫三十八度二分

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

七月二十四日　〇、一五cc　二十六日　〇、三cc　二十八日　〇、四五cc

七月三十日　背部ニ異常ナシ體溫朝三十九度六分夕刻三十九度

八月三日　兩肩胛間部中央以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ體溫朝夕三十九度

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

葡萄狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

八月三日　〇、二cc　五日　〇、四cc　八日　〇、六cc

八月十日　背部ニ異常ナシ體溫朝三十八度五分夕三十八度九分

八月十三日　兩肩胛上部打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ體溫朝三十八度九分夕三十八度九分

特製連鎖狀球菌わくちんヲ注射スルコト次ノ如シ

八月十三日　〇、六cc　十五日　〇、六cc　十七日　〇、六cc

八月十九日　兩肩胛上部打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ朝三十八度三分夕三十八度二分

葡萄狀球菌ワクチン　〇、八

右注射ス

八月二十二日　背部ニ異常ナシ

處方

佐氏煎(一〇、〇)二〇〇、〇　撒里矢爾酸曹達　四、〇
食鹽　二、〇　苦味丁幾　四、〇

右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　十二粒

右一日三回食後二日分服

八月二十八日　兩肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ脾部ニ濁音ヲ呈ス

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

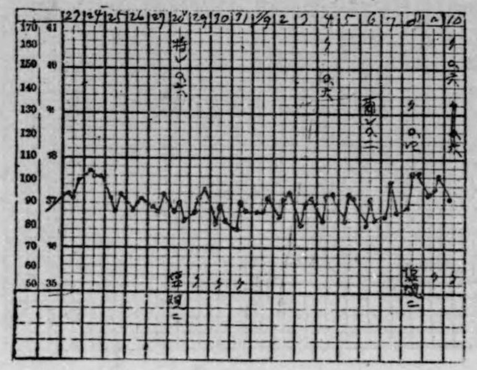
右注射ス

鹽酸キニーネ　〇、四

右一包量　朝夕一包頓服

八月三十一日　背部ニ異常ナシ

九月一日　右肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ



九月四日　兩肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ兩肩胛下部ニ濕水アリ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

九月六日　兩背全部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ　佐氏煎劑　結丸　各前方

葡萄狀球菌ワクチン　〇、二

右注射ス

九月八日　兩肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ脾部ニ濁音ヲ生ズ

處方

佐氏煎劑　結丸　各前方
鹽酸キニーネ　〇、四

右一包トナシ四包ヲ與フ　朝夕一包頓服

葡萄狀球菌ワクチン　〇、四

右注射ス

九月十日　右肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ　內服藥各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

九月十一日　右肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ脾部ニ濁音ナシ　佐氏煎劑　結丸　各前方ヲ與フ

葡萄狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

九月十三日　右肩胛下隅以上左肩上部ハ共ニ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ而シテ體溫ノ依然トシテ下行スルノ傾向ナキヲ以テつべるくろときそいちんノ注射ヲ試ム　內服藥ハ各前方ヲ與フ

ツベルクロトキソイヂン　〇、一

右注射ス

九月十五日　右肩胛間部棘以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ內服藥各前方

ツベルクロトキソイヂン　〇、二
右注射ス

九月十七日　兩肩胛間部棘以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ熱候依然タリ

處方
佐氏煎劑　前方
結劑
四號膠囊六個
右一日三回食後二日分服

ツベルクロトキソイヂン　〇、三
右注射ス

九月十九日　熱候下低ノ兆ヲ生ズ然レドモ兩背部ノ病變依然タリ　內服藥各前方

ツベルクロトキソイヂン　〇、六
特製連鎖狀球菌ワクチン
右注射ス

九月二十一日　右肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音少シク粗烈ナリ左肩胛上部ニ異常ナシ大ニ肥ヘタリ患者云フ病前學校ニテ體重九貫百五十目アリトノ之ヲ秤ルニ九貫二百目アリタリ　佐氏煎劑　結劑　各前方ヲ與フ

ツベルクロトキソイヂン　〇、四
右注射ス

九月二十三日　右肩胛上部ニ異常ナシ然シ右肺尖ハ少シク鈍ン內服藥各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六
右注射ス

九月二十五日　右肩胛上部ノ病變前ト同シ　內服藥各前方

ツベルクロトキソイヂン　〇、五
右注射ス

九月二十七日　右肩胛上部ノ病變前ト同シ　內服藥各前方

ツベルクロトキソイヂン　〇、五
右注射ス

九月二十九日　右肩胛上部ニ異常ナシ體重九貫二百三十目　內服藥各前方

つべるくろときそいぢんヲ注射スルコト次ノ如シ

九月二十九日　〇、六cc　十月一日　〇、七cc　三日　〇、九cc　五日　〇、九cc

本患者ハ慢性間質性肺炎ノ經過中ニ不明ノ熱性病ニ罹リ其高熱ハ下降セシムル右肩胛上部ニ打音ノ輕濁ト呼吸音ノ微弱トヲ貽殘シ且輕微ノ熱候アリ而シテ連鎖狀球菌わくちん及ビ葡萄狀球菌ワクチン

其二　つべるくろときそいぢん及ビ舊つべるくりんヲ併用セシ治驗

第二十九病例　勝浦某女　四十四年

約半月以前ニ頭痛アリ二日ニシテ治セシモ爾來肩こり眉間ノ深部ニ不快ノ感アリ夕刻ニ惡寒アリ且盜汗アリ五六日間ニ亦兩鼻腔ニ腫物ヲ生ゼリト而シテ多年不眠ヲ患ヒ足冷ヘ且足ノ重キコトアリ八年前ニ尿道出血セシコトアリ

大正六年五月十六日　診ス兩背全部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ上膊筋、指球筋、膝蓋筋等ニ提痛アリ膝蓋腱反射亢進セリ診時體溫三十七度五分

診斷　間質性肺炎　多發性神經炎

處方

佐氏煎（八、〇）　二〇〇、〇　苦味丁幾　四、〇
メンタ水　一〇、〇
右一日三回二日分服

佐氏結劑阿曹篤丸　十二粒　斯篤里規尼澀丸　六粒
右六包トス一日三回食後二日分服

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、一五
右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

硼酸軟膏　一〇、〇
右鼻腔內塗布

五月十八日　內服藥ハ各前方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、三
右注射ス

五月二十日　患者云フ肩ノこるコトナク善ク就眠スト　兩背部ハ打音異常ナキモ呼吸音弱シ　內服藥ハ各前方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、四五
右注射ス

五月二十二日　氣分大ニ宜シ食慾進ミ肩ノこるコトナク善ク眠ル

ンノ注射ハ更ニ效ナクつべるくろときそいぢんヲ注射シ其一回ノ注射量〇、三ccニ至リテ熱候ノ下行ヲ來シ次デ常溫ニ復シ且右肺上部ノ理學的變常モ亦漸次ニ亡散セリ然ル如キハ之ヲつべるくろときそいぢんノ效ニ歸セシメザルヲ得ズ

ト兩背部ハ打音ニ異常ナキモ呼吸音弱シ　内服藥ハ各前方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

五月二十四日　右背全部ハ輕濁ニシテ呼吸音弱シ左背部ハ打音異常ナキモ呼吸音弱シ　内服藥各前方

葡萄狀球菌ワクチン　〇、二

右注射ス

五月二十六日　右肩胛間部中央以上及ビ左肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ　内服藥ハ各前方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

五月二十八日　兩肩胛下隅以上ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ　内服藥各前方

葡萄狀球菌ワクチン　〇、四

右注射ス

五月三十日　内服藥ハ各前方ヲ與フ

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

六月一日　兩背全部輕濁ニシテ呼吸音微弱ナリ昨今ヨク睡眠スト云フニ由リ斯篤里規尼涅丸ノ服用ヲ休止ス

處方

佐氏煎(八、〇)　二〇〇、〇　苦味丁幾　四、〇

メンタ水　一〇、〇

右一日三回二日分服

佐氏結列阿曹篤丸　十八粒

右一日三回食後二日分服

ツベルクロトキソイヂン　〇、二

右注射ス

六月三日　兩肩胛上部ノ濁性少シク減ズ　内服藥各前方

ツベルクロトキソイヂン　〇、五

右注射ス　此日誤リテ斯ク多量ヲ注射セシナリ

五月五日　兩背部打音ニ異常ナキモ呼吸音弱シ　一昨夕ヨリ右眼瞬陶敷ヨシ故之ヲ檢スルニ外眥部ニ相當スル眼球結膜ニ限局セル充血アリ　内服藥各前方

ツベルクロトキソイヂン　〇、六

右注射ス

六月七日　右肩胛間部棘以上左肩胛上部ハ打音輕濁ニシテ呼吸音弱シ　内服藥各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

六月十日　背部ニ異常ナシ

六月十二日　昨今ヨク夢ミルト云フ

處方

佐氏結列阿曹篤丸　十八粒　斯篤里規尼涅丸　六粒

右一日三回食後二日分服

佐氏煎劑　前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

六月十四日　本店横濱ニアルヲ以テ從來當所ヨリ往復スレバ既ニ往時ニ汽車内ニテ背部ヨリ頭部ニカケツマリテ翌日ハ就臥スルヲ例トセリ然ルニ昨日ハ横濱ニ行キ即日歸リ來リシモ別ニ異常ヲ覺ヘザリシトテ喜ビ談レリ兩背全部ハ打音ニ抵抗アリ呼吸音ハ微弱ナリ　内服藥ハ各前方ヲ與フ

十萬倍舊ツベルクリン液　〇、二

右肩胛間部ノ皮下ニ注射ス

六月十七日　背部ノ濁性大ニ減ズ　内服藥各前方

十萬倍舊ツベルクリン液　〇、三

六月二十日　背部ノ濁性大ニ去ル少シク頭痛アリト　内服藥各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

續發性肺炎之特殊療法

右注射ス

六月二十三日　背部ニ異常ナシ　内服藥各前方

十萬倍舊ツベルクリン液　〇、四

右注射ス

六月二十五日　氣分大ニヨロシ夢ミルコトナシ背部ニ異常ヲ認メズ　内服藥各前方

特製連鎖狀球菌ワクチン　〇、六

右注射ス

六月二十七日　本病ヲ自覺セシヨリ茲ニ八年ノ間ハ暑中ト雖モ常ニ足袋ヲ穿チ足部ノ冷感ニ堪ヘザリシモ昨日來足袋ヲ穿ツチ廢セシモ冷感ヲ覺ヘズトテ喜ベリ兩三日便通ナシト云フ背部ニ異常ナシ

處方

佐氏煎劑　結丸　斯丸　各前方

佐氏通痢丸　十粒

右朝夕五粒宛服用

十萬倍舊ツベルクリン液　〇、五

右注射ス

六月二十九日　背部ニ異常ナシ　佐氏煎劑　結丸　斯丸　各前方ヲ與フ